



所謂 Memnon の大像

中の人物であるためではなくて、もつと遙に優美艶麗花の如く夢の如き Pappio memnon を聯想せしむるからである。而も其北方のものは拂曉一種の音を出すこと泣くが如く慇懃するが如くなので特に有名になつた。そこで早速これに就て神話が製造された。夫れを紹介しておかう。

トロイの戦争で討死をしたメムノン^{Memnon}は石像となつてシープズの平野に出現をした、そして毎朝早く其母神 Eos が附近を徘徊する時、右像は一種微妙な音を出して歓迎する、さうすると母神は其音を聞き、我が愛子の呼べるを知り悲みを新にして落涙をする、草の葉における朝露は此女神の涙である。石像が怒れる時は此の音は聞く事が出来ぬ。

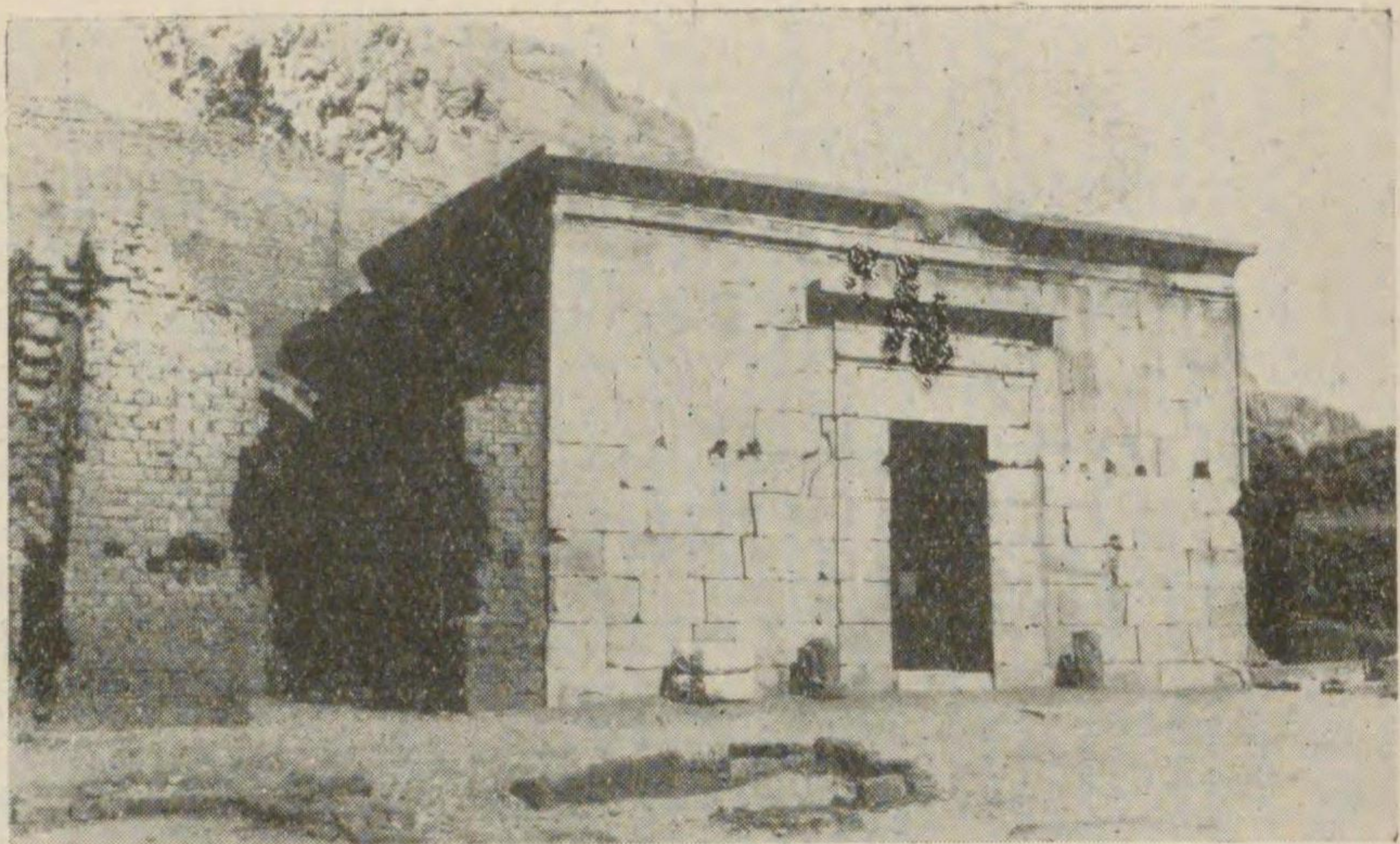
と、所が不幸にして此神話は Septimius Severus 以降不通になつた、なぜなら此王が像の修理を命ぜられたところ、従事した職人が叮嚀にやらなかつたせい、反て餘計なことをした様なもので、其時以來まるで石像は泣かなくなつて了つたからである。併し夫れなら夫れで、またうまく辻褃のあふ様に、神話をもう少し作ればいゝのに、さうしないでやめちまつたらしい。

我國には佐夜の中山夜啼石といふのがあつて、實物はまだ見ぬが、繪でみると路傍に轉がつてゐるいゝ加減な石ころであつて、これが夜になると、啼くさうである。奈良の元興寺には俗に『啼燈籠』と稱する大凡南北朝頃(延元元年の銘があると古書に出てるが今は磨滅して判らぬ、様式から観ると延元元年のとして差支ないのである。)の立派な石燈がある。此は今奈良帝室博物館構内にあるが、少しも啼かぬ様である。河内の野中寺には俗に『啼瓦』

と云ふ古瓦がある。法隆寺にある有名な蓮花紋の各瓣のうちへ忍冬模様をつけたのを真似した様な瓦である、何故啼瓦といふのか知らぬが、いづれいつか一度はない事があるからであらう。石燈にせよ此の瓦にせよ其昔し啼いたのは夜か晝か明瞭でない。夫れはどうでもよろしい。夜にしても晝にしても、啼いたものは何れも小規模の石ころか又は工藝品だから知れたものだ、けれども高さ七十尺もある大石像がシープズの平野で腰掛けたまゝ朝泣きをやつたのは如何にも壯觀(?)であつたらうと思はれぬ。

朝起る時機嫌が悪く、殆んど毎朝の様に駄々を捏ね、じぶくりちらして母親を困らせるあまやかしの坊つちやんの様に、石像がなぜ泣くかといふと、夜は温度下降して意外に寒く、石が冷へきつてゐたところに、朝になると急に暑い日光が直射するので、石の表面が從て急に熱せらるゝ結果、石の細片が表面からはね飛ばされる爲めだと説明されたのであつた。故にこの現象は敢てこの像のみではなく、まだ他にいくらかもあるといふことである。

私は此大像に多大の期待をして歩を進めた、ところが行つてみたら像の邊は今迄汎濫してゐた内流河の水が漸くひいた許りで、まるで我國の水田と同じく、本道より分れて大像に向ふ一條の幅約一尺位の小徑を行ける丈け行つたが、靴のまゝではどうしても近づけぬ。そこで仕方なしに馬子に負はれて近くへ行き、少しく乾いた様なところへ下りて寫眞を撮つたが、これ丈けでは満足が出来



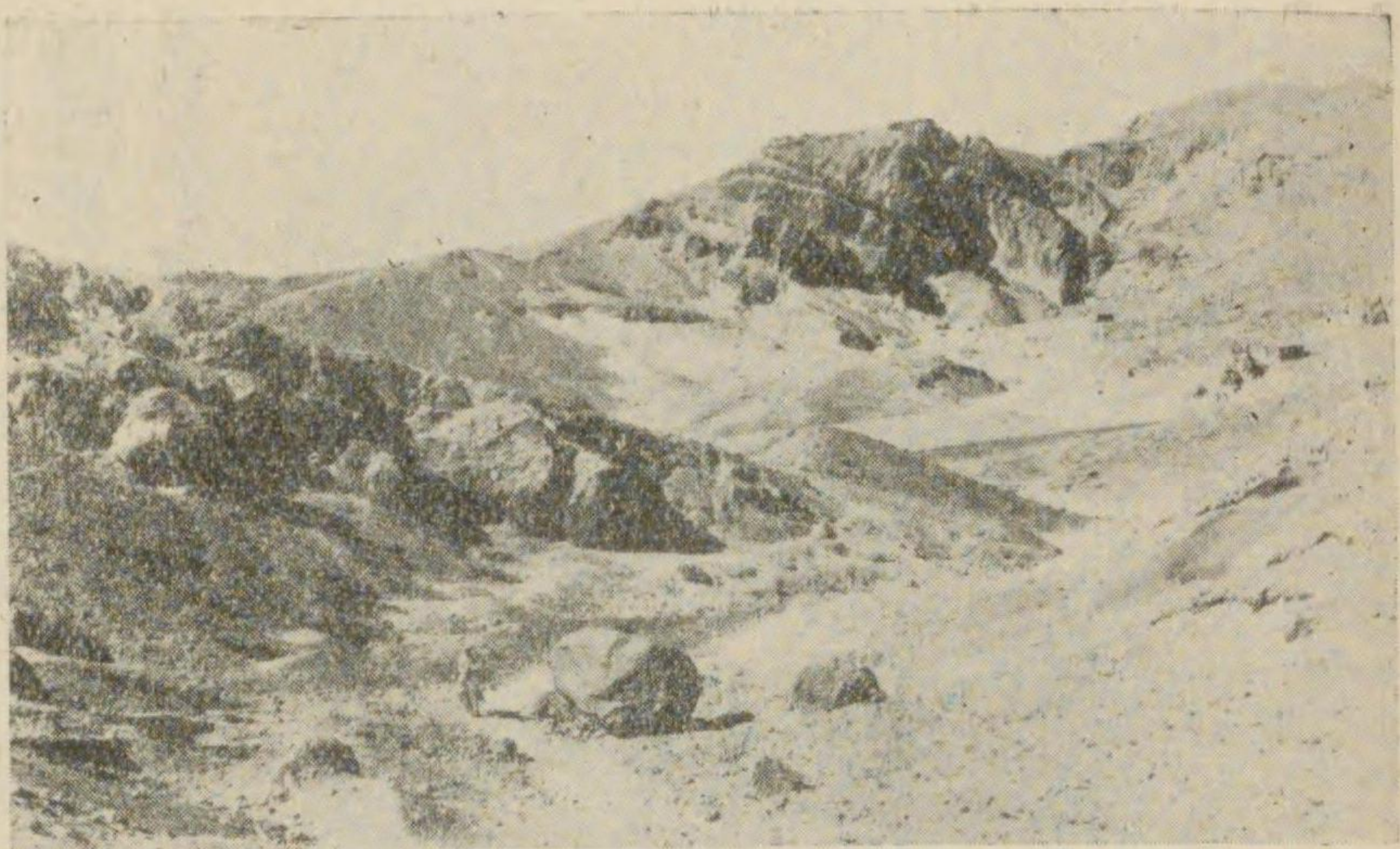
庵僧堂

ぬ、もつと敬意を表する爲めもう一度馬子におんぶして北像を一巡したが、随分ひどく破損をしてゐるのに少なからず驚かされた。實は南像へも近づき度かつたが、思ひ切つて歸る事にした。

本道へ出るまでに馬子は心附の催促に及んだ。其理由とするところは、到底行けさうもないところへ奮勵努力して行つたのだから、定めて満足したらう、どうか自分の功勞を認めてくれといふにあつた。其通り如何にも私は満足したのであつたが、こんな事はしまひになつてから言へばいいのに、くれるかくれぬか知れぬうちから催促ではいやになる。そこで私は幸にお前の骨折でみる事が出来て大満足だつたから、ムスタファにさう言つておく、會計はあの男に任せてあるから、あとであの男に貰つたらいいだらう、といった丈けで多少の持合せはあつたが私からはやらなかつた。

本道へ出てから暫くの間は正直に歩いたが、案内人は途中から近みちをするつもりで水のひいた所をはすに突切らうとしたところ、泥土以外に深く泥田の中で進退谷まつたところへ、何處からともなく土人一人出現して驢馬を導き漸く逃れて本道へ出た、そこで案内人に命じ心附を與へさせたところが、有難うといふだらうと思ひのほか、暫く何か言ひ争つた揚句、私に向ひたつたこれ丈けといふ素振をして今貰つた錢をみせた、みると十五ミリム(約我十五錢)ある、成程これは少しく可愛想である。そこで私はもう十五ミリムやつたら直につけ上つてもつとくれといふ、怪しからんから直に驢馬へのつて出かけた後、後ろで何やら罵る様な聲がした。私は案内人にあれでも未だ少いかとときいたら、『あんな男にいくらやつても切りがありません、私が最初やつた丈けで充分なのにあなたがあとから倍にしてやつたので、直につけ上つたのです』といった。夫れからまた少しの間炎天干にあつてから、Deir el-Medineh——12 Dér al-Madinat = Town Convent——の堂の前で下馬した。

此のデイル・エル・メデネの堂は『王陵』に通ずる路傍に在つて、泥土煉瓦を以て積める塀で圍まれてゐる小堂である。主として女神ハソール及びマート (Maat) とに捧げたもので、正面から見たところは挿圖の如く甚だ簡素で、たゞ入口の上と軒とに埃及一流の線形があるばかりである。堂は耶蘇教時代には一時宣教師の住居に用ひられたために、北僧庵堂と同様壁面の裝飾も大分ひどい目



女王陵への道 (前十時半頃)

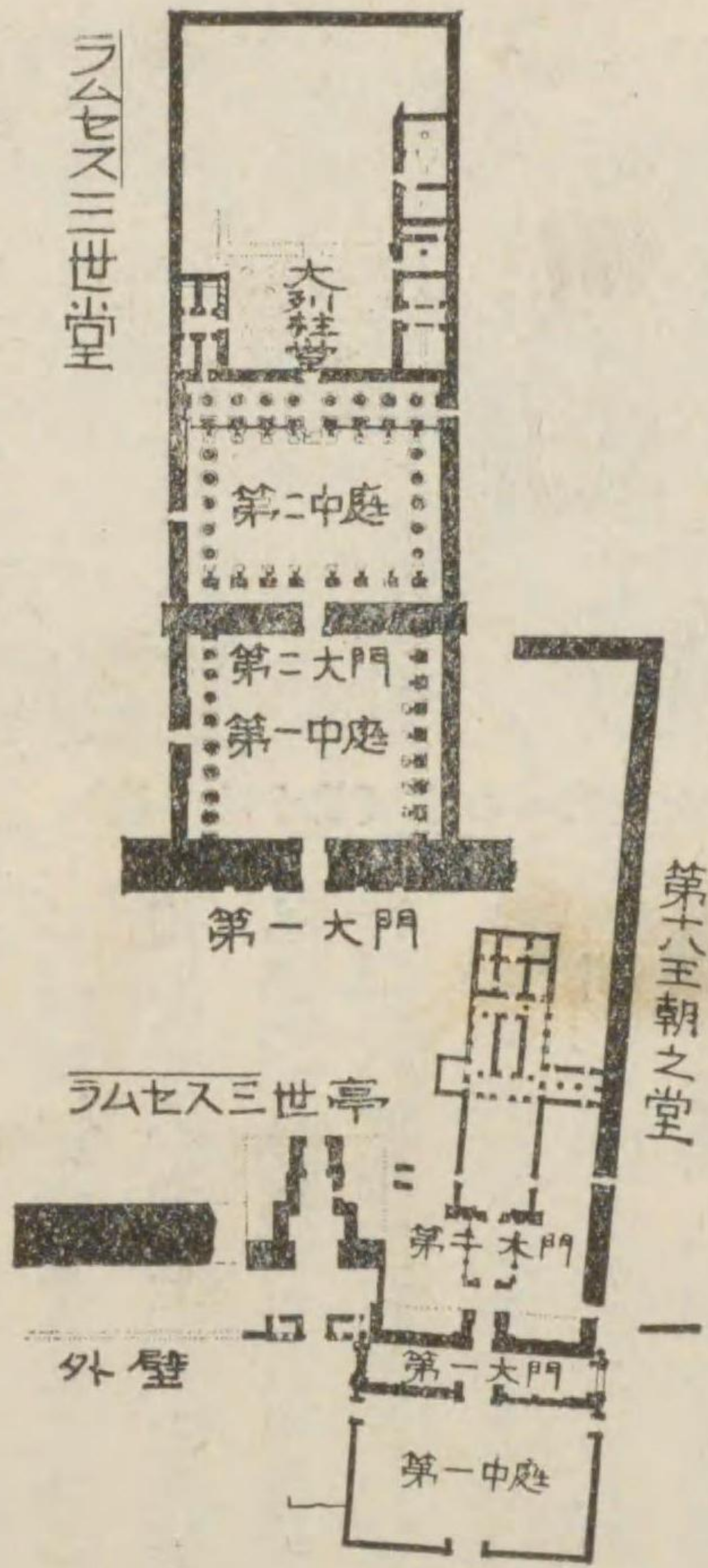
に遭はされたのだ。かうかくとシブズの堂のみがこんな運命に出遇つてゐる様であるが、さうばかりでもない。隣りの中華民國では今でも立派な建築を兵營にして苦力上りの兵隊を泊めてゐる。我國でも明治の初年に於いては、今日『特建』に指定されてゐる様な立派な客殿を小學校舎に使用したり、或は兵隊を收容して臨時の兵營にしたりした事もあつたから、此れもまた人の事は言へぬのである。其名の『町の僧庵堂』は前記の『北僧庵堂』と同じく、據て來たるところはこゝにあるのである。

併しながら夫れでも内部には相當にみるべきものがあるが、今は略して記さぬ。堂は割合に新しく前三乃至二世紀のものである。曩にも記した通り、こゝからの順路は『王陵』であるが、昨日みて了つたから、今日はすぐに『女王陵』(Biban el-Harim) へ向つた。

此道がまた昨日の様に土石累々壘々として一本の草木な

き丘陵起伏せる間を、頭上から照りつけられ驢馬に跨つて行くのだから可なり困難であるが、王陵街道の様に道丈が残して兩側に屏風を立てた様に絶壁がない丈け幾分かいゝ。漸くにして達し次の三陵墓を見學した。

メデネット・ハラウに於ける堂及門亭配置圖



第五十二號の Queen Titi 陵、第五十五號の Amen-her-Khopshef 皇子の墓——此の皇子の名は墓の入口に『Amonchopeshfu の墓』とかいた札を掲げてある。然るに案内人は『アーメンカベシユ

コの墓』と何度きゝ直してもいつた、どれがほんとか今以つて判らない、どれでもいゝだらう——及び第六十六號のラムセス二世の妃 Nefret-ere Mi-en-Mut——前同様入口には Nofertari Mine mut とあり、案内人はネフェルターリの墓といつた——の三つ丈けみておいたが、何れも代表的の

陵墓である、併し王陵より其平面は大分簡單であつた。

此所から東南に退却し、シープズ平野の最南端なる Temple of Medinet Habu (一に Madinat Habu) へ向つた。今迄私はメデネット・ハブーとは人の名であらう位に考へてゐたが、さうではな

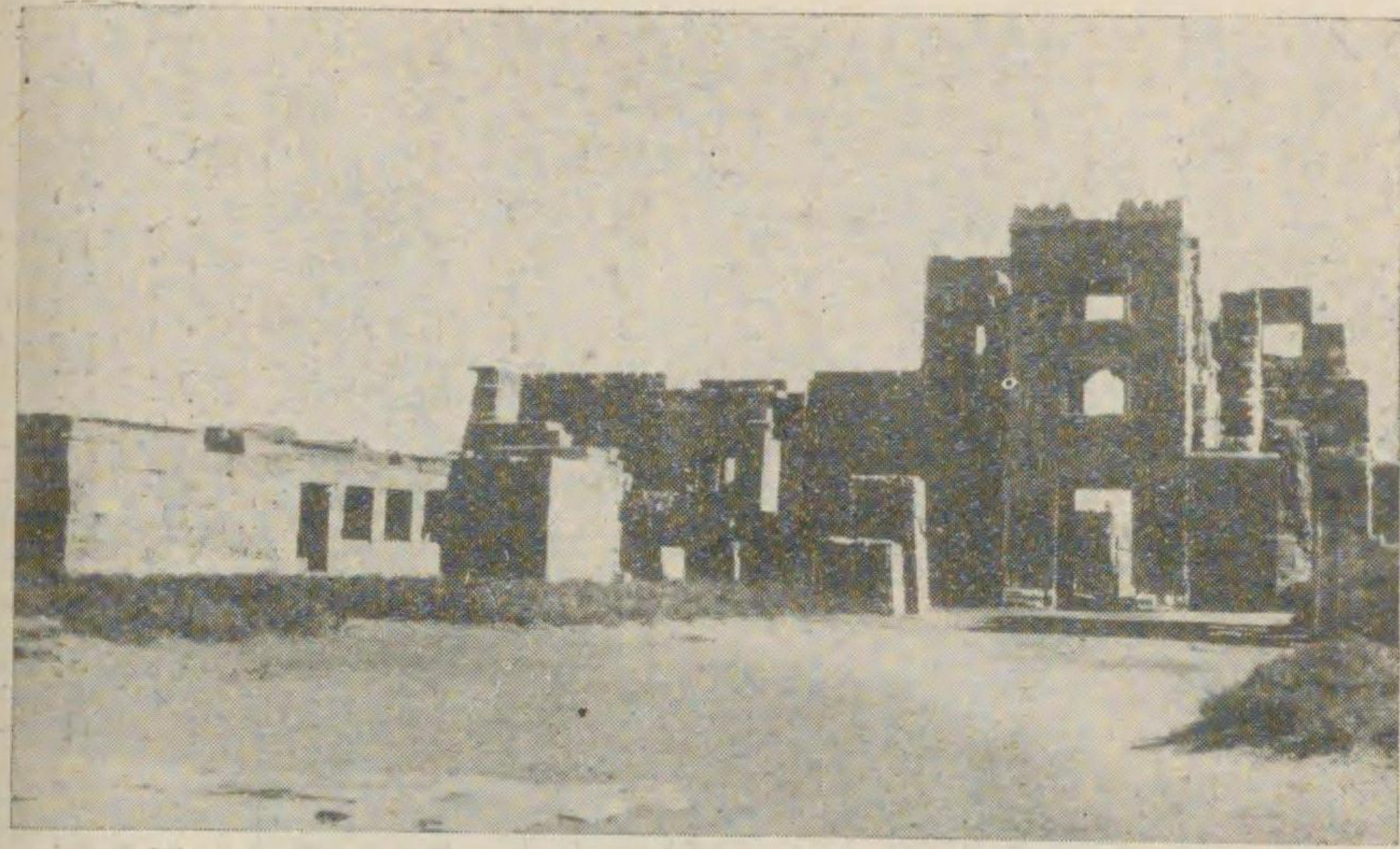


ハブー堂の正面

くて『ハブーの町』を意味してゐるのださうな、デイル・エル・メヂネが『町の僧庵』だから、成程これはハブーの町な筈である、けれどもハブーとは何の事かつい聞き洩して了つた、だから今でもやはり判らない。

先づハブー堂から記してみる。

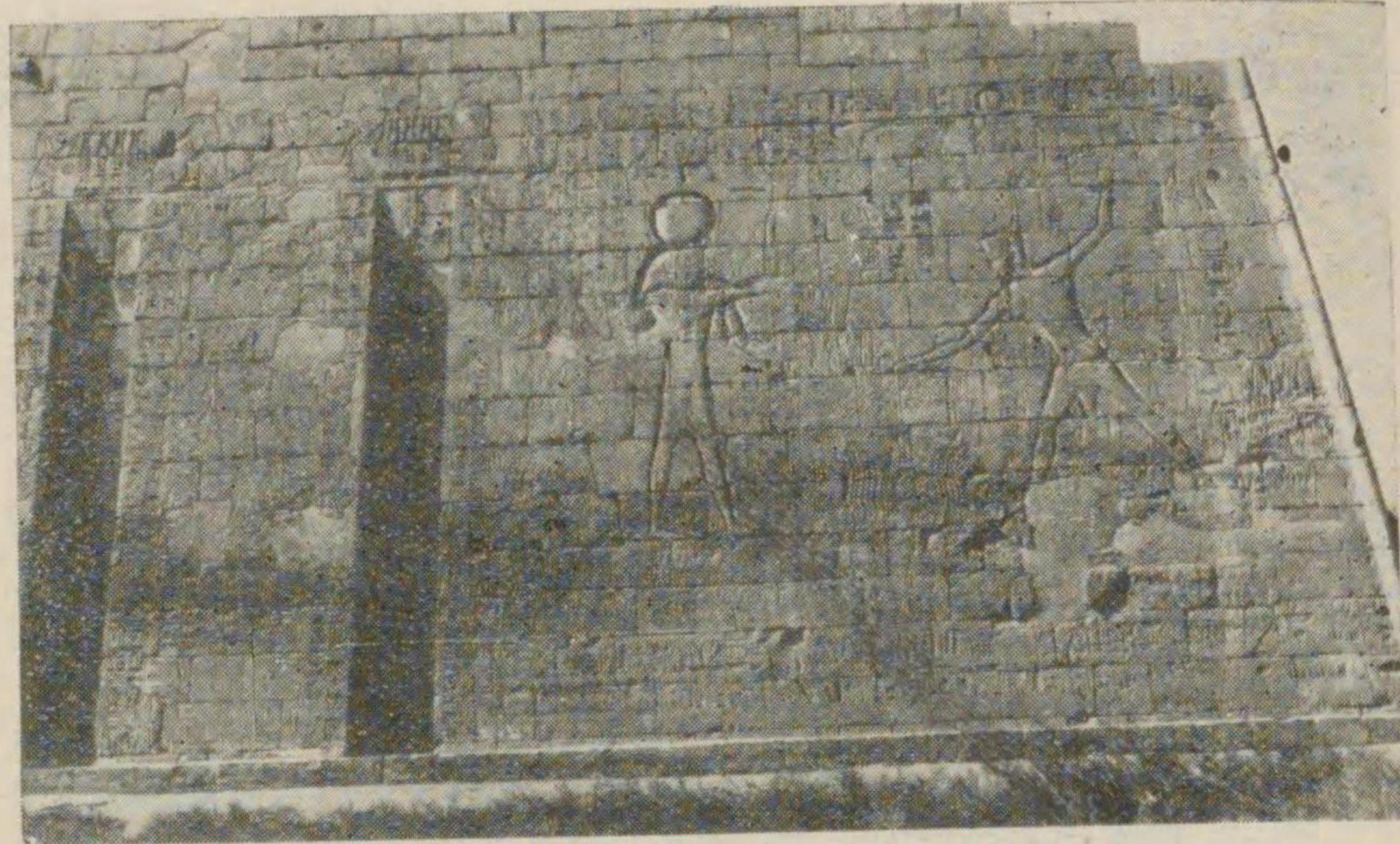
模の堂で、其第一中庭より内部への入口の兩端に、昔しから繪で極く親しくなつてゐた、開花柱頭の柱が立つてゐたので、何だかおそろしく懐しい感じがした。伊勢は津でもち尾張名古屋は城でもつ様に、ハブー堂は此二本の柱でもつてゐるので、これがなければ夫れこそつまらぬものになつて



所謂「ラムセス三世亭」を内側よりみる、左方の建物は
ハブー堂の後部である。

了ふのである、私は此二本の柱を斜にみたり正面からみたりして獨り微笑を禁じ得なかつた。實に心のうちでは嬉しくつてたまらなかつたのであつた。だから後日の楽しい思ひ出の材料に供するため撮つた寫眞をこゝに掲げるが、其中央に見ゆるのが此の小堂の第一大門で、其第一大門の内に小さく遠く見ゆるのが第二大門である。

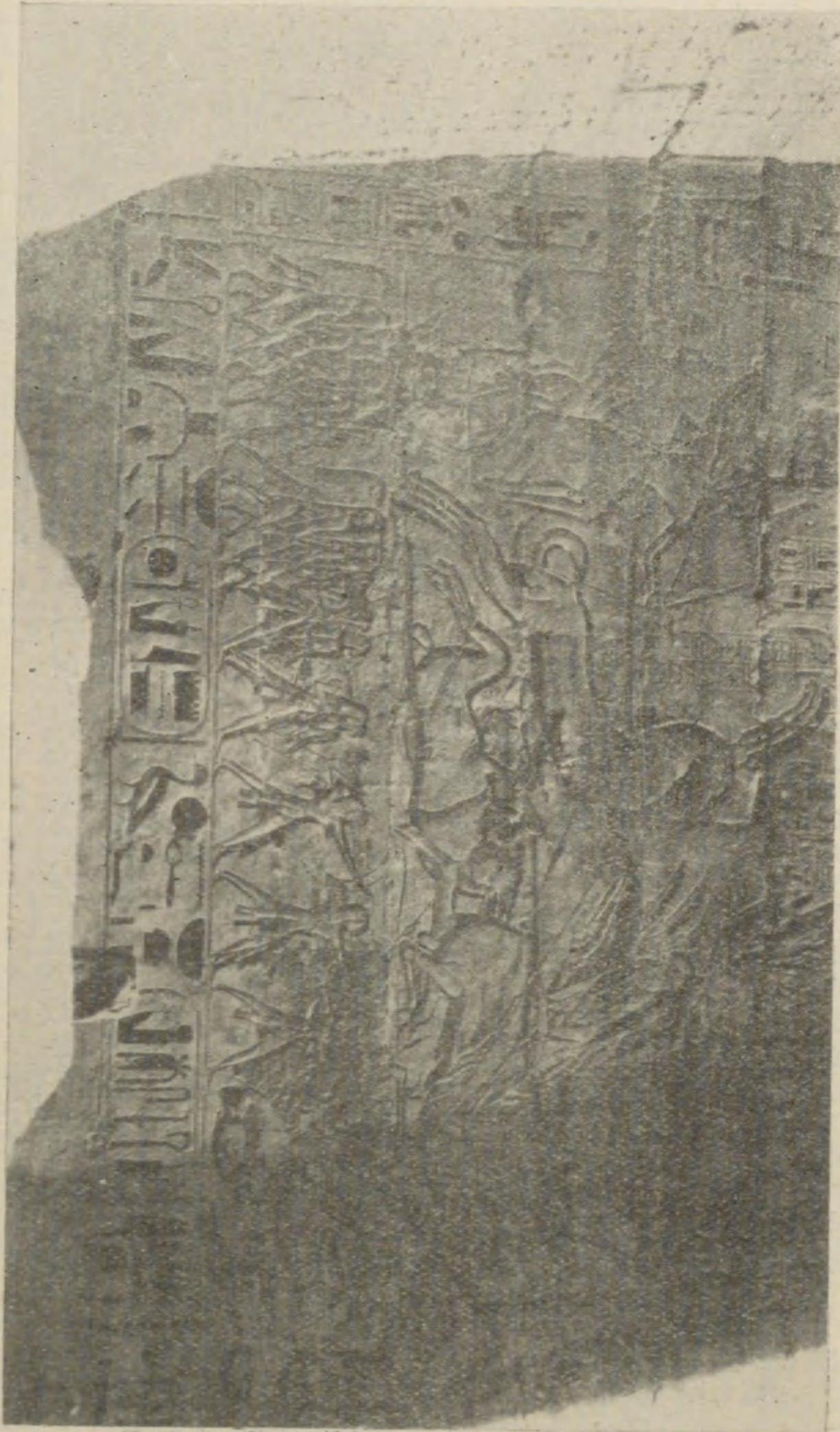
此の小堂と並びて所謂 Pavilion of Ramses III. (ラムセス三世亭) があるが、これは丁度門の様になつてゐて、上部は室になつてゐるけれども、下は通路である。案内記によると此れは昔し此所より若干の距離に建つてゐた宮殿に附屬してゐたので、種々の目的に使用されたのであつた。圖は西北即ち内部から外方をみたところである。中央の通路即ち門であり、向て右手に見ゆる石階は、中央部の上の二室へ登るべく近時新に設備したものであるが、今其床は落ちて了つてゐる。



ラムセス三世堂大門左翼正面の彫刻

第三には此亭の突き當りの、最大にして最重要なる「ラムセス三世堂」を紹介しやう。長さ約五百尺、幅約百六十尺、正面には型の如く旗竿溝を作れる大門あり、之はいふ迄もなく第一中庭に入る門で、其各面には種々の彫刻がある、こゝに示せる一つは大門左翼の正面下部で、向て右側の大きな人物はラムセス三世で、棍棒を以つて俘虜を毆打せる所、左方のは鳥頭人身のトート神——Thoth——が、木葉の上に此王の名を書付けてゐるところであり、其左方二本の太き黒溝は即ち旗竿溝である。

例の木村氏によるとトートの神は我國の少名彥名神ださうである。私にはそんな勇氣はないが、トートの頭は元來が Ibis だから、少し潤色すると鶏になる、ホーラスでも同様である。ハソールが牛頭人身で出現したときは、少しも手を加ふる事なくして立派な牛である、古代亞述亞に於ける有翼鳥頭人身の神は、頭は鷲の如き猛禽で、此場合に



ラムセス三世堂大門右翼裏面袖の彫刻

は頭上に裝飾的の羽毛——鳥冠——を生じてゐる、之が一轉化して肉質を帯びると正しく鶏のとさかと同じものになる、だから前出のアヌビス同様に此等も亦、十二支神中の酉や丑の原だらう位の法螺は一寸吹いて見度い様な氣もする、そして此の位なら、少名彦名神よりは大分に無邪氣だから、別段大した不都合もあるまい。

其二是右翼即ち向て左の裏側の袖壁の一部である、こゝはラムセス三世狩獵の場で、下段には大勢の臣下が弓を引き絞り満を持してゐる所で、右端には大きな魚がほりつけてあり、左と下の線は全部を象形文字で埋めてある。

此等の彫刻は何れも埃及一流の *Cavo-relievo* でやつてある事勿論で、其上主要なる人物其他を特に大きくして一見明らかならしめ、其他は何れも數等小さくしてどこ迄も従たらしめてあるから、甚だ以て要領を得てゐる。同じ位の人間であるべきに帝王丈けを特に大きくしたりするなん



ラムセス三世堂第一中庭のOsiris像

て、昔しの間人は尺度の頭がない等といふものがあれば、夫れこそ眞に野暮の骨張である。

第一中庭に入ると右側には方柱が立ち並び、其面にオサイリスの立像がついてゐるが、孰れも破損してゐて完全なものはないが、其内最も奥の者即ち寫眞の右端のが先づ一番完全で、顔面から兩手及び持物に到るまで揃つてゐる。極めて見聞は狭いが、私が當國の諸堂でみた大きな此神の立像では、此所のが最も完全であつた。但し殆んど常に木乃伊の形であるのに、此所のは膝から下に二本の脚を揃へて立つてゐて、而も其脚が少しく脚氣の意味だから、餘り形はよくない。

第二中庭から奥は澤山の柱があるけれども、孰れも基礎と柱身とが少し残つてゐるだけである、併し下端に粽のあることもよく判るし、面に薄く漆喰を塗つてあるのも判る。私は壞れた外壁の上のつて、今より三代前に Bagdad より移住し、現今は埃及國王ファッド一世陛下の忠良なる臣民たるラクソルの住人、當年とつて三十八歳、色黒く背高き Mustapha Kharil を腰かけさせて撮つた寫眞を掲げておくから、此男と比較して室及び柱の太さが略想像出来るであらう。

* * * * *

何分三日に渡り出来るだけ詰め込みたる結果、少しく Overflow の形である上、上からは烈々たる天日に照りつけられ、下よりは強い反射を受けた爲め、少なからず閉口したから、少憩の後歸宿に定め其通り實行した。



ラムセス三世堂に於ける列柱

今日は河上で囃子をきく事もなく、至極無事平凡に歸宿するや、部屋に寫眞機をおいて直に停車場へ寢臺車の談判に行つた、即ち十一月二日夜アスアンから開路迄の寢臺車を保留せんが爲めであつた。然るところ係員の話しでは、未だ季節前なので一週二回ほか連結せぬ、二日は丁度寢臺車はつけぬといつた。連れてゐつた案内人に相談したら、未だ今はさう客はないから大丈夫一小間を占領出来るから樂にねて行ける、だから心配はないが是非いるなら一日の夜にアスアンがたてる様に準備するといつた。考へる迄もなく私としては、大金をつかつて斯様な所迄来て、寢臺車の爲めに一日を繰り上げ、不完全の上塗迄するには當らぬのである。要は自分の健康を氣づかふから出た心配であるが、大概先づ大丈夫らしいからこれはどうしても二日にした方がよささうである。だから思ひ切つてさう決めた。

昨日から西岸遺跡旅行に雇つた Donkey boy は其名を

Hassan といふやうだ。Gaza の住人で蘇西通ひの Camel driver と同名異人なる事申す迄もな。私が Hassan と呼びかけるに Aiwa = Yes と返事をする。まるで『八さん』『アイ』といふ様で面白い。此男英語の會話が頗る上手で、發音は案内人よりも被案内人よりも明瞭にして正確に近い。中々うまいがどこで稽古したかと訊いてみたら、ほんの聽覚えだといつた。如何に最負目にみても自國語（即ち暴夜語）の讀み書きすら覺束ない、だから本人のいふ通り全くの聽覚えだらうが、夫れにしては實にうまいものだ。『ハッサン』を忘れずにゐてください』といつた。覺えて居ねばならぬ事が一つ一つ増してくるので閉口する。

夕食をすませてから勘定を拂ひ、部屋へ歸つて荷物萬端すつかり片付け十時就床した。遂に樂しかつたラクソルの三日は過ぎて了つた。カーナツクのアモン大堂も、王陵も、女王陵もメモソンの大像も、何も彼も皆なたゞ淡い記憶に残つてゐるだけで、萬事夢の如くである。明朝は早い出發だから寢過ごしては大變なので、何となしに不安に感じてゐたが其中疲でいつか眠つて了つた。

（大正十三年五月五日稿了）

ラクソルから古夢・御坊へ

十月三十日

（月曜、好晴）

四時四十五分に起き、五時十五分に朝食をすませ、同三十五分に宿を出で、驛に向つた。十月の末の朝の五時半は、いくら埃及でも、薄暗かつた。だから先づ早い方の部である、にも係らず出がけには相不變錢貰ひがゐる、最も甚だしいのは馬車へのつてゐる私の背を敲いて錢を乞ふのであつた。貰へるか貰へぬか判りもせぬに、よくも早く出て來たものだと思つたが、暑いところだから朝起きして涼みがてらに來たのかも知れぬ。食堂の給仕等も随分いちがきたないが、流石に給仕頭は土人ながら中々やり方が上手で、萬事滞りなく迅速に處理して知らん顔をしてゐる、だからどうしても金をやらすにはゐられぬ、上埃及旅行中氣持よく心附をやつたのは此男丈けであつた。

私が乗つたのは朝六時當驛發アスアン行のである、早朝出發した理由は、アスアンへ直行するのなら其必要はないが、今日はエドフウ (Edfu, 「江戸府」はどうか) で下車して有名なホーラス堂をみ、コム・オンボウ泊り。其上出來たら其堂もみて了ひ度いので、だから朝早くないと都合が悪いのである。

當驛以南の客車は、外部を純白色のペンキで塗り、硝子窓は下へ、其外のガラリ戸は上に開けるのである、そして窓の上部からは、羽重ねにした板の日覆が窓全體の1/3位下がつてゐる。そして窓硝子の色も無色透明でなくて、紫がかつた青色のが嵌めてあつた、これは強烈な日光を緩和する爲めなる事勿論である。私は初めてこんな汽車へ乗つたので大變に面白く思つた。成程熱帯の汽車

はかうするものか、四十面を下げる迄田舎の役所で木ツ葉役人を勤め、どこへも行く折がなかつたので何も知らなかつたが、どうもうまく考へたものと連りに感心をしたのであつた。併し後日印度を旅行した際に、到るところ殊に南印では何れも斯様な汽車だつたので、しまひには平氣になり何とも思はなくなつて了つたが、この時は初めてと意外だつたので珍らしかつたのであつた。

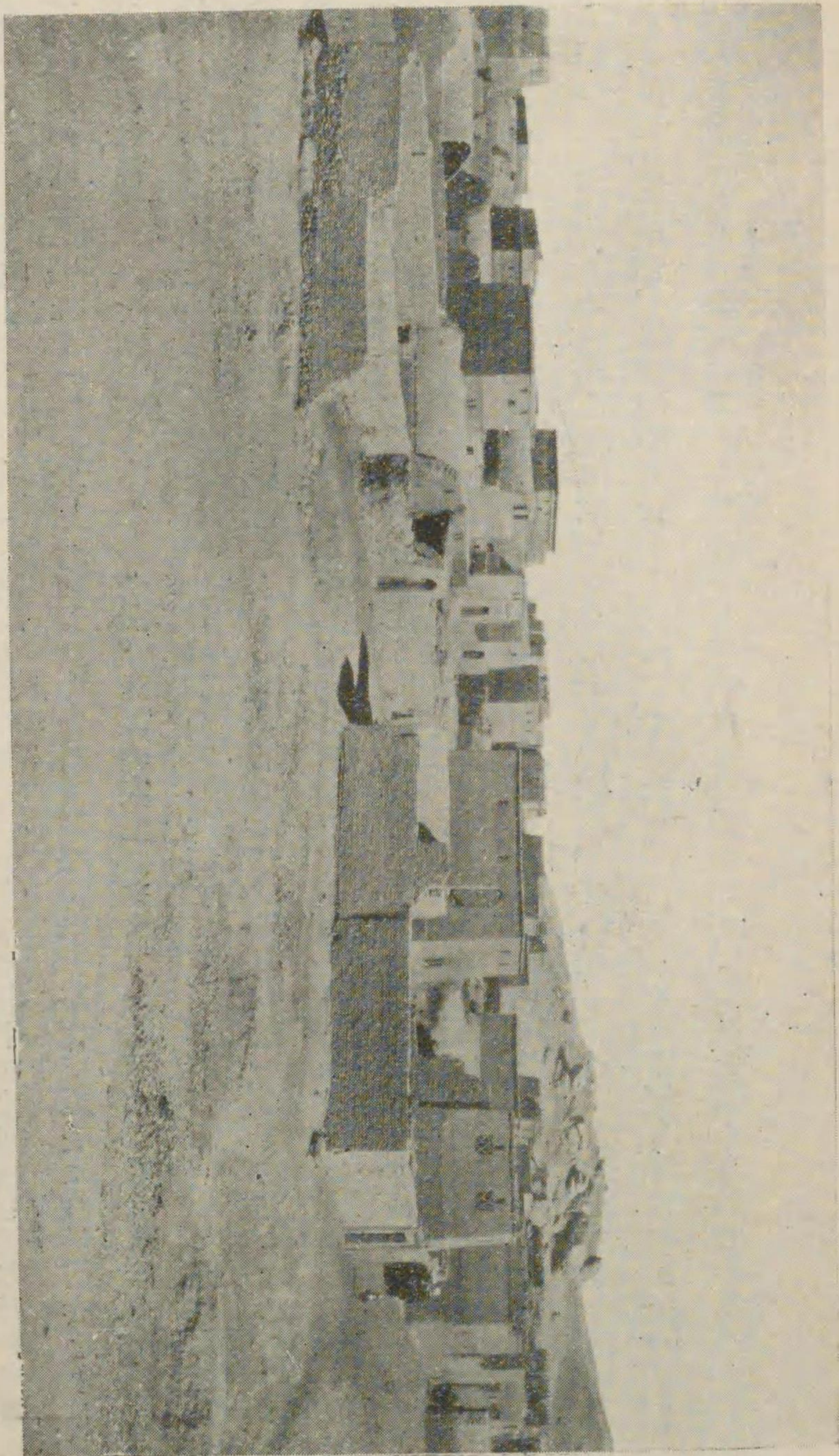


ムネク神の祭堂(『埃及古史』より複製)。
エスネー(羊頭人身)神話及

ラクソルから江戸府迄停車場は幾つあるか、一つ一つ停車しないやうだつたから急行なのであつたらう、停つたのは私の氣のついた丈で七つあつた。其内四つ目がエスネー

(Esna, Eneh)で、こゝには羊頭人身の Khennu 神——十二支の「未」——を祭つた堂があるが、汽車の内からはまるで處在すら分らぬ、たゞ川を隔て、遙に二三基の光塔を望み得た丈けであつたけれども、車内からの眺はまことによかつた事丈けは忘れぬ。勿論行つてみたかつたが、出来ない相談だから我慢して了つた。

六つ目は Mahamid 驛である。こゝは田舎にしては人家稠密賑な大村落で、其村外れに驛があ



Mahamid 驛土民の家屋 (汽車の窓よりとつた寫眞)

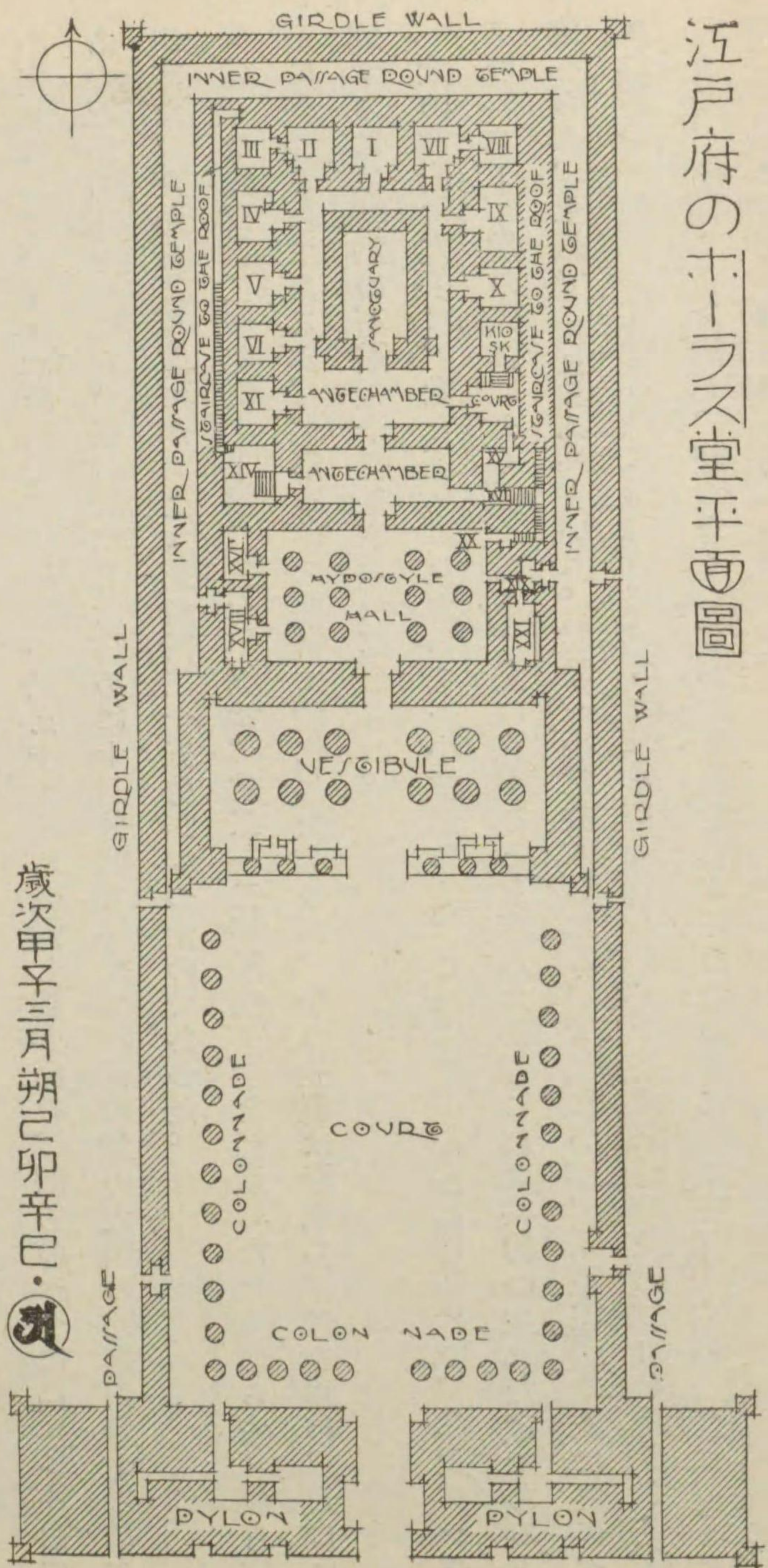
ラクソルから古夢・御坊へ

るから、此邊の民家の有様を割合に近くでみる事が出来た。其大體を記してみると、家屋の殆んど總ては泥土煉瓦を以て築き、形もいろいろあつたが、要するに其平面は何れも長方形で、餘り込み入つたのは無かつたやうだ。其内一番眼立つたのは、長方形の平面で兩端は段形切妻をなし、天井兼屋根は筒形穹窿をなしたものであつた。此種の家屋はアスアン附近にも可なりあつたから、後には珍らしくも何ともなくなつたが、今日は初めてみたので甚だ面白かつた。まだ他に大きな建築で古い堂の大門の様な形のを建て、ゝゐる家もあつたが、汽車の窓からではどうする事も出来なかつた。時間の都合さへよくば途中下車して寫眞も撮り、出来たら其内二三は入つて内部の様も見たく、心中大に鐵道事故の發生を祈願したが、其甲斐なく僅に二三分間停車した丈で汽車はでて了つた、仕方がないから汽車の窓から寫した寫眞を記念にせめてもの心遣として掲げておく。

此の寫眞に就いて特に注意すべきは、左端の中央に見えてゐる穹窿で、其の小口が斜めになつてゐることである。此れが若し果して亞述亞あたりの原始穹窿の様に、總ての泥土煉瓦を斜に積だものだと甚だ面白いが、私の肉眼ではよく見えなかつたし、折悪しく双眼鏡も手元になかつたし、ただ小さな寫眞に残つた丈で、今になつては實況は判らないが、興味を惹くものであることだけは確かである。

十時十五分に江戸府驛に着いたが、村はまた左岸にある。其村の眞中からホーラス堂の大門が群

江戸府のホーラス堂平面圖

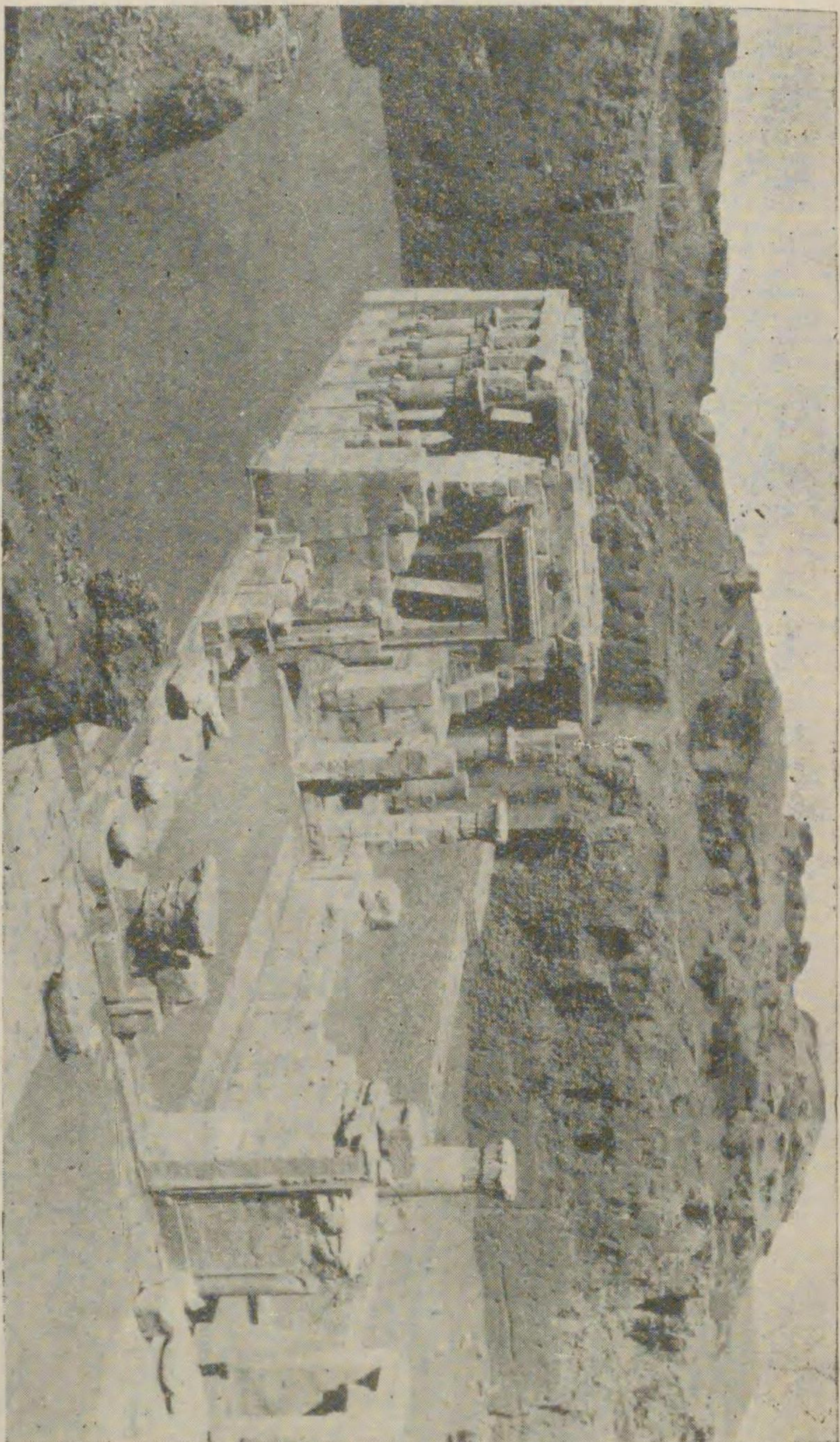


歲次甲子三月朔己卯辛巳

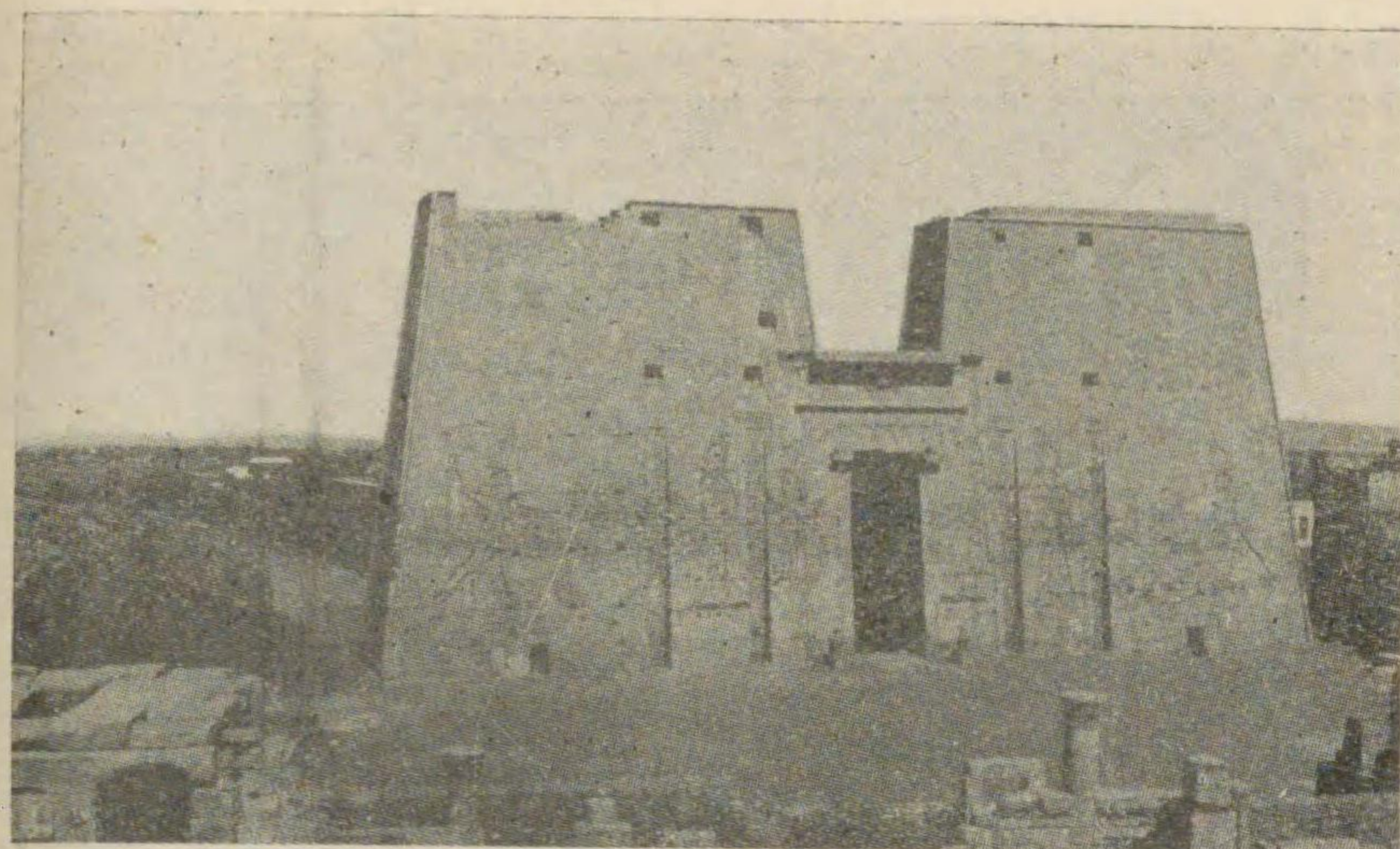
を抜いてゐるのは心地がいい。下車して數十歩すると直に河岸で、そこには小舟が待つてゐた。今日は朝から風が適當に吹いてゐるから、僅に十三分で對岸に着いた。直にそこにゐた驢馬に乗ると小走りにかけ出した。お蔭で客は身體が絶えず上下に振動し腰が痛む、即ちのべつに Impact が起るのだから遣り切れぬ。併し駆出した爲めに十二分間で早くも江戸府堂の大門の脇迄到着する事が出来た。だから下車してからこゝ迄合計二十五分かゝつたのであつた。

當堂は創建後二千年餘——前二二二七年創始、前二二二二年落成——を經過したにも係らず、最も完全に保存されてゐるが、地形丈けは非常に變化したものか、今の位置は際立ちて低き爲め、入口に達するには特設の石階數十級を下らねばならぬ。

堂の前向て左手に、堂と直角に東面して一小堂がある。これ即ち Birth House で、其式デンドラのハソール堂の夫れによく似てゐる。曩に記すことを忘れたが、これは其神の生れた家であると傳へられ、土語で Mammisi といふ。勿論一小堂故大したものではないが、開花柱頭の上に更にベス (Bes) 神がつけてあるのは面白い。ベスは侏儒で頭小さく、耳朶は虎屬の夫れの如く鬚多く、鼻平たく口を開き舌を出し、顔大きくいぢかりまたをして正面向きに立つてゐる(大概の神は横向きだのに此神計りは正面向き)。だから詰りあらゆる埃及の神々のうち最も醜い形で、大體からいふと顔は卵の様な輪廓で、夫れに比べて身體が不相當に小さいから、先づ埃及の Humpty-Dumpty といふ格である。何故こ



Edfu の Horus 堂附屬の Birth House



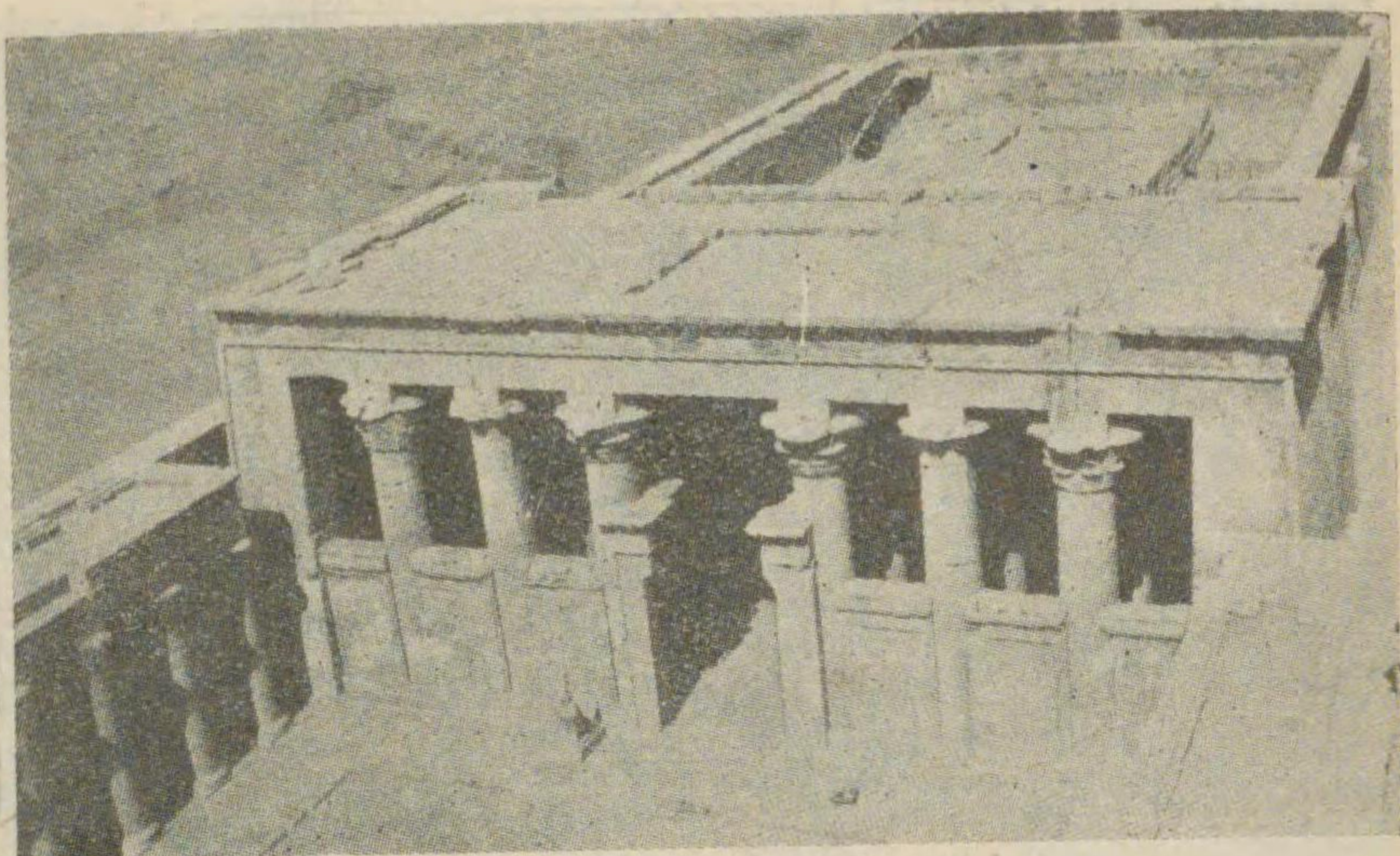
Horus 堂大門。前景に一部分見ゆるは Birth House.

んな化物を柱頭へつけたかといふに、産には是非必要な神で、古くは例の紅一點なるハタス女王の降誕の時に出来た。以来産の神になった。だから神が生れたと考へられてゐる『産殿』についてゐるのは當然であらねばならぬ。

肝心のホーラス堂は、挿入平面圖の如くであるから間取其の他は記入の文字で知れやう。たゞ大門及玄關前に一對の黒花崗岩水磨きの大鷹の立てるのと、複式開花柱頭と棕梠葉柱頭との柱の竝立と、周壁との間が一巡出来る事とが他と變つてゐた。

流石に鷹は甚だうまく出来てゐる。大門前のものゝ内、向て右のものは兩足の間に羅馬風俗の僧形が立つて居り、玄關前即ち中庭の一對は、左方のものが完全に頭上に複冠——上、下埃及の複合冠——を頂き、右方のもの破片となつて地上に轉がつてゐた。

正面大門の左右翼樓は、最上部の軒線形の部が多少破損



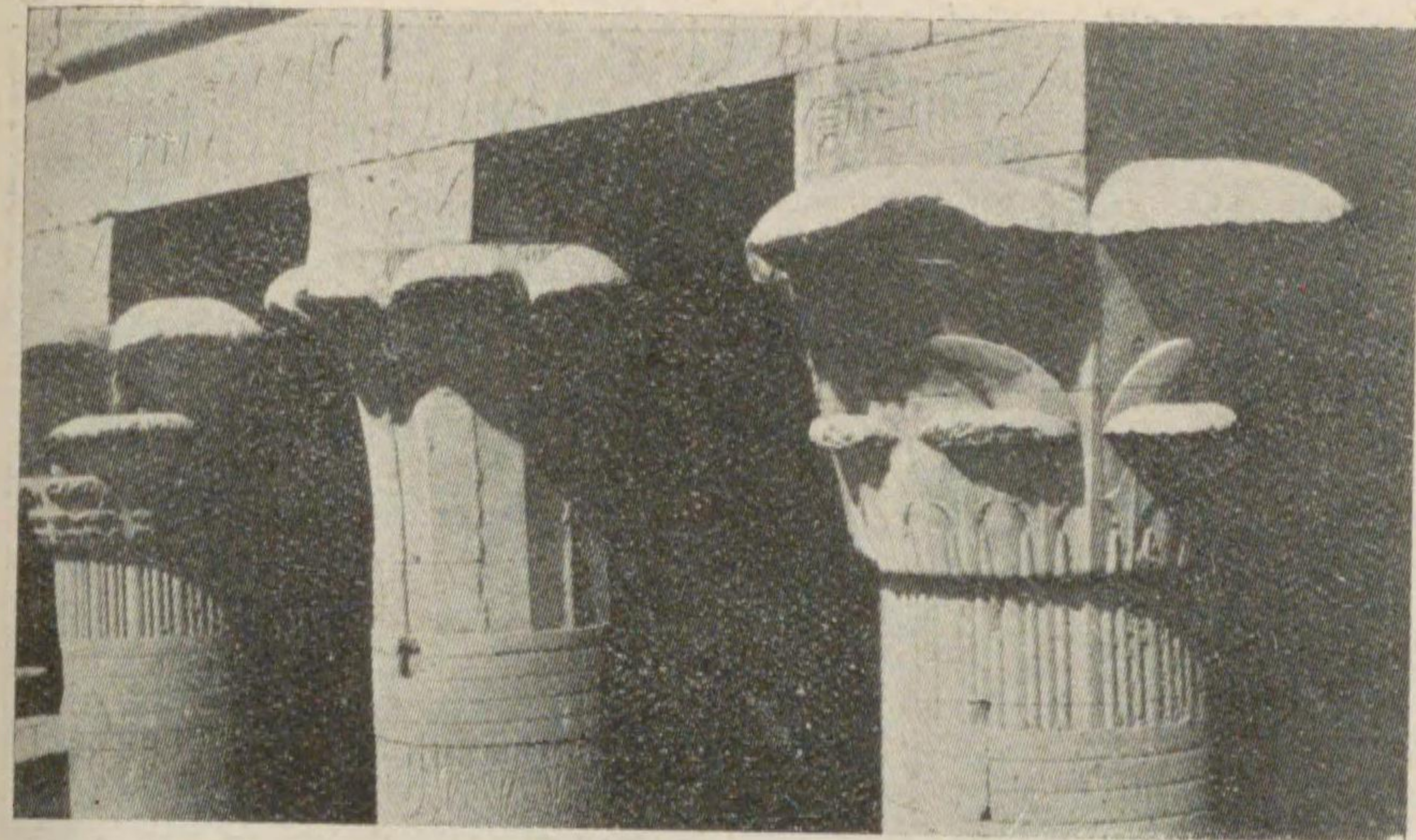
Horus 堂の大門屋根より玄關をみる

してゐたのは遺憾であつたが其他の部分は完全に残つてゐる。故に全體として其完全さから言つたら、或はカーナツクのコンス堂大門には及ばぬかも知れぬが、大さと立派さとは到底比較にならぬ。先づ其正面にはラムセス三世世堂の夫れの如く Neos Dionysos 王——即ち Ptolemy XIII.——が多くの俘虜を頭髮で捕へ、鷹頭人身のホーラス及び女神のハソールの前で棍棒を以て打つてゐるところが刻んである。寫眞は小さくて判らぬが其兩端に在て片手をあげてゐるのが即ち此王で、旗竿溝の間にゐるのがホーラス、其後方溝と入口との間のがハソールである。

扱てこゝで無駄なやうであるが此のホーラスに就て一通り説明して置かうと思ふ。此の神にはざつと七種類許りあるらしいが、其内でも特に次の二つがよく出てくる。

Heru-ur = Horus the Elder.

= Elder brother of Osiris.



玄關に棕櫚葉柱頭及複合柱頭

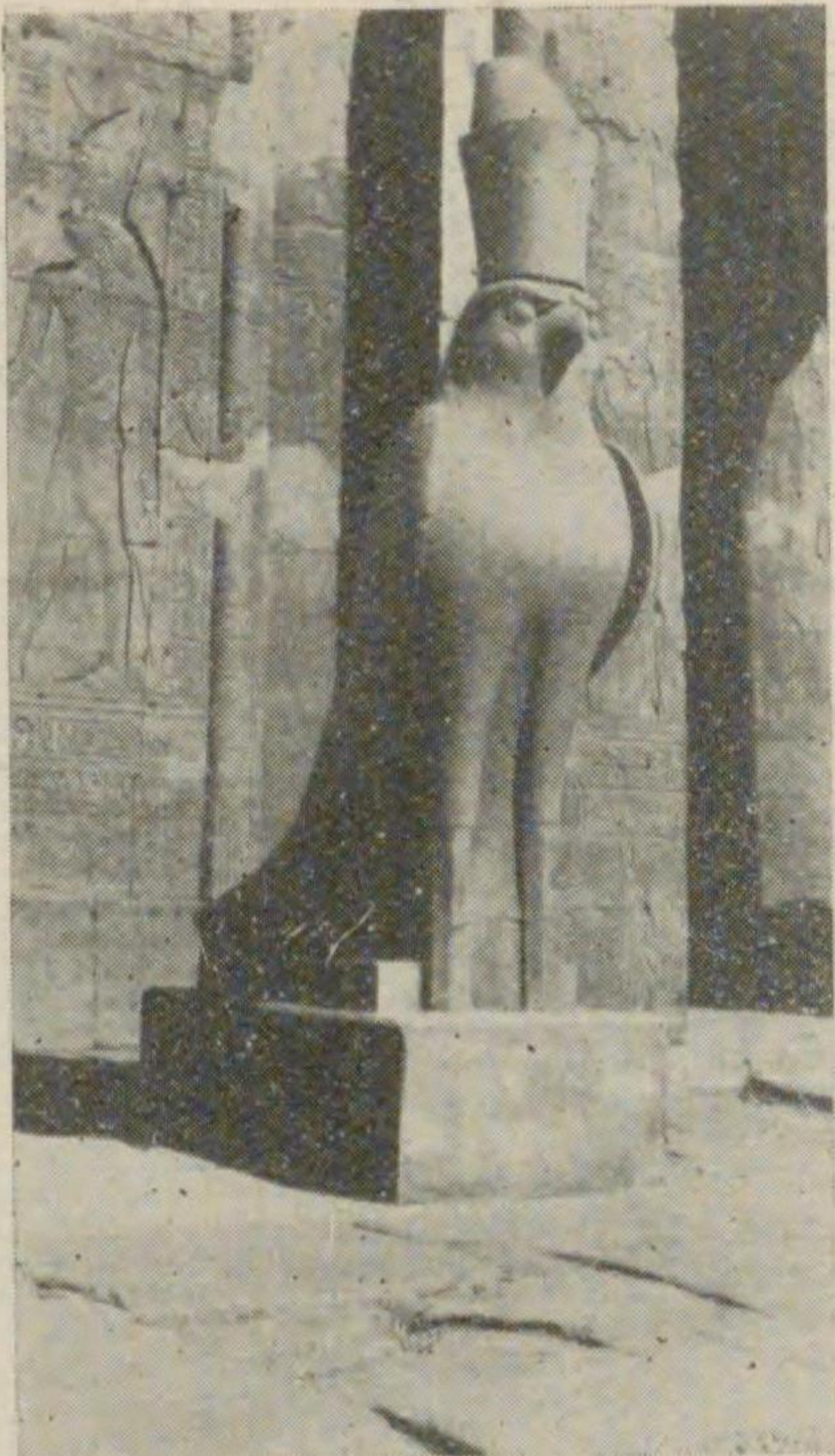
= Haroeris.
Heru-p-Khart = Horus the Child.
= Son of Osiris and Isis.
= Harpoerates.

此等大鷹と小鷹とは一つなるが如くまた別なるが如く、時には全く錯綜してゐて何れを何れとも定め難くなる時もある。エドフウの鷹神は鱷の大敵であるが、隣りのコム・オンボウでは仇同士の鷹神と鱷神とが隣り合つて棟割長屋に住んでゐたのである。オサイリスの敵のセツトの變身せる獐猛比なき大河馬を片舟にのつて退治してゐる勇氣凛々たるホーラスがあると同時に、母親のアイシスに抱かれて乳を飲まんとしてゐる赤ん坊のホーラスもゐたのである。尙此の Infant Horus に就いては後にまた少しくかいてみ

度いことがある。大門の上に登るには、其内部に設けてある石階を昇れば



大門入口東脇の鷹



玄關入口西脇の鷹

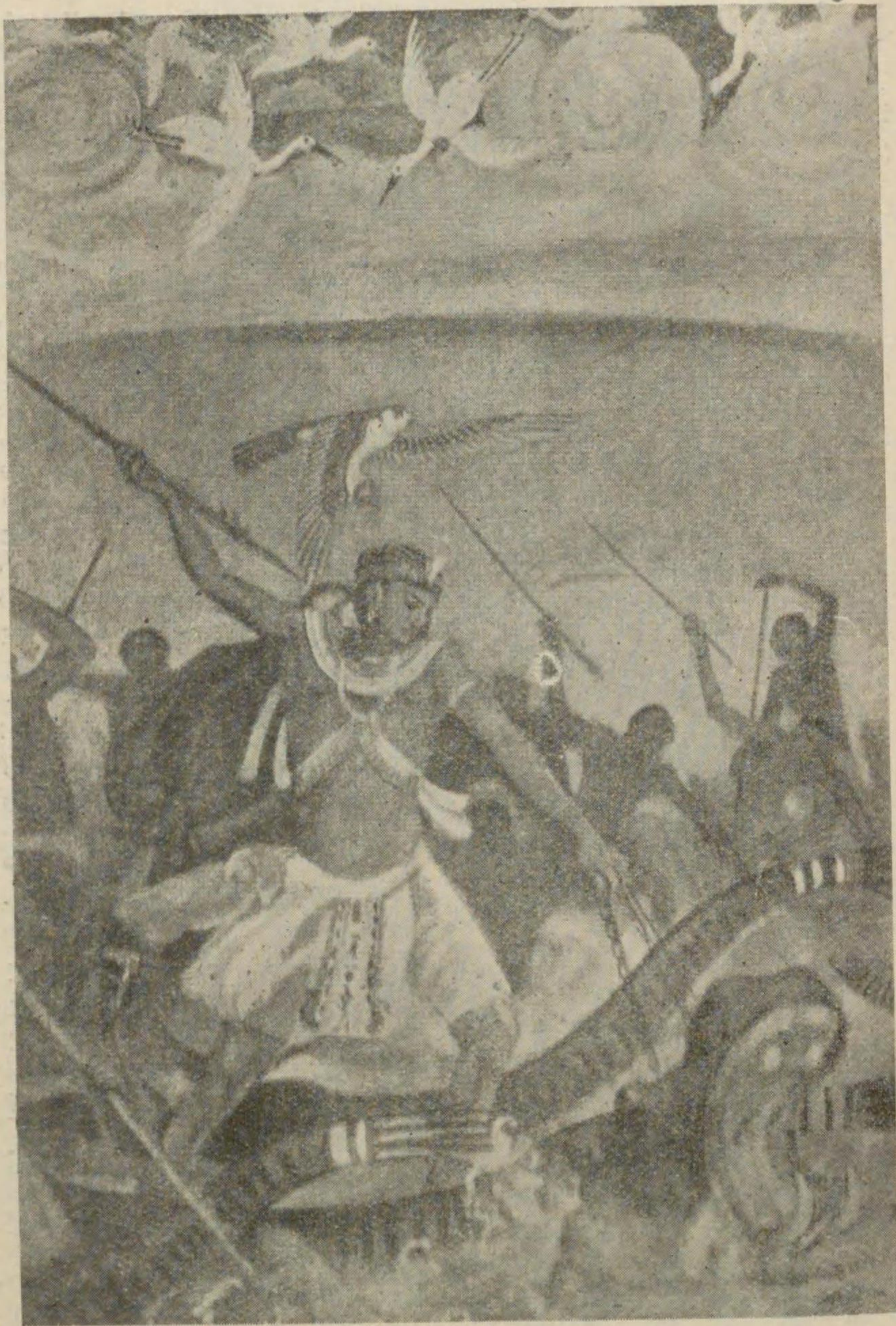
い、門上から村は勿論、展望は可なり遠方までき、景色も甚だよろしい、のみならず堂の平面も一目瞭然である、其上中庭左右の廻廊の屋根へ出ると、大門翼樓北側の彫刻もみることが出来るし、玄關前に並立せる開花並に棕櫚葉柱頭を近くみ得るのである。

で時間の関係もあるから内陣の屋根は割愛して、内陣の側壁と周圍境界壁との間を一巡して壁面の彫刻を観覽し、思ひ切つて歸ることにした。時に十一時四十五分、だから丁度こゝに一時間と五分ゐたのだ。之で歸りも思ふ様に馬を飛びはねさせたため二十分間で驛迄歸着した、即ち零時五分であつた。

もう發車迄大して時間もないので、直に待合室でラクソル館から持参した辨當を開き、危険を慮り飲料水も新鮮な曹達水を同様に用意してきたのであつた。然るに私が當地着以來、太つた虫の好かぬ男が付き纏つてゐたが、古錢を取出し買へと云つて眞偽不明の羅馬時代と見ゆる銅貨を突きつけたから、不用だと云たら冷しラムネを飲めといつて賣りつけやうとしたこと數回に及び、煩くて仕方がないから横を向いて何といつても知らぬ顔をしてゐたが、此時もまた傍へ來て一本位冷しラムネを買つてくれてもよからうといつた。いらぬと怒鳴つたら今度は猫撫聲を出して嘆願し、抜きますよといつて正に栓をとらうとしたから、其男の顔を見つめ成るべくむつかしい顔をして、抜くなら勝手に抜くが、何もおれに斷るには及ぶまい、但しおれは代金は決して拂はぬから其覺悟をしろといつたので、漸く相手は退却したが、其うるさ加減はこれも亦一度經驗した者でなければ到底わからぬのである。

食事をすました時注文した様に都合よく下り列車が來た。今朝のはすいてゐたが此の汽車は満員で、僅に席を得たが丁度私の向側に白い長い顎鬚を生やした上品な老紳士がゐて、私に印度から來たのかときくから、來たのぢやないこれから行くのだといつたら、老人は成程こゝからだと行くこととなる、印度はどの邊へゆくのかと、どこまでも私を印度人にしてつた。

亞米利加では朝鮮人にされたことがある。英國の田舎を三等へのつて旅行した時、相乗りの田舎

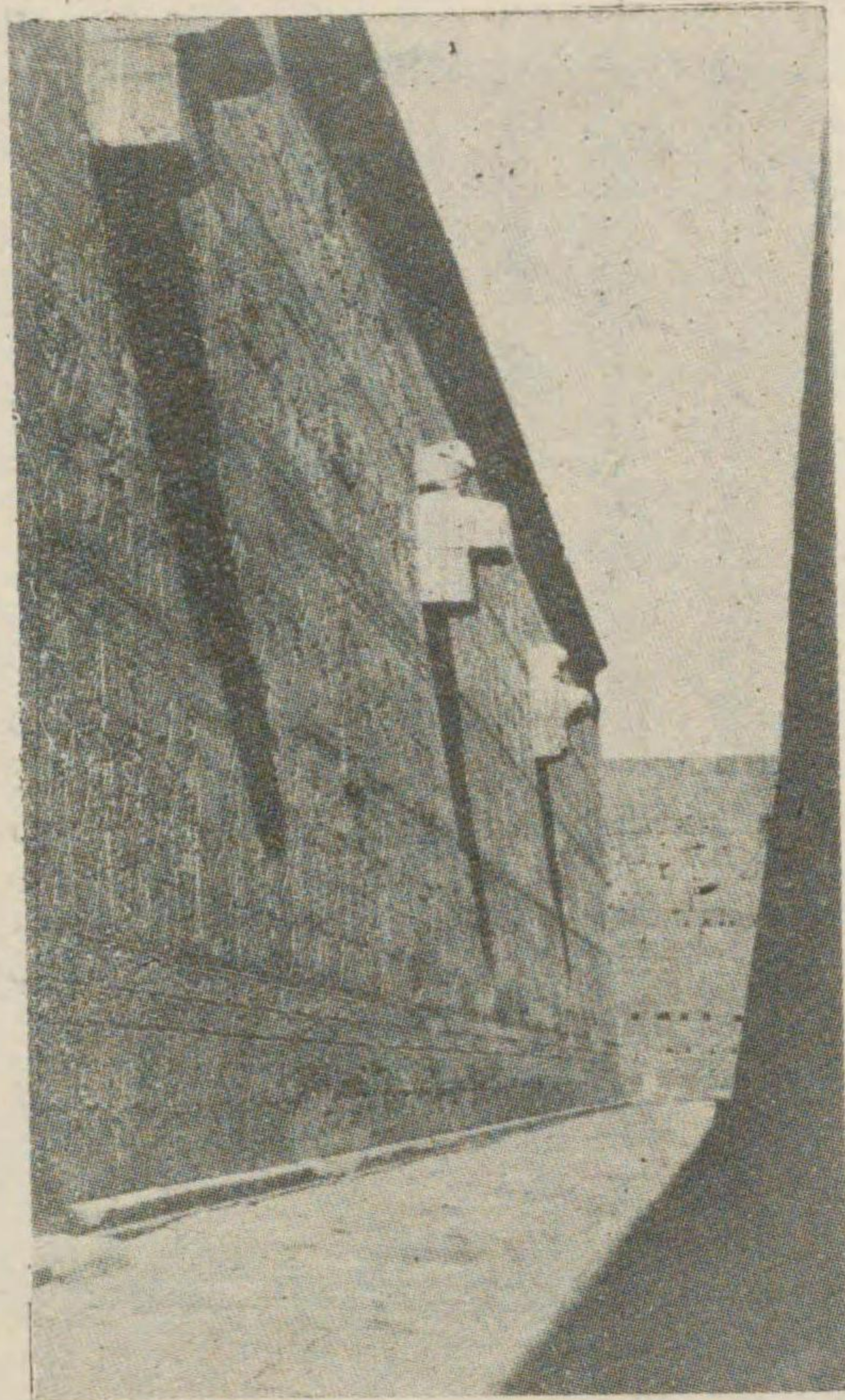


Evelyn Paul 筆 Horus の奮戦(『古埃及神話傳説集』より複寫)

男が鬼殺をすひ乍ら西班牙人だらうといったことがあつた。今日はまた印度人と間違へられたのである。だんだん面白くなつて來たのでつい相手になり、印度を出來る丈け旅行して孟買から船に乗つて日本へ歸るのだといつたら、初めて判つたらしく扱ては日本人か、私はすつかり印度人だと思つてゐたのだといつた。此老人顔は頗る好々爺だが頭が少々悪いらしい。そこで今度はこつちから生國を訊いてみたら丁抹だといつた。多分コーペンハーゲンあたりの近在からでも出て來たのだらう。ところが此老人 *Silvan*——覺え易い名で『汁椀』——驛で下車し、歩廊にゐた大勢の土人と親しげに挨拶をしてゐた。今迄觀光旅客とのみ思つてゐたのに、さうでないらしいので遂に老人の職業鑑定が出來なかつた。

汽車は不相變砂つばらを走り、窓から風と一所に微細な泥土の粉末が入り、其上二等の鮮詰だから勝手に窓を閉める事も出來ず、大分に困つたが其内漸く *Kom Ombo* (古夢・御坊) 驛着、驛前の御坊館 (*Kom Ombo Hotel*) に入り、庭園に面せる地階の第三號室に陣取つた。時に午後二時四十分、泊り客も少なく至極閑靜で大いに氣に入つた。田舎宿と思ひの外中々上等でラクソル館にこそ及ばないが、御殿館や段々館等足元へもおひつかぬ位清潔であつた。一休して直に御坊堂の見物に行くものと思つてゐたが、案内人は何も言はず知らん顔をしてゐて、紅茶でも召上りますかといつた。堂はいつみに行くのだといふと、明日でいゝでせう、今日は半日休養しては如何ですと中々

動かぬ。昔しの天子様は雙六の骰子と山法師とは思ふ様にならぬと仰せられたさうだが、埃及の案内人は其最も甚だしいものである。雙六の骰子の方がまだいゝ位だ。



Horus 堂内陣壁と外壁との間の通路

今から行くと堂の前面に日が一ぱいあつてゐるから、寫眞をとるには甚だ都合がいゝ、といつたら是非とならば今からトロリーを用意させるけれども、明朝だつて寫眞に差支はない、まあ明朝にしてはどうかとするける工風ばかりしてゐる。こんな談判をしてゐる間に四時近くなつたから、どうも少し晩くなり過た。これからでは馬車の支度に相當の時間もかゝるし、折角いつた時分日が沙漠に没しては夫れこそ寫眞は駄目だから、一層明日の事にして今日は茶でも呑んで案内記を讀んでおかうと決め、早速毎日仕方なしに着てゐる窮屈な胡服を脱ぎ、寛濶で氣持のいゝ單衣に着替へ、寢臺の上にひつくり返つたら睡くなり、いつの間にかねて了ひ、眼がさめた時には電燈がついてゐた。

夕食は階上東側の廣い平場でたべた。勿論青天井で星は降る様で、涼しい風が吹いておそろしく
氣持がよかつた。食事の時は隣りの机に異人が一人ゐただけ。夕食を此の位愉快に食べたのは當地
へ来てからこれが初めてであつた。料理より何より平場と青——夜だから實は星だらけの黒——天
井と涼しい風とが氣に入つたのであつた。

(大正十三年五月二十二日稿了)

古夢・御坊から明日庵へ

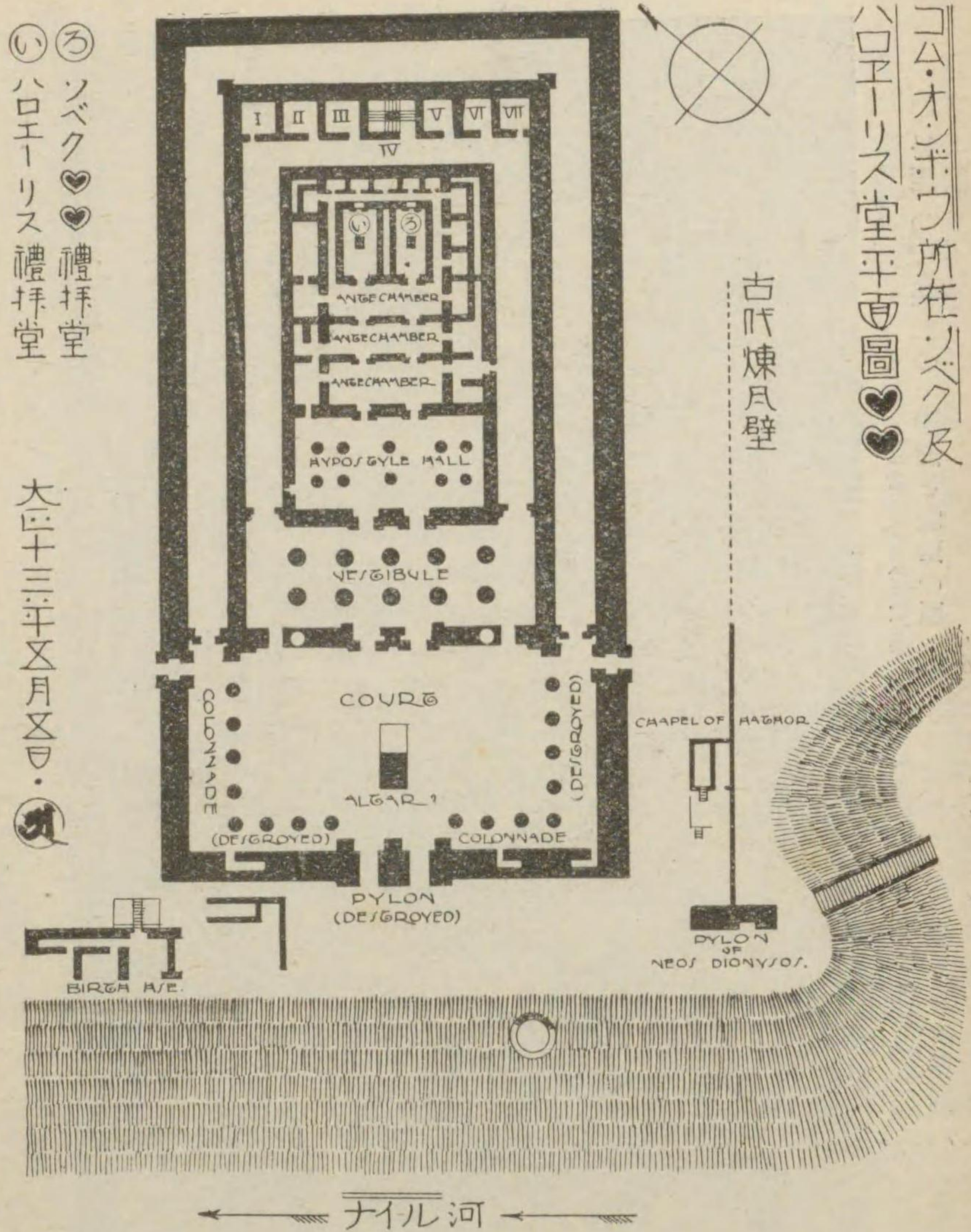
十月三十一日

(火曜、好晴)

昨日午後室内で無爲に暮したのを取返すのと、此の氣持のいゝ宿の附近を少し散歩してみやうと
いふのと、二つの理由から今朝は早起してそこいらを歩いてみた。七時半に朝食をすまし、八時二
十分に宿の直ぐ前から所謂 Trolley へのつた、相客はなくムスタファとたつた二人きりだつた。

トロリーとは元來工夫等が物を運搬する爲めに線路の上を轉がす四輪車である、と許り子供のう
ちから思ひ込んでゐたのに、亞米利加では夫れが大きな電車であつたので頗る面喰つた事があつた
が、こゝのは一頭挽の馬車鐵道であつた。丁度明治三十年の頃新橋品川間に出來たのと同じ小規模
で、夫れの座席が八つであつたことを記憶してゐるが、今日のはたつた四つであつた、そして途中
乗降の客があるではなし、發車後停車するとなく約二十五分かつて御坊ヶ丘の終點に達すること

ができた。



コム・オ・ボウ所在のソベク及
ハロエリス堂平面圖

古代煉瓦壁

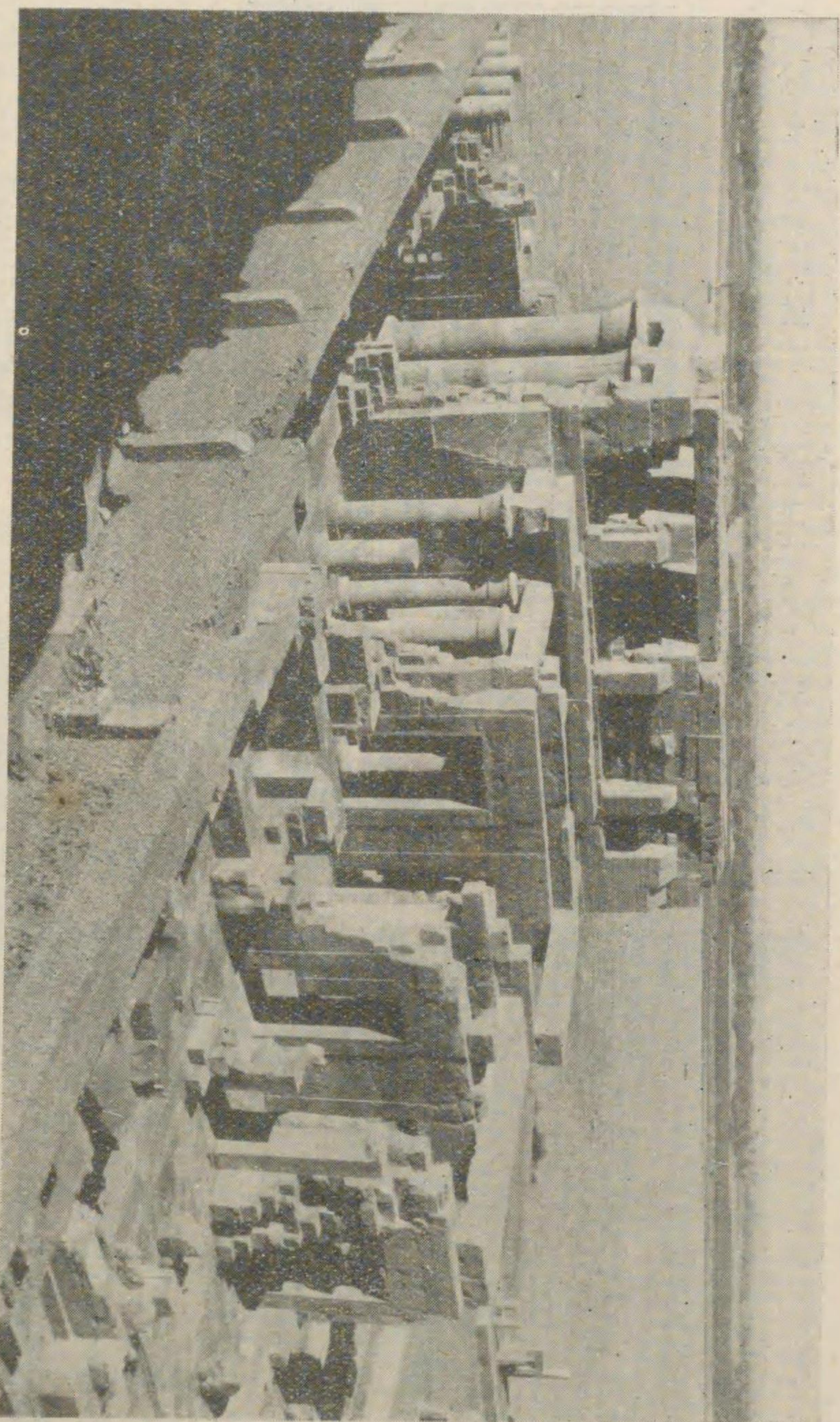
- ③ ソベク 心 禮拜堂
- ④ ハロエリス 禮拜堂

大正十三年五月



古夢・御坊から明日庵へ

いふ迄もなく此所に御坊堂が建つてゐる。宿を出ると堂は遙に見ゆるが、側へ来てみると河に面せる丘上に位置し、風景絶佳、河畔の諸堂中形勝の地を占むると當堂の右に出るものなし。だから我國なら差向き模範美女なる辨才天を祭るべきに、埃



女關 (Vestibule) 内流河畔御坊堂全景 (斜後の丘上よりみる) 後壁の崩潰を防ぐために煉瓦を以て積みたる控壁 (Buttress) に注意せよ。背景は内流河。

及では鷹頭人身の Haroeris と鱷頭人身の Sebek とを祭つたのである。而も此の兩神が我出雲國美保關に鎮座ましまする國幣中社美保神社本殿の様に、相殿造の神殿に永い年月中よく暮してゐたのであつた。

神様の御座所は石壁一つで直に隣合せになつてゐる、其鷹と鱷とは當國の神話によると仇同士であるのも面白い。カーナツクのアモン堂は其大きさに於て、江戸府のホーラス堂は完全に保存せられたる點に於いて、共に甚だ有名であるが、内流河に沿へる御坊ヶ丘に西南面して建てられた相殿造は例へ随分ひどく壞れてゐるにせよ、類例のないところでは恐らく天下第一だらう。

相殿造は早くいふと長屋である。長屋ではあるが洵に堂々たるもので、こんな立派なところに住んで居られた神様は、朝夕河を上下する帆船を眺めながら、至極平和に其日其日を送られたのであらう、美しいお住居と申上奉るよりほかない。遠慮のないところ景色の大きい丈け確かに美保神社よりよろしい。ところが有爲轉變は世の常で、いつか神社は忘れられ、邸もひどく破損した許りでなく、大部分土砂に埋まつて了つてゐたのを、十九世紀の末葉にすつかり掘出して大修理をした。そして列柱室の後側の壁の外側には煉瓦の控柱を立て、崩壊を防いでゐる有様である、堂壁の一部には左の修理略記が刻まれた大理石板を箆め込んである。

TEMPLE DOMBOS

古夢・御坊から明日庵へ

DEBLAYE ET REPARÉ

PAR

LE SERVICE DES ANTIQUITÉS

DE L'EGYPTE

DE XV JANVIER AU XXV AVRIL

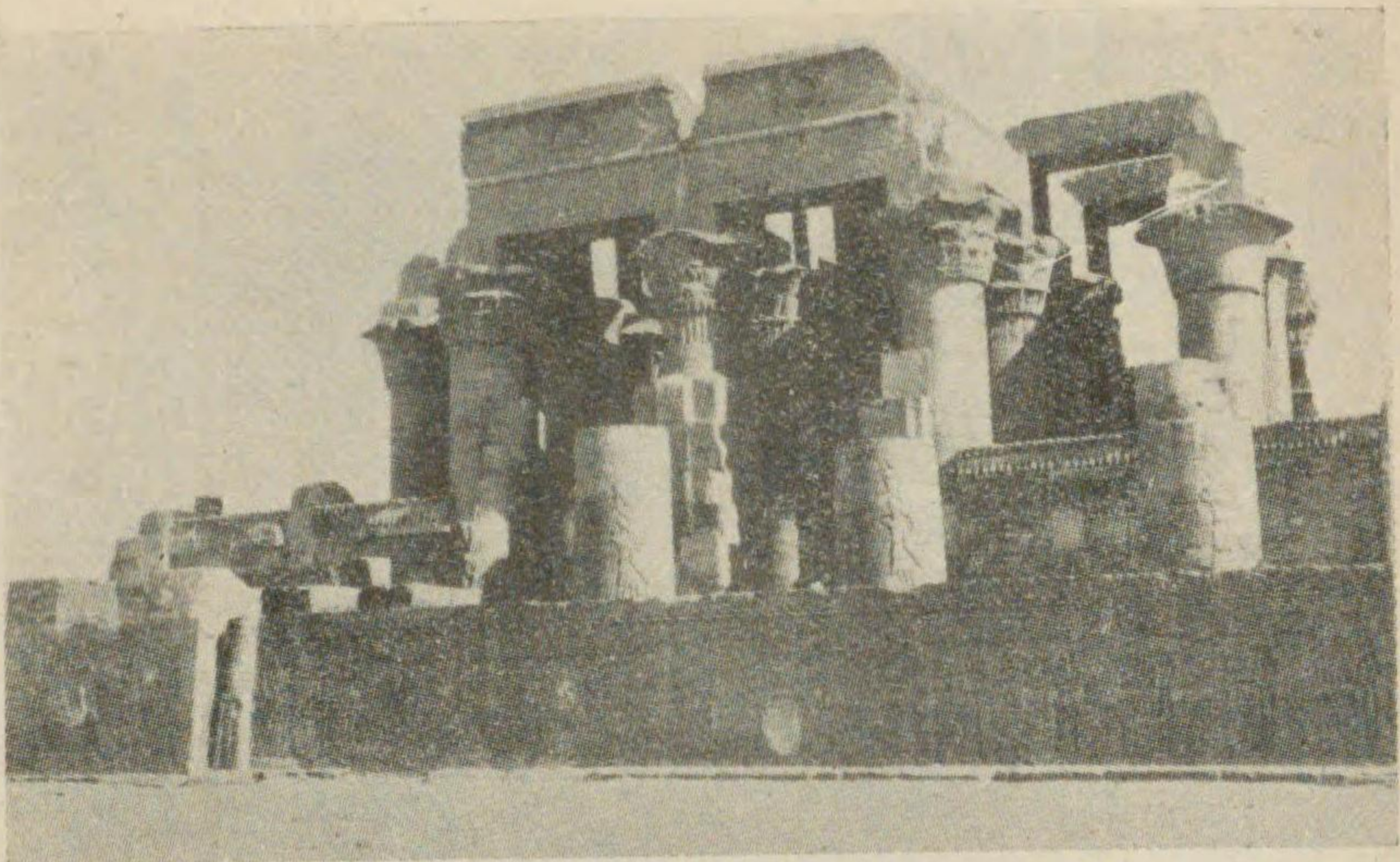
MDCCCXCHII

堂は其平面圖で明らかであらうが、入口から奥迄で別々になつてゐて、各室共入口は必ず二つづつ付いてゐる。先づ正面からいふと入口の大門にも二つあつたのだから、門其物が完全に残つてゐたら定めて面白いだらうと思ふ。大門を入れば型の如く中庭があるが、此の中庭から玄關への入口には柱が五本——今完全に三本——建つてゐるから、丁度中央に柱があり其兩側から入る様になつてゐる。だから物は全然異なるが、何となしに法隆寺中門の様な佛がある。

少しく脇道にそれるが、法隆寺中門は何故に四間三面二戸にしたか。側面三間は恰好上さうしたとしても、四間二戸はどうしたものか。御坊堂と中門とを一所にする次第ではないが、此所に祭れるハロエーリスとセベタとは其間に軽重はない、だから同様に二つ入口を作つた事いふ迄もあるまい。一方寺で最重要な建物は金堂と塔婆であること勿論である。此の金堂と塔婆とを東西に並べて

建てた以上、入口を二つにして東のは金堂へ、西のは塔婆へのつもりで、あの様は意匠の門を建てたのではあるまいか、と考へてはいけないだらうか知らん。何分他に遺物がないのだからそして書いたものもないのだから、確かなことは到底判りかねる。

玄關内には十本の柱がたつてゐて、其何れもが開花又は棕栂葉柱頭で、壁面の彫刻も亦頗る美事である。圖に示せるは向て右の入口の右の裏面ので、中央のは Ptolemy XIII. 即ち Neos Dionysos で、其左右は上埃及と下埃及の女神で、此王を祝福してゐるところである。どうして夫れが判るかといふと女神の戴ける冠のうち、圓錐形の様で末端小球形に終つてゐるのは、上埃及の白冠で、前低く後ろ高くして尖り、其中部より斜上に末端螺旋形に卷縮せる棒が出てゐるのが、即下埃及の赤冠である。だから此場合は向て左が上で右が下、そして御大は複合冠 (Double

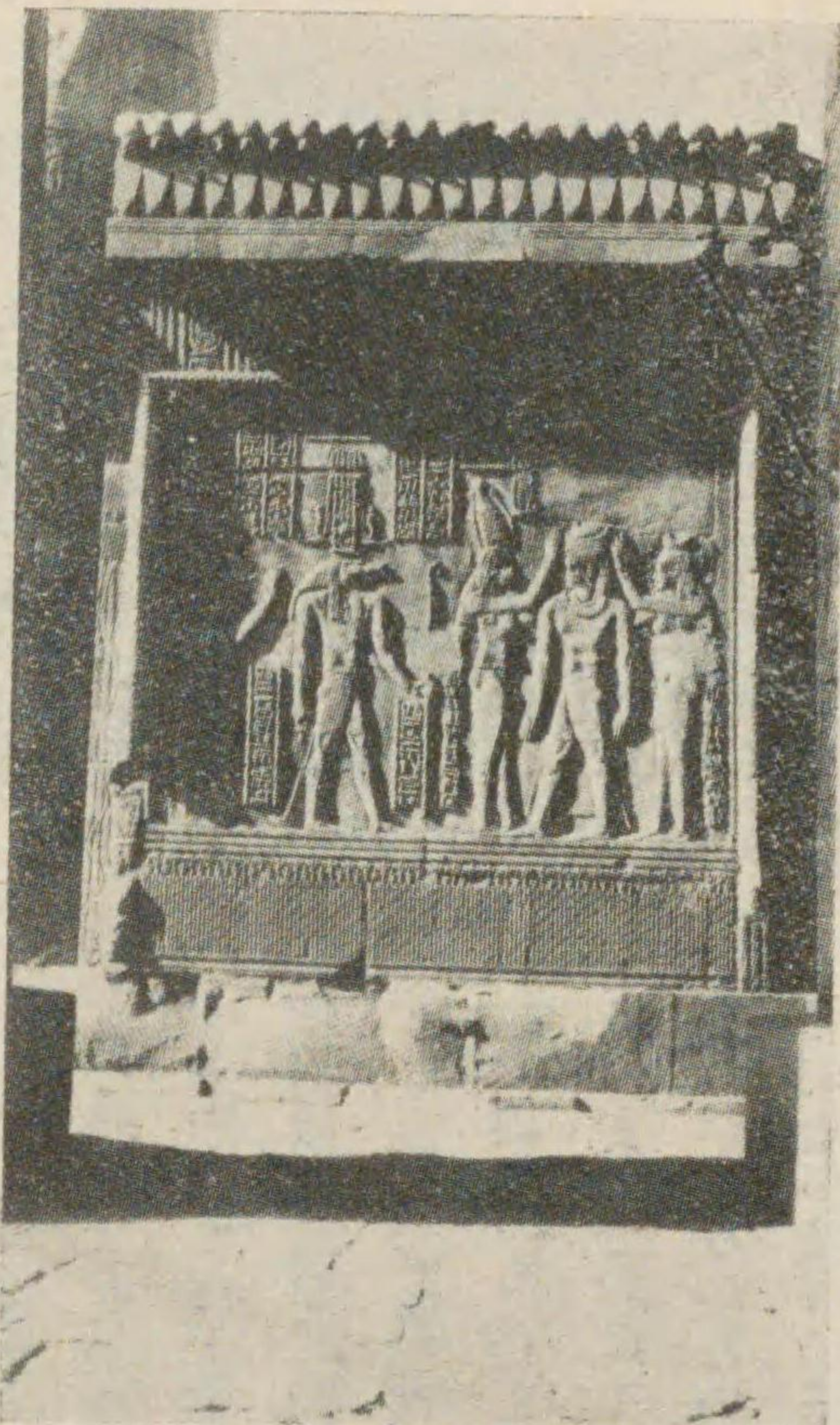


御坊堂正面

古夢・御坊から明日庵へ

Crown of Upper and Lower Egypt) を戴してゐるのである。其左は鱷神の Sebek で次は女神 Hathor であるが、最後の女神丈けは眞黒に蔭になつてゐてよく判らぬ。

も一つの浮彫は列柱室へ入つて直ぐ右手の裏側のもので、案内記に説明がないから間違ふかも知



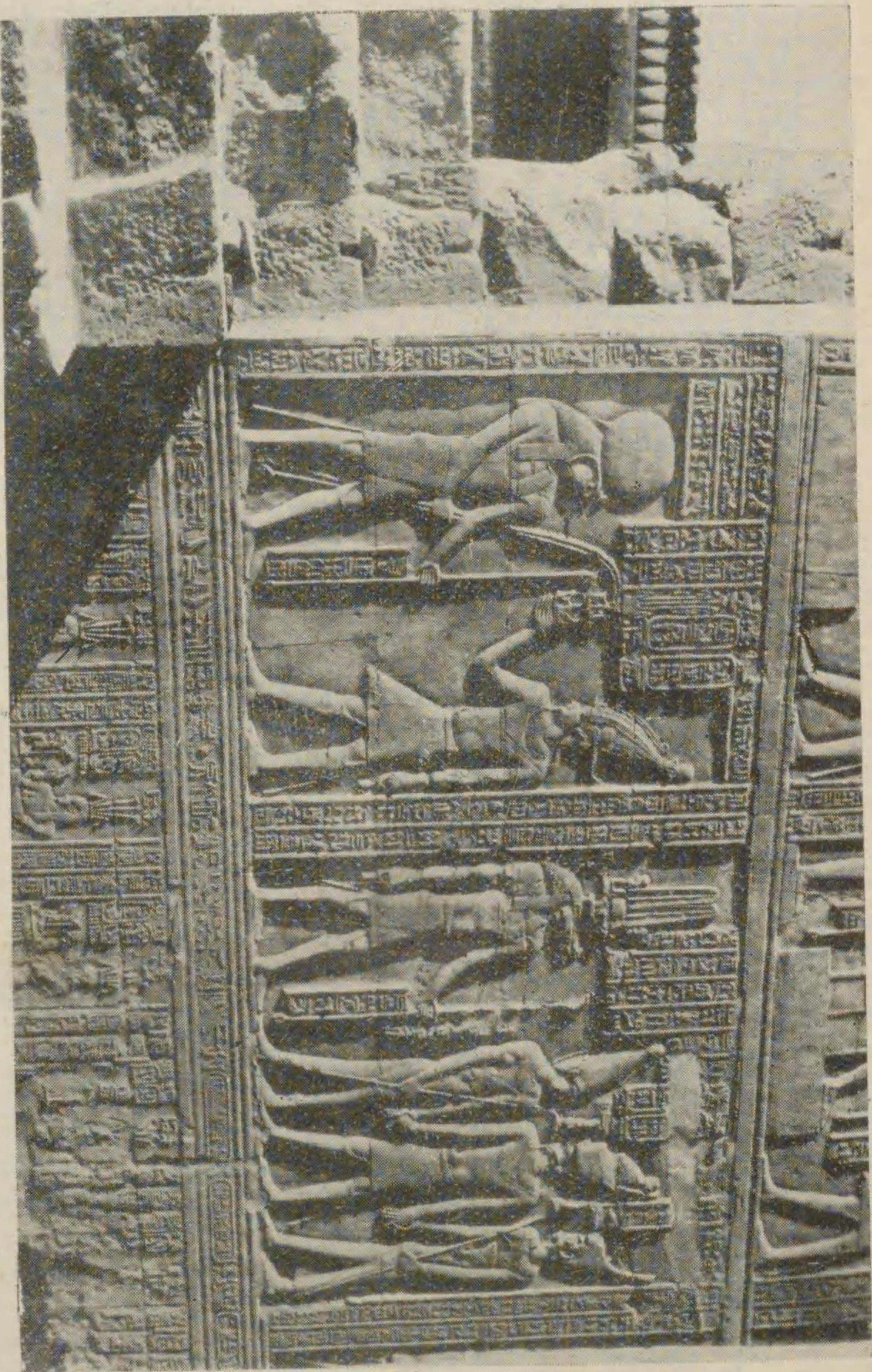
御坊堂壁面彫刻 其一

右端はトレミー十三世を上埃及下の埃及女神が祝福せるところ。其次は鱷頭人身のセベク。左端は(蔭になつてゐるが)女神ハソール

れぬが、左端は頭上に日輪 (Solar Disk) を戴ける鷹神で、夫れから一つ隔て右は鱷神であること明らかであらう、即ち此の二神が Ombos の主神であつたのだが、後に小亞細亞から所謂西域地方を経て支那に入る間に、

漸く進化(?)して鶏と猪となり、酉と亥となつて方角の神になりすまし、西方と北北西に納まつたと考へるのは少しく亂暴かも知れぬと思つてゐる。

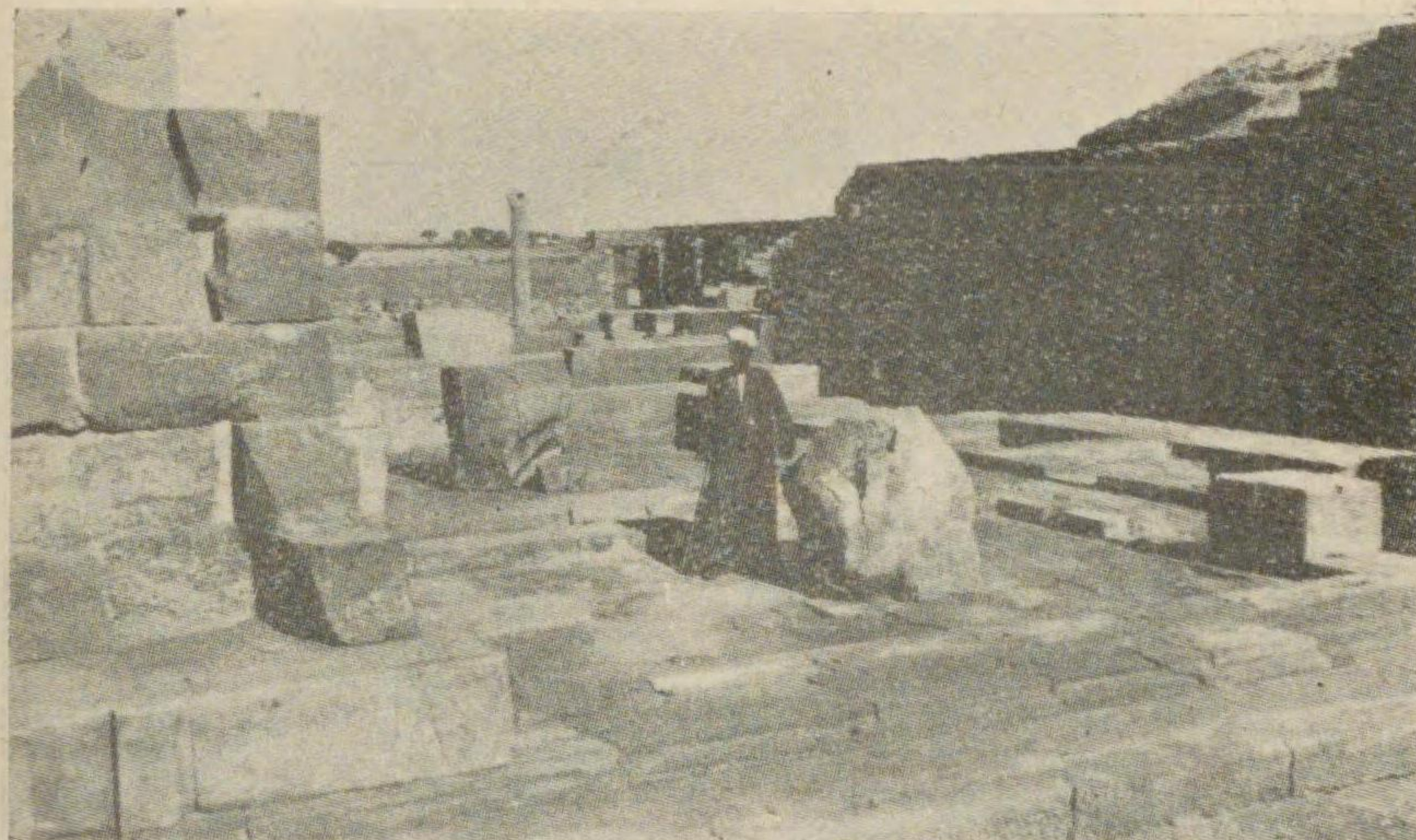
列柱室の後ろには室前が三つあり、其第三室の後壁に入口が二つあつて、右即ち北側のは鱷左即



御坊堂壁面彫刻 其二

左端は鱷頭人身の Haroëris 一つ隔つて右は鱷頭人身の Sebek で、共に Ombos の主神

古夢・御坊から明日庵へ

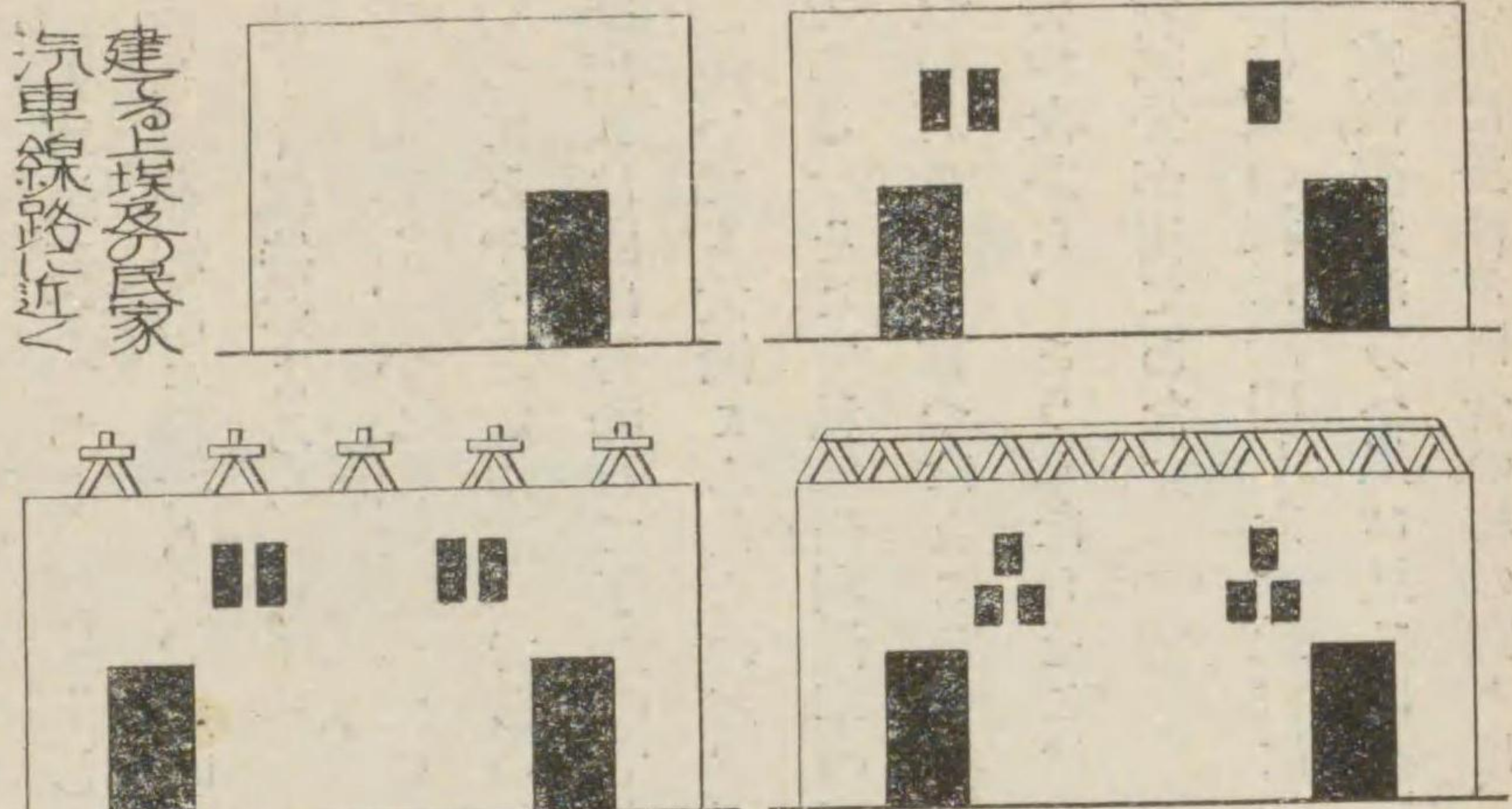


御坊堂内陣

ち南側は鷹の神殿であるが、其床の中央に黒花崗岩の臺座があつて、昔しは其上に神殿が安置してあつたのである、挿圖にある黒衣の人物は鱷神安置の臺座に沿ひて立つてゐるのである。

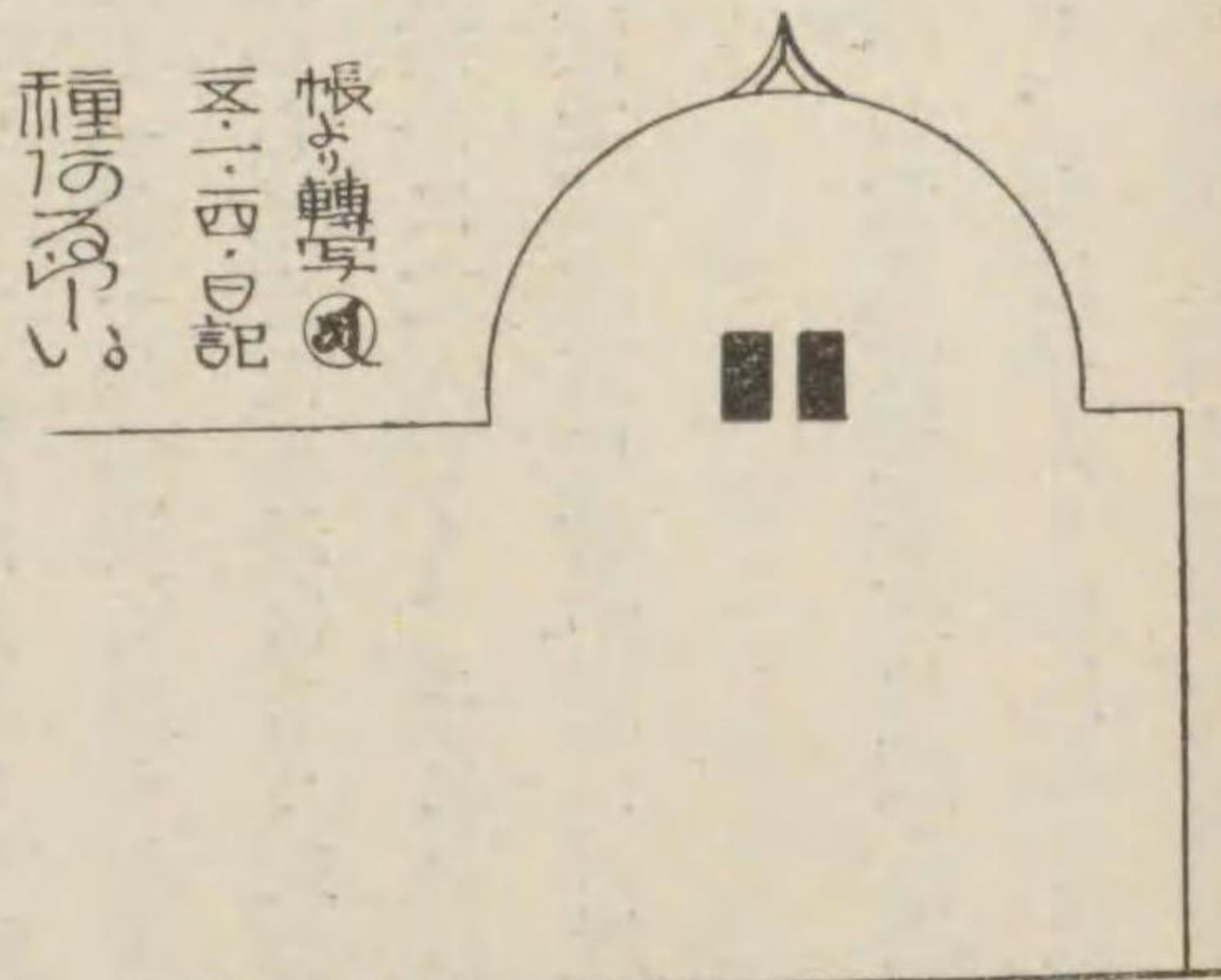
歸りは待たしておいた馬車鐵道で、往きと同じくたゞ一走り、晝食をすませて午後一時アスアン行の汽車へのつたが、相不變大變な砂で何とも仕方がなかつた。コム・オンボウからアスアン迄廿六哩、二等運賃二十四ピアスタア半。此間沿道村落の土民の泥土家屋の外観は甚だ面白かつたが寫眞は到底撮れなかつたから、大急ぎで汽車の窓から寫生したといふよりは寧ろ記憶であとから描いたのを少し掲げておく。汽車は二時半に着すべきのが一時間延着した、即ち三時半に漸くアスアン驛の歩廊に立つ事が出来た。

私は豫てラクソルから、此地の St. James Hotel と云ふのへ一室保留の手紙を出しておいたから、大概大丈夫で



建てる埃及家
汽車線路近く

古夢・御坊から明日庵へ



帳も轉學(四) 又二四日記 種あり。 根は王屋根(筒形穹隆)の二極(下)は此は當然である。屋も土煉瓦で積んだもので窓は家には先此様ものが多く、何れ落れ有様は益々面白なる。民明日庵に近づくに従ひ、沿道村

あらうと思つて此宿へ行つた所、宿屋は漸く三日前から營業を開始した許りで、客は一人もなく、階上の角の往來を隔て、河に面せる第一號室へ入つた、こんな好都合な事は再びあるまい。念の爲に記しておくが、埃及では大概の旅館は季節以外客が少なく、従て收支償はざるが故に休業して了ふのである、だから休まぬ家は特に『年中無休』と斷つてゐる。 暫く休憩してから河畔を下流の方向に散歩をした。こゝは片側町で、兩側に幅廣き人道をと

り、街路樹としてはアカシアが植ゑてある、町の建物は何れも堂々たるもので、學校や官公衙らしく、人車道共すつかり Pavé してあるから、洵に立派で且つ綺麗である、だから亞細亞洲の東端に位し、花彩島と稱せられ、近頃一等國に昇進したといふ日本國の何れの大都市の目貫の場所より遙に氣持がよろしい。

であるから、いゝ氣になつていつ迄も眞直に歩いた。其實汽車の窓からみておいた回教徒の墓地へ行つてみやうといふ下心であつたのである。初めからそんな事を言つたが最後、双六の骰子以上の案内人は直に否決して了ふのである。やがて案内人はもう歸らうといひ出した、理由としてはどこ迄歩いても大概こんなものだ、而も一步一步場末に近くなるといふので、如何にも尤も千萬の理由である。そこで私は先刻汽車の窓から見えた墓地はもう此邊ではないか、こゝ迄來たのだからもう近いだらうと言つたところ、彼は意外に大人しく、それなら此の邊から右に曲ると丁度よからうと言つたから、さうしたらそこは沙漠で、遠方に村が見え、近景に棕櫚樹等が生へてゐて、大分に熱帯氣分が出てゐた。

彼は次の様に説明した。此村は先年の世界大戦争迄は頗る繁昌してゐたが、村人は其後或は開路市へ或は蘇丹地方へ思ひ思ひに移住し、今は一人も住民がゐない、と。

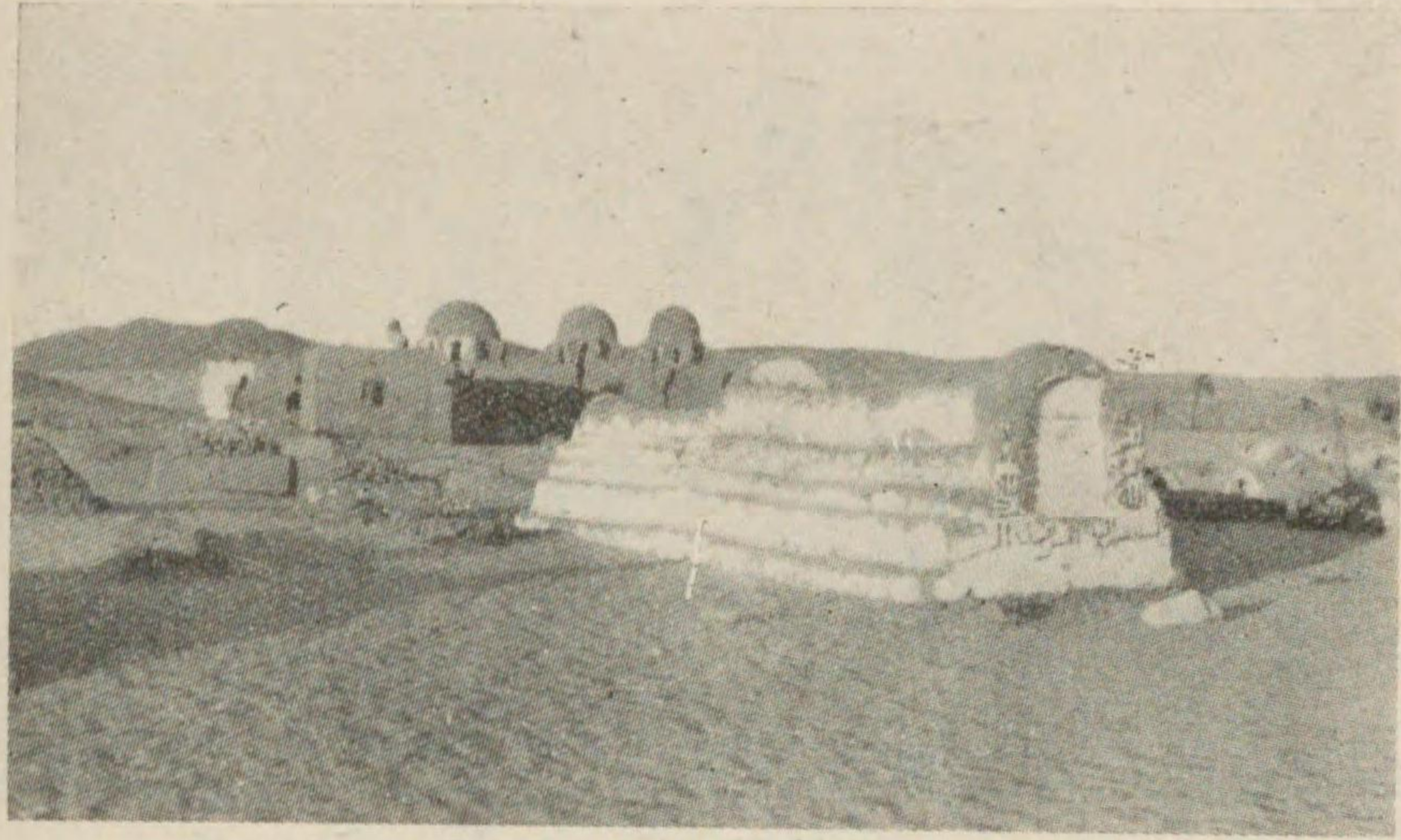
埃及に於ける田舎の村の家々は、内流河の泥土煉瓦で築造したものであることは既に屢々記した



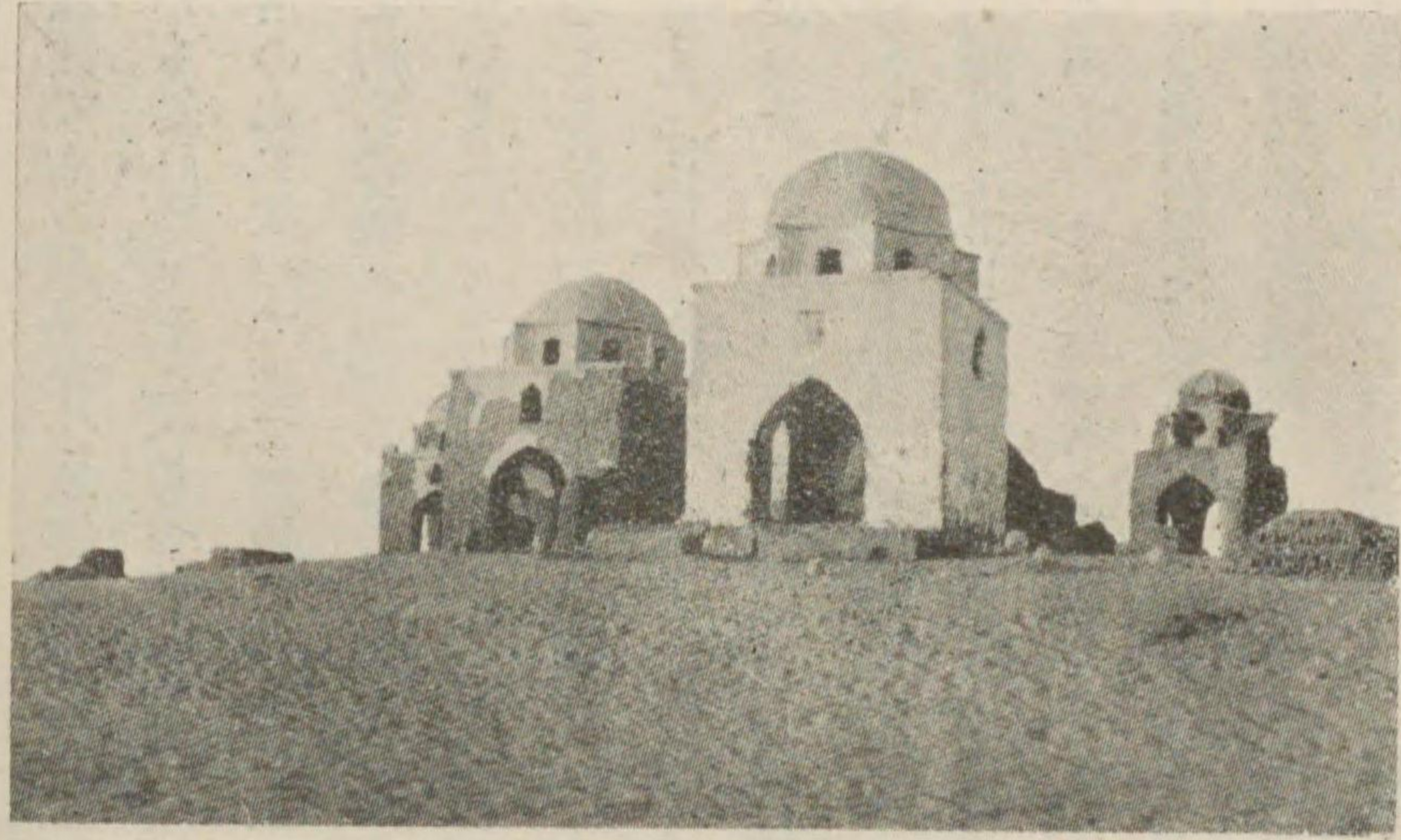
明日庵近郊の廢村。左前方に生ぜるは Dom 樹

のである。そして其建つてゐる地は砂つばらである、全然想像であるが、多分地價なんか随分安いだらう、或はたゞかも知れぬ。そこへもつて來て建築材料たる泥土煉瓦は、河の土を採つて來て四角に固めて並べておけば、直に乾いて所要の煉瓦がいくらでも出来る。だから勞力さへ惜まねばいくらでもたゞで得られる、だから勝手に自分のすきなところの砂つばらを掘り、自分でこしらへた Sun dried mud brick を積みさへすればいくらでも家は出来る、いはゞ子供の土いぢりを少しく大規模にやる位の事である。だから殆んど只刃で家が建つ、だから一村全部を沙の中へ奥津棄家にしたつて、たゞ勞力丈けの損で金錢上の損害なんかちつとも無いのだらう。まさか、かう簡單でもあるまいが大概似た所だらう。

夫れから希望の墓をみた。面倒だから案内人にはこの邊で待つていろといつて、附近の部落に待たせ、私一人墓地



明日庵近郊に於ける回教墓 其一



同 其二

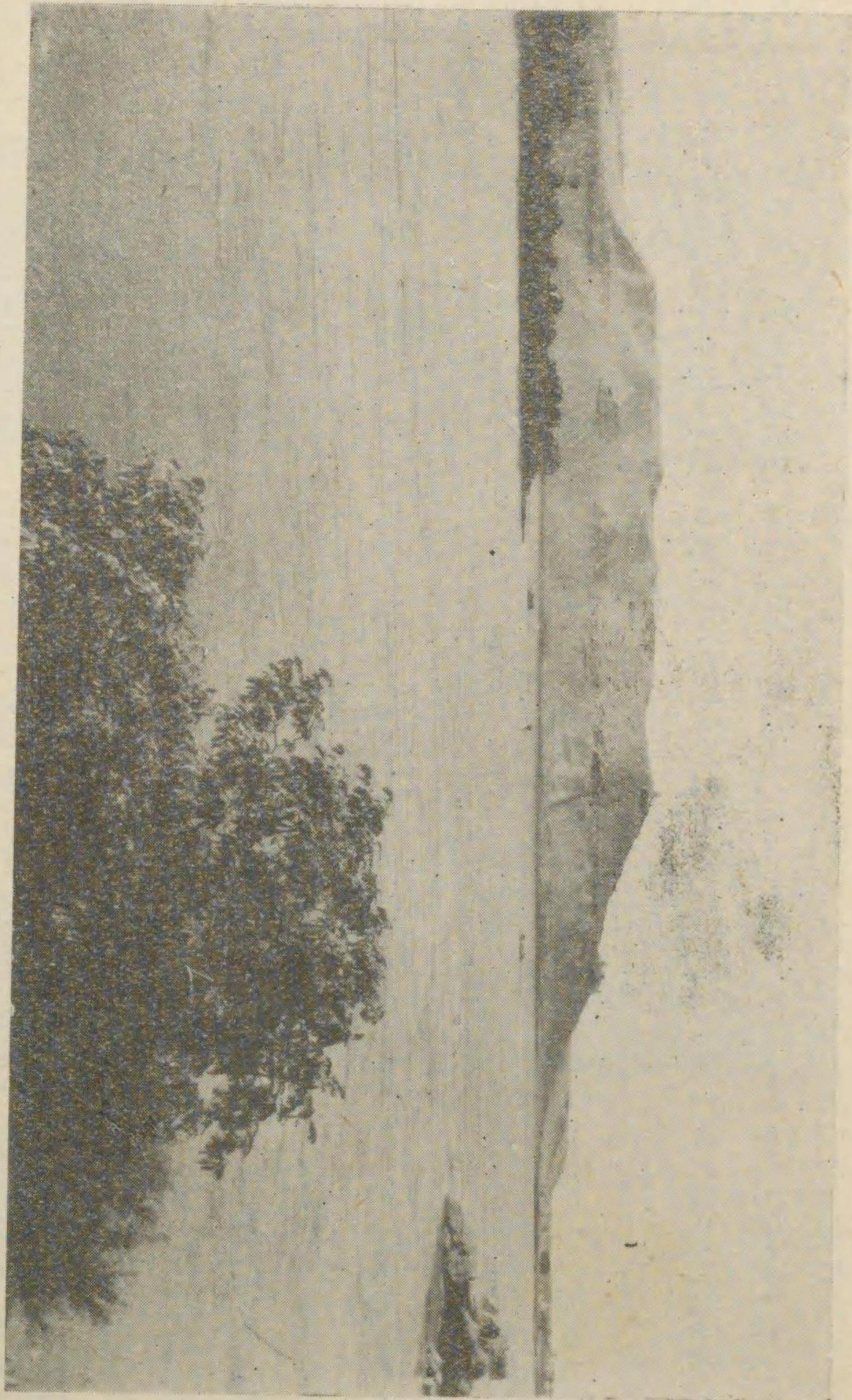
二二〇
に進んだ。此時は最早夕方、太陽は大分地平線に近づいてゐたから、割合に弱い光線が平たく特殊の建物に當り、一種の淋しい東洋氣分を感じたのであつた。此所には二種の墓があつた。其一是平面が細長い方形で、立面は段形をなし、端邊は兩方共切妻形に終れ

るもので、他は尖拱型の入口を有せる方形の構造物で、上に頂塔を有せる圓蓋を頂き、墓標は床の中央にありて、其形前者の如し。だからこの方は先づ廟と言へる。この二つは挿圖に出しておいたから、形は夫れで判る筈である。尙後者の頂塔は其平面内擺線の如き輪廓を有し、而も夫れが異常に發達して上の圓蓋よりすつと大きい。そして其頂塔に小窓があいてゐるのは、規模に於いては比較にならぬが、東羅馬建築を直に思ひ起させるものであつた。

墓は此の位でやめて、元のところへ歸つてみたら、案の如く彼は痲痺をきらしてゐた。それでもう直にバザールをみて歸宿しやうといつた。もう此時は大分夕方になつてゐたから、寫真をとるには晩過る、だから其申出に賛成して見に行く事にした。どうせいぬか、はなのだから、いくら見たつて少しも損はない。

道路の幅は開路市エル・アザア寺附近の夫れより大分に廣いが、こちらの方が遙に暴夜氣分が出てゐる。こゝこそ一層『暴夜物語』の挿繪其まゝであつた。併し開路市のほど賣りつけ様ともせず案内人も亦買へとも言はず至極無事平凡に通り返けて六時歸宿をした。

今夜泊り客は私一人と見え、食堂は誰れも居ず淋しかつた。夫れでも私一人に對してヌビアの給仕人が二人つききりであつた。室内裝飾が薩張駄目だつたから問題にならなかつたが、これで少なくとも窓の頭が馬蹄形で、壁紙が回教式だと大分に工合がよかつたらうと思つた。兎に角こんな



明日庵市 St. James 館の私の室からの眺め。遠景に見える内流西岸の丘は其中腹に古代の窟墓があり其頂界線の右端に尖つてゐるのは Sheikh's Tomb。左方黒く近く河中に突出せるは Elephantine 島 (象島) の一部、近く繁茂せるは街路に植ゑてある Acacia 樹。

は正に開闢以來の出来事であつた。

夜はいゝ月夜であつた。夜になつてから川に面した窓から非常に涼しい風が入つて來た。窓に近い寢臺に轉がつてゐると晝間の暑熱を忘れる。埃及へ來て以來初めてのいゝ心持の靜かな夜であつた。それに名物の蚊は一疋も來ないから尙更申分はなかつた。少し奮發して玄關上の露臺へ椅子を出してそこで涼んでゐると、前に Elephantine 島 (象島) を隔てゝ古代窟墓のある丘を後方に望み、其頂上にたてる Sheikh's Tomb は月光を浴びて青白く人の子一人通らず、島には燈火一つ見えず、其繁れる森は青黒く、泥を含んで音をもたてず大様に緩く流れてゐる内流の河は如何にも阿弗利加第一と頷かれる。天晴れ雲なく暗々たる明月は天に懸り、總てが靜まり返つてゐたこの大きい景色は、未だに忘れる事が出來ぬ程深い印象を残したのであつた。

私は、もう十二年餘も前のことであつたが、所用あつてある月明の夜、奈良市の西郊なる唐招提寺を訪ふたことがあつた。境内に入つて諸堂をみたとき、新田部親王邸の建つてゐた頃より、鑑眞の來朝、招提寺の建立、其沿革が順々に頭の内をかけ巡り、暫く芒乎と立つて古を偲び、一種異様の感に打たれた事があつた。ある年、法隆寺の慈恩會を拜觀し、大講堂内に一夜を徹した時も、同じ様にいゝ月夜であつたが、心なき雇人共が大聲を出して喚いたり、胡服をした人が横行したりしてゐたから、夫れ等が邪魔になつて此時は遺憾ながら左程時代逆行が出來なかつた。

印度で佛蹟巡拜をした序に、Taj Mahal 見物の爲 Agra へ滞在した時も、丁度満月の前後で連日連夜の好晴であつた。案内記にも月夜の遊覧を勧めてあるし、宿の番頭や食堂の給仕頭も連日此好機を失せぬ様、一度月下のタージを思ふ存分觀賞し給へといったが、猫も杓子も行くのでいや氣がさして止めて了つた。どうも時代逆行をやるには私はいつもたつた一人でなくては思ふ様に行かぬのである。

處が幸な事には、今夜は全く總ての條件が充たされてゐた。だから心中幾度か自身の幸福を感謝しつつも此の光景に對し思ひを埃及六千年の歴史に馳せ、いゝ氣持になり心中何の不平も心配もなくなつて了ふ事が出来た。

突然ムスタファが出て来て、もうお休みなさい明朝また早いからといふ。時計をみたらいつか十時が過ぎてゐた。今餘りいゝ景色だからみてゐたのだといつたら、彼は今に遊覧季節になると、月夜の晩は滞在の旅客が思ひ思ひに船を浮べて川を上下する、だからこの前等は中々賑かです。といった。さうすると私は僅に二週間位の事で邪魔物のない静かな淨らかな夜景を心ゆく迄に觀賞することが出来たのであつた。これが幸運でなくてなんであらう。(大正十三年六月十四日稿了)

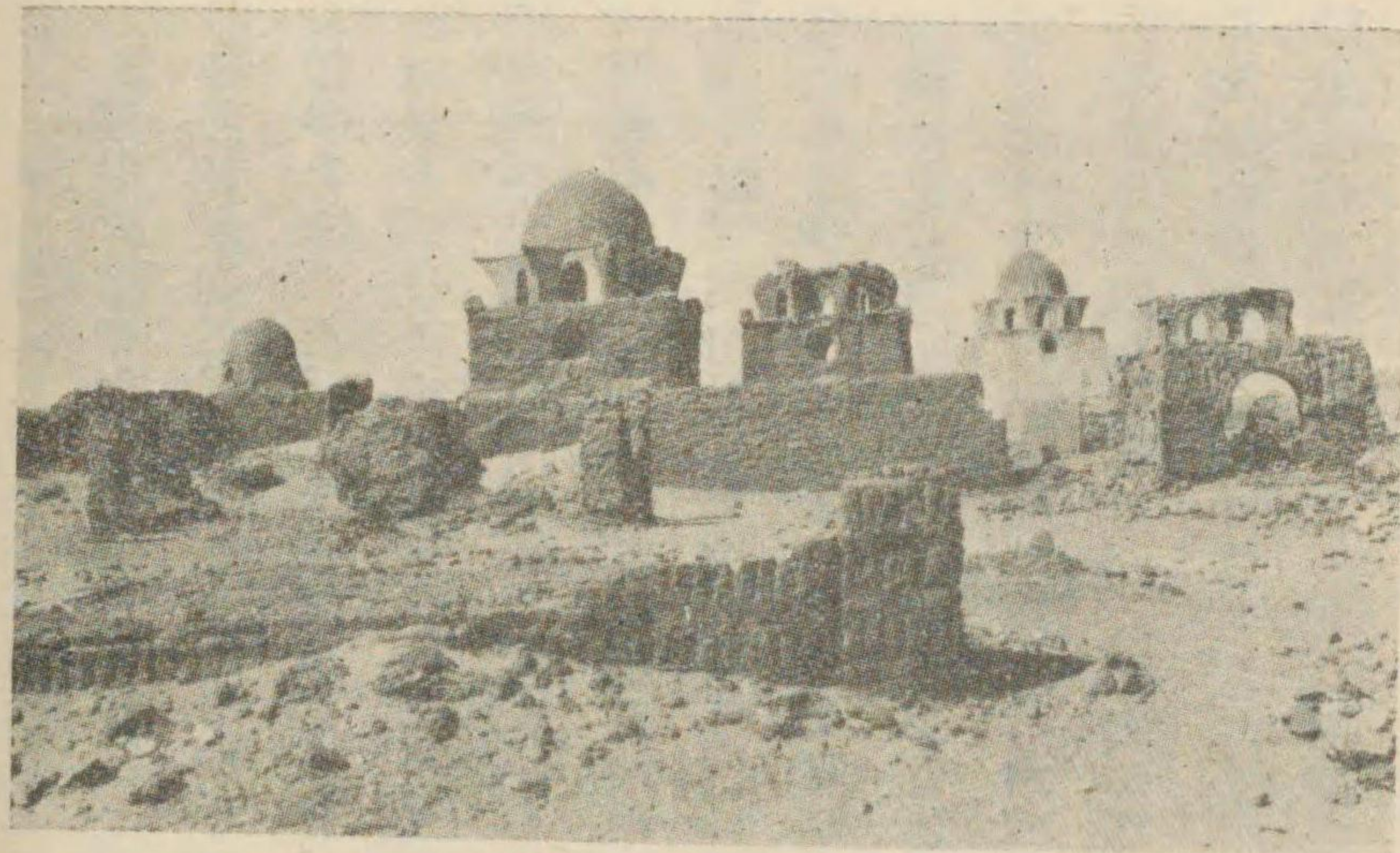
拜禮島・大石堰堤・窟墓・象島

十一月一日

(水曜、好晴)

五時半に起きたが相變らず非常な好天氣なので勇氣百倍、今日は Philae 島——fa'i'i, fi'le 1 様の發音があるが、私のきいたのは耳が悪いせいか何れもファイレーときこえた、だから拜禮島といふ當字を作つた。どうせほんとの發音が我國の假名で書き現はせぬ以上、この位のところで澤山であらう——のアインス堂の見物が出来るので、而も夫れが豫てからの希望だつたので、そこへもつて来て好天氣なので、起きたてから嬉しくてたまらなかつたからである。

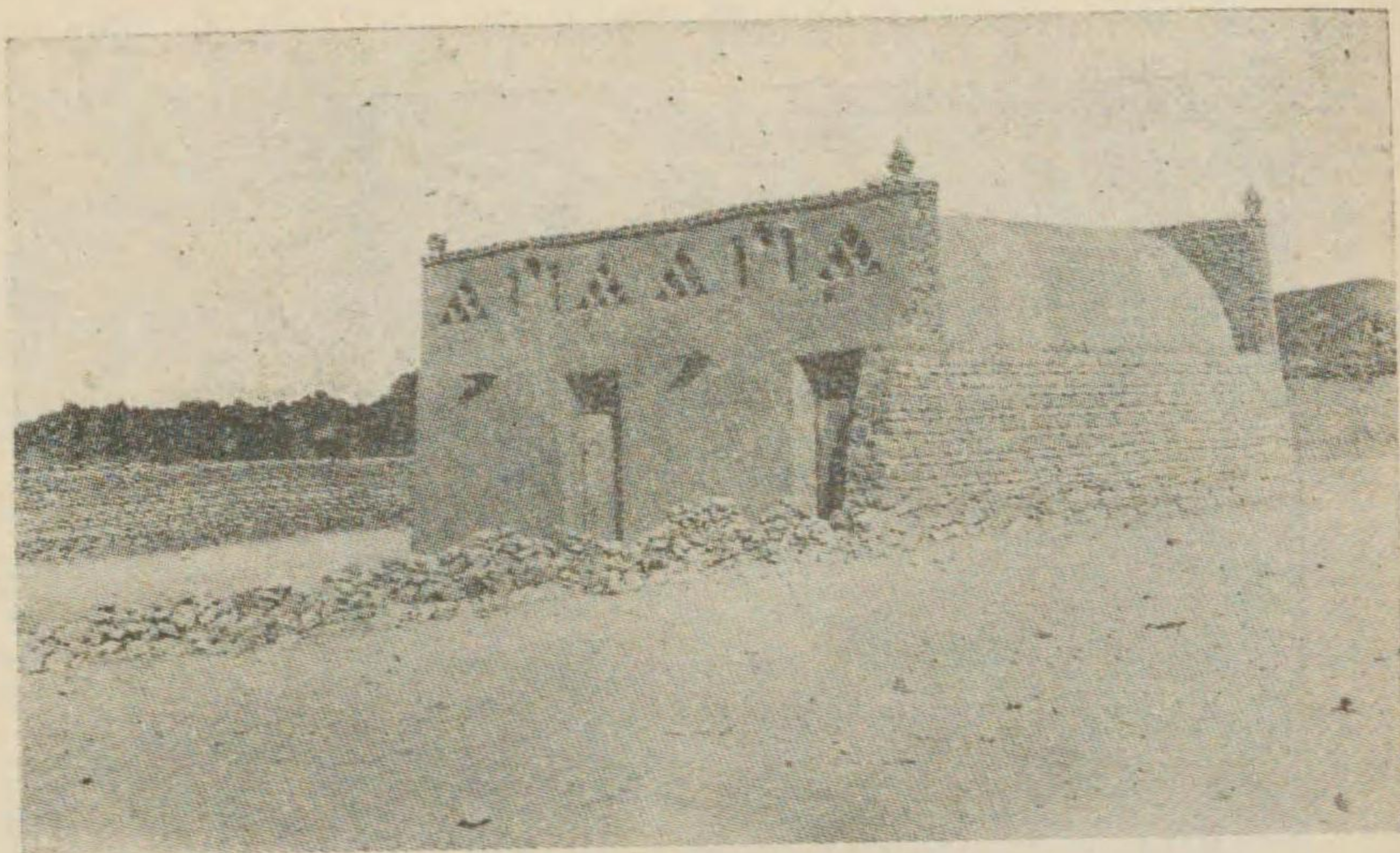
明日庵から Eri Shellal 村迄汽車がある、併し私は驢馬で出かけた、汽車だと七哩半を三十分で行けるが、案内記にも沙漠道を行つた方が面白いとあるし、案内人も夫れを勧めたし、私もさうしやうと思つてゐたからである。そこで八時五分に宿の前から驢馬にのり河に傳ひて南行し、大瀧館 (Cataract Hotel) の脇から暴夜墓地を通り抜けた。此墓地にある墓は大體昨日みたのと同じ様だが、上部明取の部分の外側は八角形で、其各角點に當るところの上端はおそろしく前方に突出してゐる事圖の如くである、故に上が開き過ぎ、且つ昨日のより一層刺々張つてゐるから、形は餘りよくないが併し大分變つたものである、そして斯様な墓が相當に澤山、可なり荒廢の状態に於いて砂つばらに建つてゐるところは確に一異彩で、私の様な墓標のすきな者にとつては、正に旅情を慰むるに足りるのである。



標墓に於ける墓地夜暴

此所から暫く炎天干になつて行くと古い壁の壊れがある。案内人は羅馬時代の壁だと言つたが、案内記には中帝國時代（前二〇〇〇より前一五八〇〇まで）に内流河を上下する船舶に對し、東方の沙漠に住する蠻族の攻撃に備ふる爲めに築造したものであらうとある。私には判斷の能力がなかつたから、此の壁についてもたゞさうか知らんと思つて、驢馬の上から眺めておいた丈けであつた。

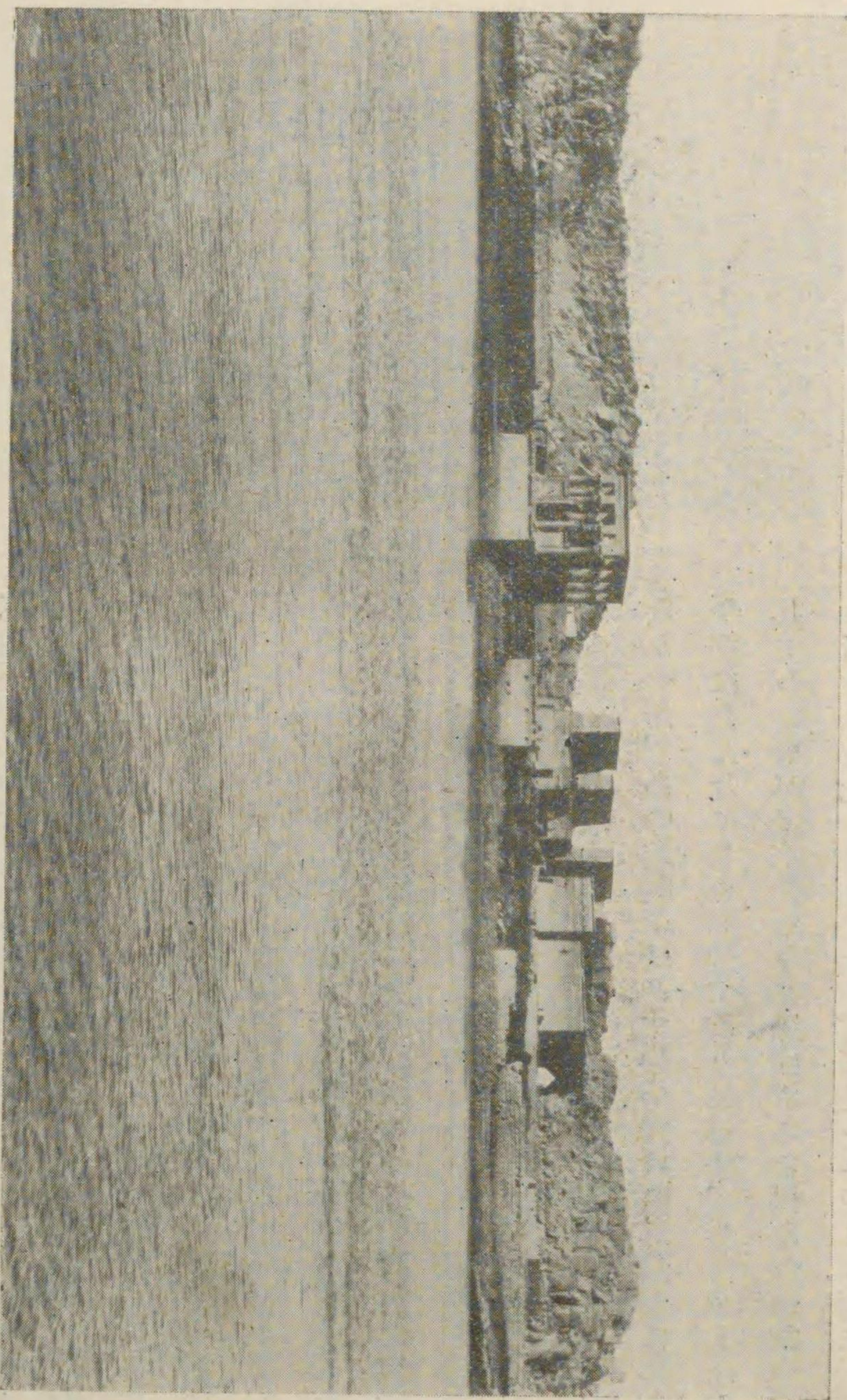
夫れから少し行くと右手の樹木の生えてゐた分れ道から、背中に一ぱいに砂糖黍か何か負つた駱駝が一疋出て來た、よく馴されてゐると見え、たゞ獨りで主人の家への歸途らしい。豫て駱駝は沙漠の船として重寶がられてゐるときいてゐたが成程背中には肉質の隆起があつて其内に滋養分を貯へてゐるし、胃は特別の構造をしてゐて水が溜つてゐるから數日間飲まず食はずに平氣で歩く、其上保護色を帯びてゐるからうまいものだ、駱駝が沙漠



El-Shellal 村の民家

に住むのは當然であると思つてゐた丈けで、砂つばらを歩く工合はみた事がなかつたが、今日初めて目前に夫れをみたのである。即ち四足の下側即ち足の裏に特別の蒲團がついてゐて、彼が砂の上に足を下ろすと砂が凹む代りに其蒲團が凹む、だからいくら歩いてても我々の様に足が砂にめり込んだりすり下つたりする事は絶対にない。砂上を行くと恰も平地の如しである。だから背中の瘤と胃とこの蒲團とで立派に沙漠の船たる資格がある。彼が澤山の荷物を背中のせ急がず騒がず泰然自若、のそりのそりと砂つばらを歩いてゐるところは聖人君子の如くであつた。翻つていとも慌てゝ失敗してばかりゐる自身を省み苦笑せざるを得なかつた。あの駱駝のせめて半分丈けの落着があつたら、今迄にあんなにしくじつて許りはゐず、もう少しはどうかしてゐる事が出來たらうと思はざるを得なかつた。

行くこと約一時間にして、漸くシエラール村に近づいた



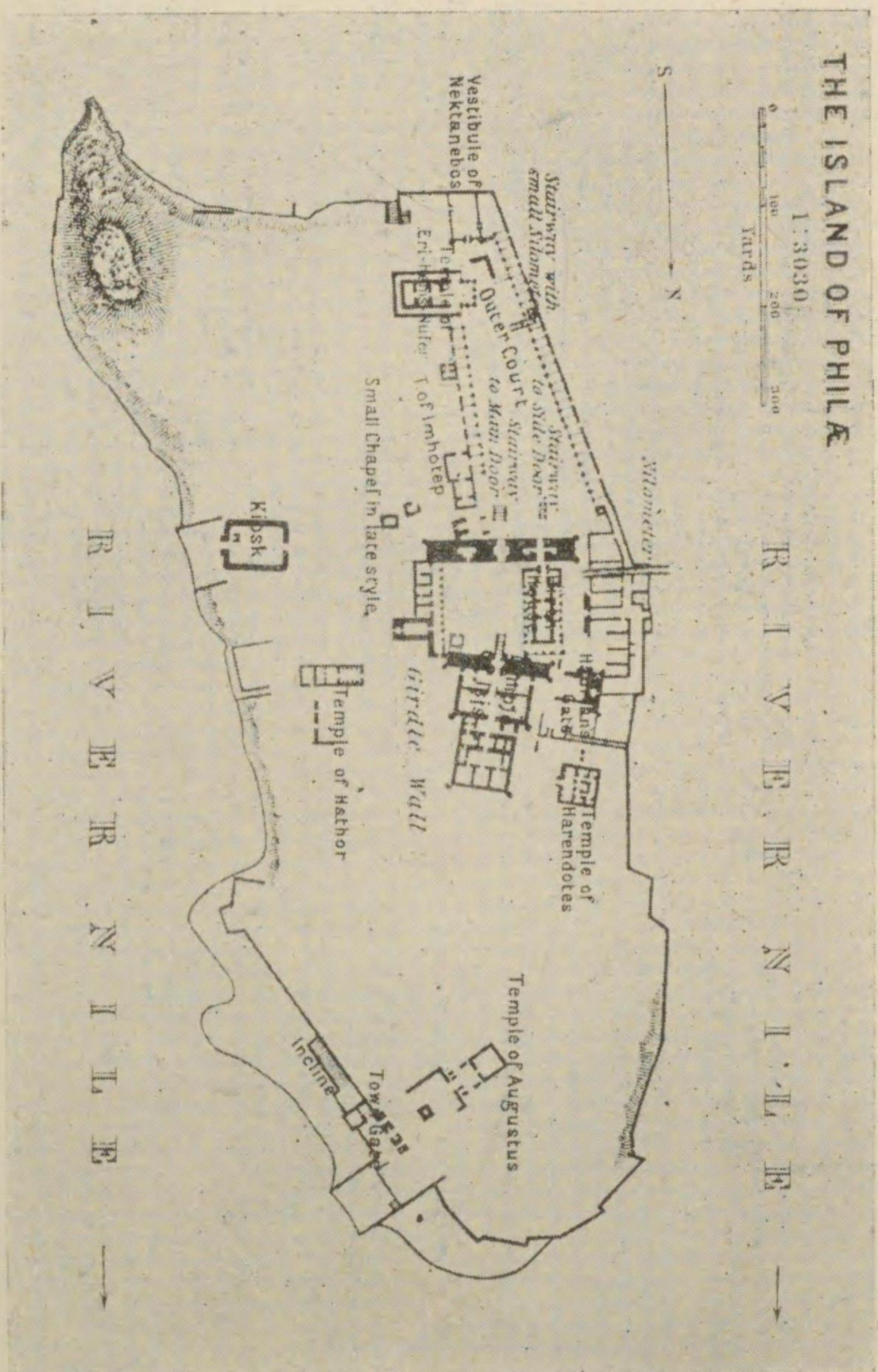
拜禮島 象墓

と見え、あちらこちらに人家が見え出した。民家は一昨日マハミツド驛で汽車の窓から見たのと同じ様に、何れも泥土煉瓦を以て築造したもの、其平面は方形で屋根は筒形穹窿、やさしく言へば蒲鉾形、三々五々集つてゐるのを一々そばへ寄つて見たかつたが、時間は到底かゝる道草を食ふ事をゆるさぬから潔よくやめて了ひ、漸く通り路から最も近くに建つてゐた家を背面から寫真にとる事が出来た。こゝに圖示したのが即ち夫れである。無論正面からの寫真がほしかつたのだが、正面の方は生憎逆光線になつてゐたから止めたのである。正面でも背面でも出入口や窓の工合は全く同じで、たゞ一は側面の如く煉瓦が一々現はしてあり、他は圖の如く一面に土が塗つてあつた丈けの相違と記憶してゐる。如何に日光は強烈で温度は高きにせよ、窓がこんなに高く且つ小さくては、坐つてゐては勿論、立つたところで外が見えるではなし、随分つまらぬだらうと思はれるが、何れの家も大概かうであるのを見ると、人々何れも斯様な家で満足をしてゐるのであらう。先祖代々かゝる家に住んでゐれば別に不平でもないし、いやでもない筈である。

拜禮島は可なり遠方から道の右手に明瞭に見える、と同時に汽車の終點シエラール驛は左手に見える。こゝから先き Wadi Halfa 迄は汽車はなく、更にまた Wadi Halfa より Khartum 迄は汽車が通じてゐるのである。

シエラール驛を左にみて道を右にとり、河岸へつくとそこに小船が待つてゐて、乗ると五六分で

拜禮島 大石堰堤 窟墓 象島

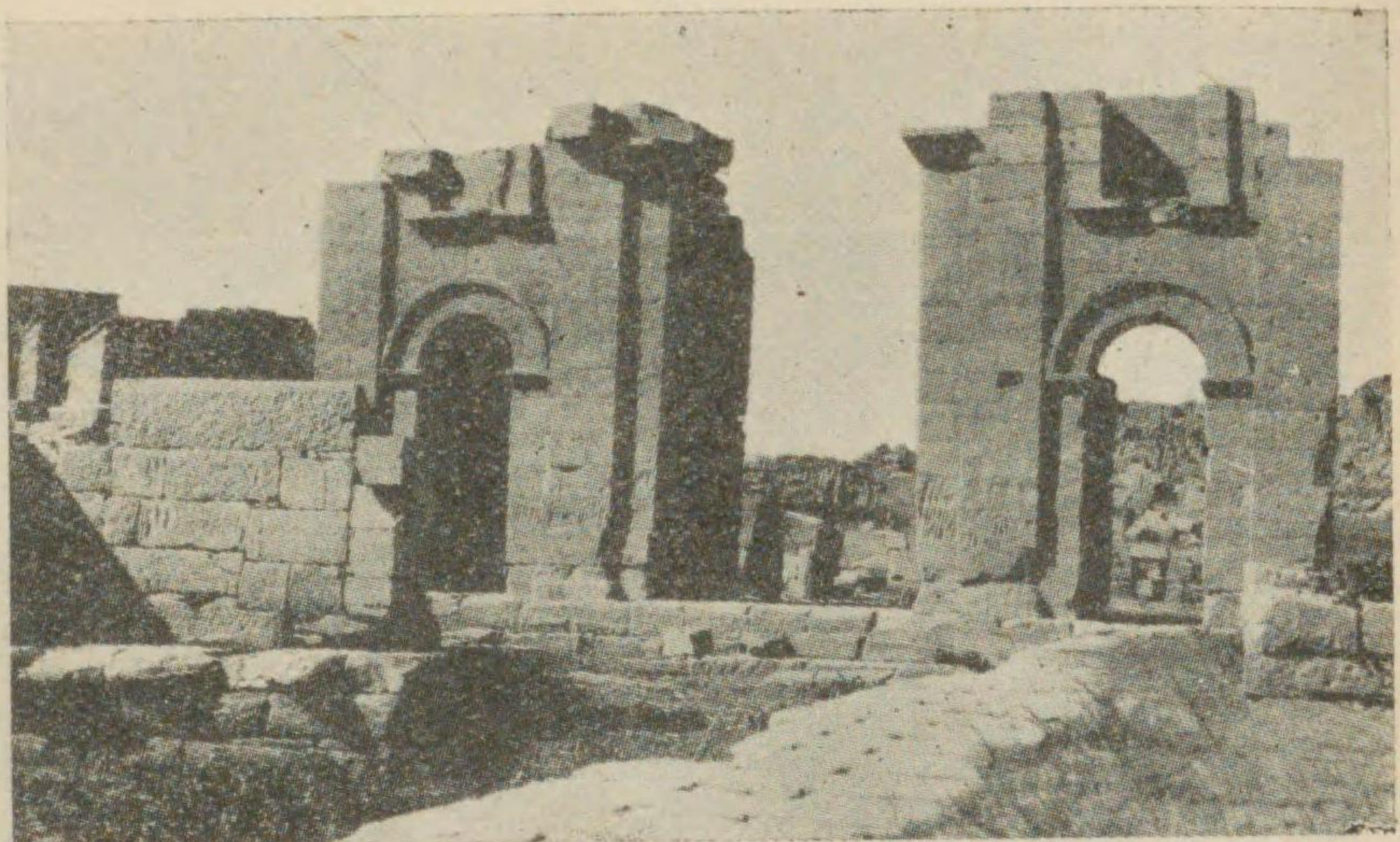


Philae 島平面圖（ベツカの『埃及』より複製）

島につく、上陸地点は平面圖の右手下側 Augustus 堂の前 Town Gate とある邊であつた。

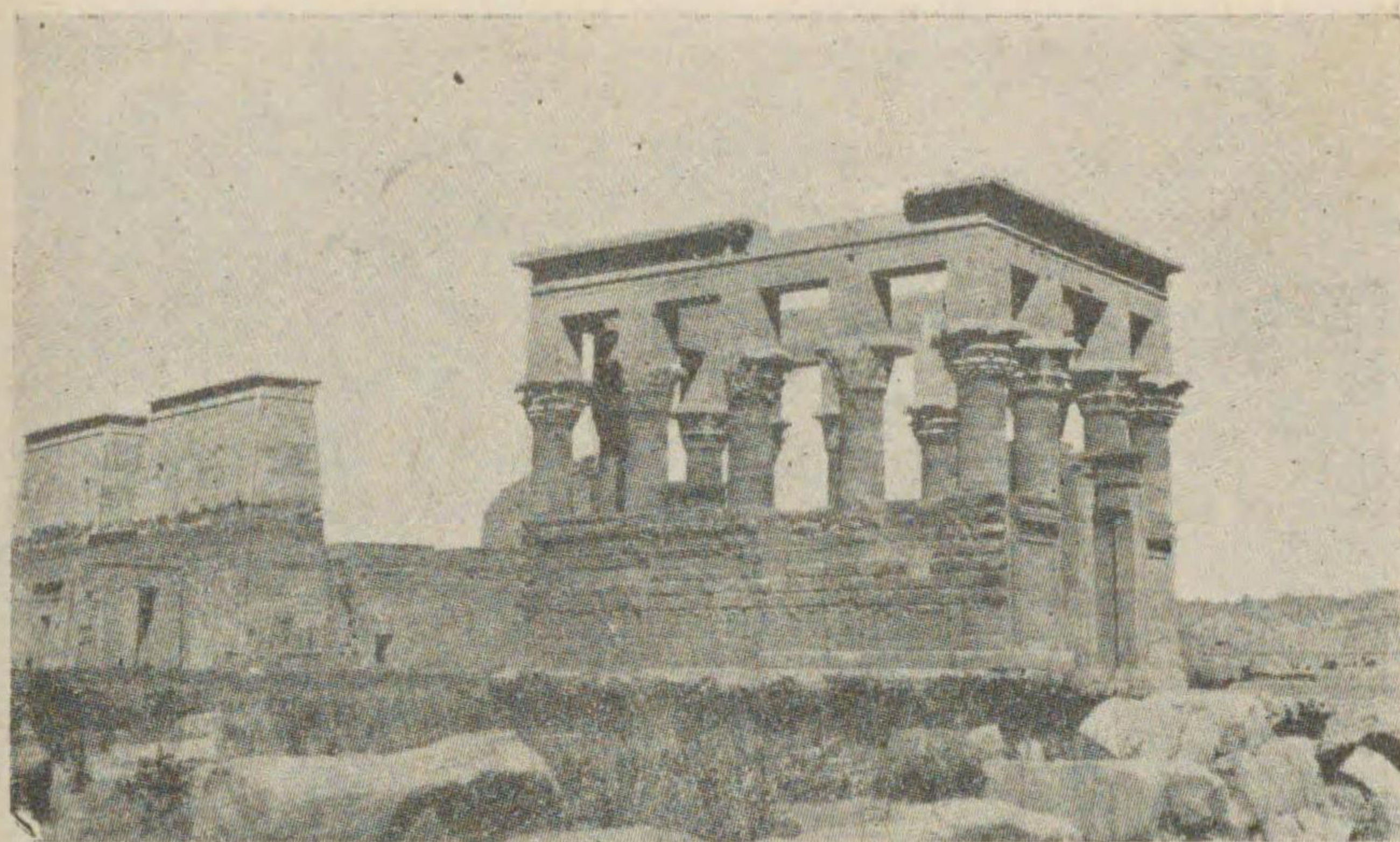
先づ此門より記載を試みやう。其様式は普通羅馬にある凱旋門式で三門あり、中央の門最大にして左右のは小型である、此を我國の式で言ひあらはせば『三間三戸單層平屋根造』となるが、今は半分から上は壞れてゐる、Diocletian 帝の創建と考へられ、大して立派なものではないから、圖に示す要もなからうが、埃及、而も上埃及のアイシスの本場なる此島に斯様な建築があるとは一寸考へられぬ、だからこんなものもあるといふ一例に出す事にした。

此の門の直後にあつた Augustus 堂は殆んど全部壞れてゐる。私はそこを一瞥して左に曲りハソールの小堂の脇を通て所謂 Kiosk (涼亭) へ行つた、涼亭に Pharaoh's Bed と云ふ。斷る迄もなく此の涼亭は島の主要なる裝飾であることアイシス堂以上である。亭は羅馬帝國時代に起原



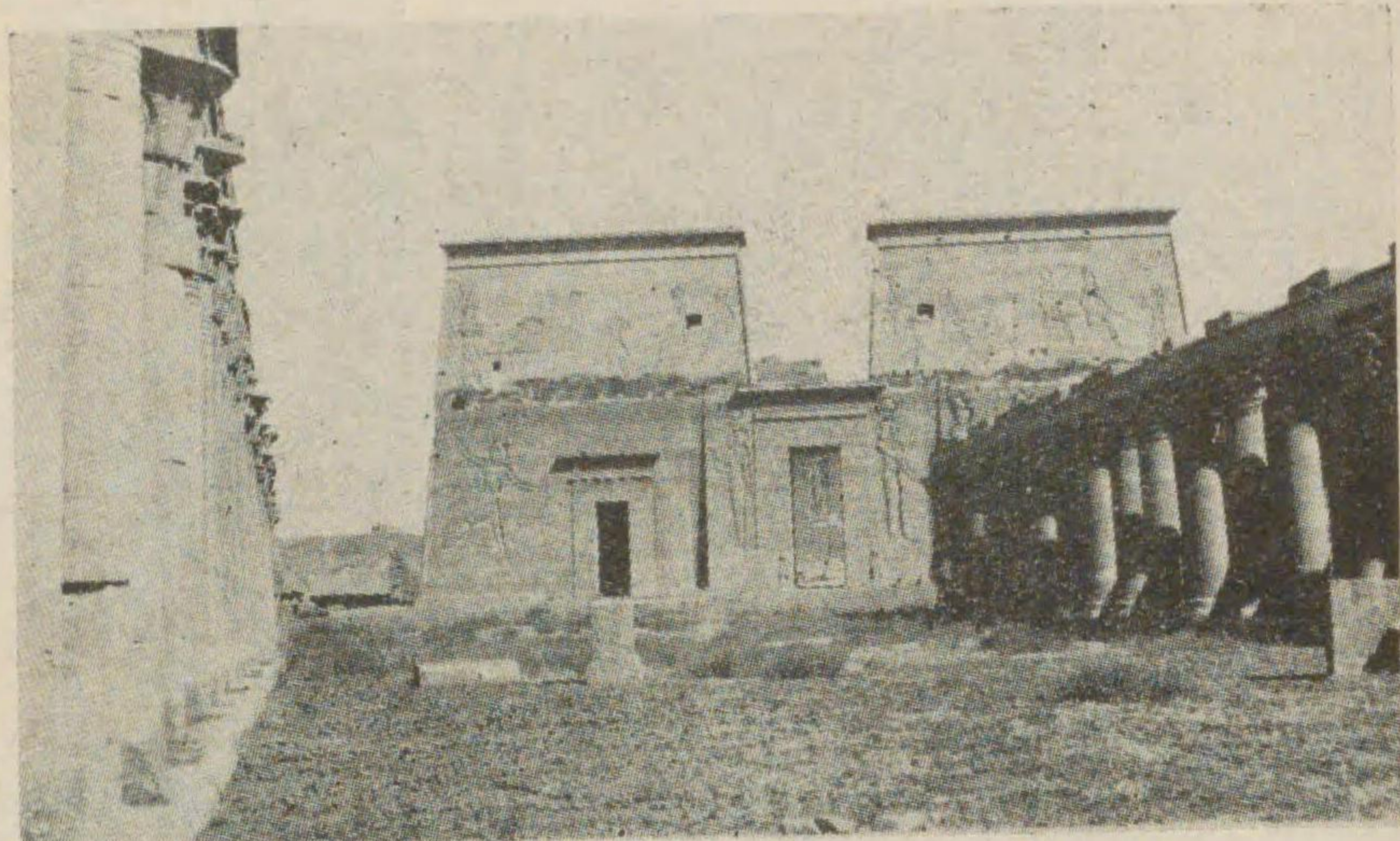
Town Gate

拜禮島 大石堰堤 窟墓 象島



涼亭一に Pharaoh's Bed といふ。左に見ゆるはアイシス堂の第一大門である。

するもので嘗て完成された事はない。其周圍十四本の開花柱頭上の四角なところは *Sistrum* (アイシス禮拜の爲に用ふる一種の器) をつけるつもりであつたらしいが、遂に出來ずに了つたさうである。嘗て私は紐育市滞在中、同市山の手にある、Woodlawn Cemetery をみに行つた事があつたが、其うちのある金持の廟としてこれの寫しがあつた。そつくり其儘で、甚だしいのは開花柱頭上の四角なところ迄其まゝに残してあつたのだから、餘りにひどい全寫しに驚かされたのであつた。注文者の希望がそつくり其まゝといふので、かうしたのかも知れぬが、夫れにしても能がなさ過る。私の記憶違ひかも知らぬが、嘗て我國のある建築の専門雑誌の口繪か何かはこの寫真がのつてゐた様に思ふ。此れが建築家の仕事ならだらしがないが、石工の仕事なら褒めてやつてもよからう。併しこの島にあるほんものは古色がついてゐるから却々によろし



前庭よりアイシス堂の第一大門をみる

大門の下より五分の三位のところにある横線は毎年下流堰堤の水門をある期間閉すため水が汎濫して印したのである。

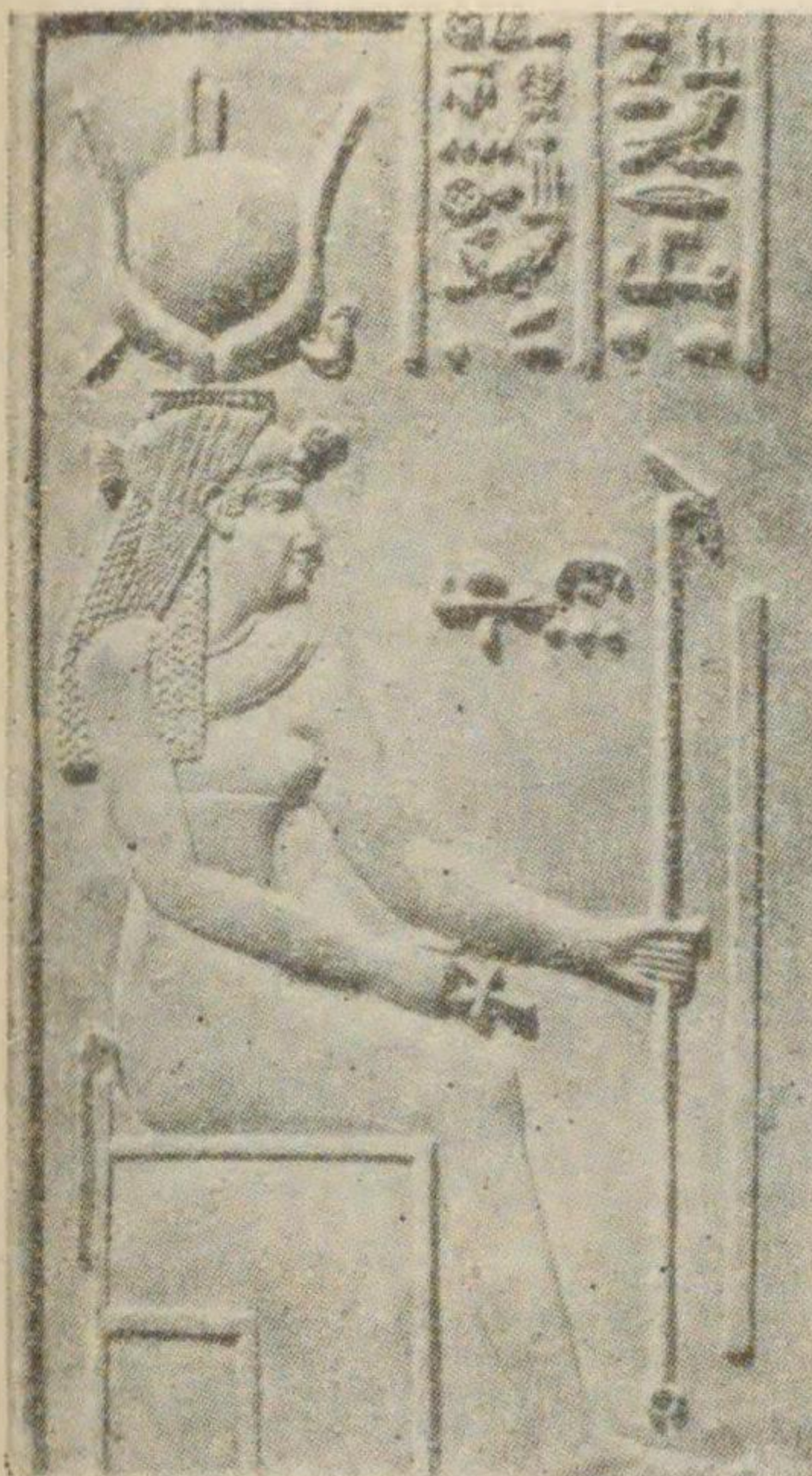
いが、建物としてはさう大して騒ぐ程のものではない。
柱身の上部柱頭に近いところに横線があつて、これから上と下とで石の色が異つてゐる、全體この建物は赤砂岩で出來てゐるのだから、全體が同じ色であるべきに、此線より上は赤くて下は黒い、圖の左方アイシス堂の大門の兩塔に於いて此線が特に著しいのが見えるであらう。何故にかゝる線があつて色が上下で異なるかといふと、大堰堤を築造して以來毎年永い間水を貯めておくので、其水が一杯になつた時は、漸く此涼亭と堂の第一及第二大門の兩塔と、及び島の東南隅の高地とが水上に出で、あとは全部水面下にもぐつて了ふ。だから建物のうち以上の三つ丈けが其途中に線があり、線から下は水の爲め色が黒くなつて了つたのである。



ホーラスに哺乳せる像(『古埃及人の文化』より複寫)



有翼の像(同左)



椅子に坐せるアイシス(『古埃及神話傳説集』より複寫)

此の涼亭から西南に進み Eri-Hems-Nufer 堂を廻つてアイシス堂の外庭へ出られる。其突き當りの少しく右手に此の堂の第一大門が見え、左右には列柱がある。第一大門の反対即ち南方にはネクタネボスの玄關があるが、これも大分にひどく破損してゐる。扱て左右の列柱の中、西側のもの總長約三百尺柱數現在三十一本、柱頭の意匠總て異り同一の者決して二つないが、併し此の如きは敢てこゝ許りではない、歐洲にある東羅馬やゴシック建築等の柱頭に於いても常にみる所であるし、また我國でも室町以降の建築に於ける木鼻側面の彫刻の如き、一つの建物に幾つあつても同じものは一つもなく、且つ両面にて彫刻の異なるのは間々あるのである。東側のものは

未完成で柱數十六本の内六本丈けが出来上り残りは柱頭等たゞ其概形を作れるのみだが、注意をしてみれば、未だの値うちがある。

私は次に第一大門の記載を初むる前に、祭神なる女神アイシスに就いて聊か駄筆を弄してみやうと思ふ。辭書を引いてみると、



山字村大字村共和郡更野縣長野(寫真より複寫) 其寺所藏の尊本堂神荒

此神は埃及神話中の主神で、オサイリスの妹兼妻、ホーラスの母、天神ヌート地神セツプの子で人類に美術と農業とを教へたる神云々とある。爰に圖示した三體の女神中、最左端の椅子に腰かけてゐるのは最も普通の形であるが、次の有翼の立像は兩翼の間自身の前に Osiris Un-

Nefet を立たしてゐるものもある。兎に角これは子供のホーラスを保護するの姿勢にあるのである。この二像及び次に記さうとしてゐる第三の像は、何れも同一の寶冠を頂いてゐる、寶冠は二又の牛

拜禮島 大石堰堤 窟墓 象島



健駄羅彫刻 鬼子母神立像二種
(印度 Lahor 博物館撮影の寫眞より複寫)

角及び其間に挟まれたる圓板(Solar disk)より成る。

第三即ち右端のは、赤ん坊の Horus を左手に抱き左の乳房を含ませやうとしてゐる坐像で、これは我國に於ける訶梨帝母即ち鬼子母神を思はせるものである。此種の坐像に抱かれたるホーラスは上體を直立せしめ、乳房を持てる母神の右手の手首を左手を以て握つてゐる彫刻もあるが、何れにしても頗る面白いものである。

山城醍醐寺に藏する絹本着色の鬼子母神は、坐像にして左の懷に赤子を入れ左の乳房を含ませ、右手に吉祥果即ち石榴の實の枝についた儘のを持ち、抱かれたる赤子も亦左手に同果をもつ、他に膝下に一童女あり、鎌倉時代に屬するものゝ如く甚だ傑作である。此の他に同寺に紙本の下繪もある。

り、鎌倉時代に屬するものゝ如く甚だ傑作である。此の他に同寺に紙本の下繪もある。

『佛像圖彙』所載のもの略此れと同一の姿勢をしてゐる。女神其物は姿勢態度總て上記のと同じであるが、一は『佛像新集』には二種の像をのせてゐる、女神其物は姿勢態度總て上記のと同じであるが、一は臺座及び前後方に八兒、他は三兒を描いてある。兩圖共女神は右手に吉祥果一個を持ち、抱かれたる兒は一は兩手を開きて將に合掌せんとするの状をなし、他は果に向て合掌せるところが描いてあるが、女神の面相は端正である。

東京雜司ヶ谷の鬼子母神は甚だ有名であるが、何といふ名の寺かよく知らぬ。こゝで販賣せる畫像は立姿で同じく左懷に赤子を抱き、右手には枝の石榴を持ち、其面相は口鬚あるが如く無きが如く、男性か女性か甚だ曖昧な難かしい顔をしてゐる、そして中央に『南無鬼子母神』、左右に『修行是經者、令得安穩』と印刷してある。併し畫像丈けみてゐたのでは、大して敬意も表しかぬる様である。

東京近郊のこれもまた頗る有名な中山の鬼子母神からだしてゐる畫像は、雜司ヶ谷のより大分に大型で、像の上方の中央に大きく『鬼形鬼子母神』其左右に『乃至夢中、亦復莫惱』とあり、像の向て右方に『中山御祈禱本尊宗祖大士御自作』とほりつけてある。其像は蓮葉を伏せたうへに、石榴の實の模様をついた衣服を著て、合掌してゐる立姿であるが、『鬼形』と銘を打つてゐる丈けあ

拜禮島 大石堰堤 窟墓 象島

つて、徹底的におそろしい面相であり、如何にも疫病を神格化したに相應しい顔であるが、こんな恐ろしい顔は私は大してすきでない。

次に彫刻では、近江大津の本長寺に、左手に例の末子のピンガラを抱き、右手に實が三つばかりなつてゐる石榴の枝をもつた立像がある。江戸時代の新しいもので、藝術的の價値は多くないやうであるが、氣のよささうな面相である。

信州上田の本陽寺にある鬼子母神は、これも同じく江戸時代のもので、高さ約一尺五寸、子供をすつかり自分の方を向けて抱いてゐた。この女神に並んで多聞天の様なのが同様にたつてゐるが、これは五道天王といふのださうで、女神の亭主ださうである。これは正に Kubera and Hariti を翻譯したものだと思へるが、坊さんはさうではないと否定してゐた。亭主の方はさうでもないが、細君の方は口がいやに大きくて、大してみよい顔でもなかつた。其上二人の前に、少し小さい高さ一尺ぐらゐの女の子が十人立つてゐた。これは十羅刹女ださうな。坊さんはこれ等は何れも鬼子母神の子だといつたが、ある學者はそんな事はあるものでない、と私に教へてくれた。何れにしても子供十人はどうでもいゝ、私には翻譯されたと思はるゝ二神の立像が大分氣に入つたのであつた。

同じく信州は更級郡共和村大字村山に荒神堂といふのがある。こゝには「子安荒神堂」とかいた提灯が澤山にぶら下つてゐた。この荒神さまは女の座像で國寶ださうで、子供を懷ろに入れて哺乳

し、右手に蓮花をもつてゐたが、其蓮花は大變に新しいものであつたから、私は坊さんに向つて、この像は元とは石榴の枝をもつてゐたのに、失つたので蓮花をもたせ、同時に立派な鬼子母神を飛んでもない荒神にしてしまつたのではないか、ときいたら言下に否定してしまつた。さうなると専門が違ふから、かう言はれると、左様で御座るかといつて退却するより仕方がなかつたが、兎も角も其荒神さまの肖像をこゝへ掲げておくことにした。

鬼子母神ではないが、長野の善光寺境内にある銅像の六地藏坐像のうちに、全くこの翻案と思はるゝのがある。即ち大きな地藏が小さな地藏を壞ろへ入れて抱いてゐるのである。

美濃坂本の五百羅漢のうちには、同じく地藏と思はるゝのが、子供をだいてゐるところがある、但しこの場合は子供を前を向けてゐるので、即ち膝へ腰をかけさせてゐる形である。高さ一尺五寸ばかりの小さい石像である。

もう一つ木版の畫像を紹介しておく。京都市の郊外嵯峨に化野(アダシノ)念佛寺といふのがある。こゝは先年市内から移轉した愛宕念佛寺の三町ばかり手前で、同じ念佛寺でも全く異なるのであるが、この寺に化野地藏尊(アダシノ)の木版がある。一尺ばかりの小ひさい極く新しい版木であるが、地藏の立てる蓮座の上に三人、左腕に一人、もつてゐる錫杖の柄にとりすがつて一人、合計五人の裸體の子供がある。地藏の高さが六寸位にかいてゐるのに、子供は八分乃至一寸位に極めて小

さく現してある。

以上何れも、中に就いて最後のは賽の河原の死んだ子供の保護者としての地藏尊を現はしたのであらうが、其姿勢態度、殊に最後のに五人の子供をかいてあるのは、後掲の敦煌の女神に八人（ピガラを入れ）の子供を添へてあるのは勿論、『佛像新集』にのせてある多數——といつても五百人の子供に比べれば、其内の一小部分ではあるが——の子供をそへたのなどによく似てゐる。果して然らば、この地藏は正にこの女神の翻案と云へよう。併しながら、今かいた様に賽の河原のとも考へられるから、この場合は二重の意味を現はしたとも思へよう。こんなことは考へやうによつてはどうともなる。想像は自由だから、こんなことを考へだすと止め度がなくなる。尙ほこの化野のは、友人石崎達二氏の厚意で其存在を知ることができたので、後日更に同氏はこれについて何等かの發表があるときいたが、私はたゞ私の駄法螺の材料に拜借したまでである。

次は印度の鬼子母神を考へてみる。印度といつてもこゝに圖示したのは健駄羅彫刻のである。左方のもの左手を腰にあて右手子供を抱き、他に二兒ありて何れも母神の兩肩に一人づゝ乗り、片手に圓いものを持つてゐる。他は左手掌に小兒を立たせ、此兒は母神の乳房を含み、他の二兒は母神の兩肩に腰をかけ、同じく何れも片手に圓きものを持つ、母神は右手を垂れ、略橢圓形の袋とも果實とも見ゆるものを下げてゐるが、生憎手首が缺けてゐて其持ち工合が判らぬ。併し或は總て此れ等

の持物が後の所謂吉祥果ではあるまいかと思ふ。

尙ほ私は此の他に同じく健駄羅彫刻で福の神なる Kubera と並んだ坐像の例を知つてゐる。此の場合に於いても像は同じく左手孩子を抱きて乳を含ませてゐるが、他に四兒ありて其二兒は肩に乗つて居り、二兒は足下に在りて何れも裸體である。

我國の鬼子母神は、私の知つてゐるのは先きに記した通りであり、印度のは健駄羅彫刻と印度教の彫刻一軀のみではあるが、大體其姿勢は同じで、何れも赤子を抱き哺乳してゐるのが主で、時としては其周圍に數兒が遊んでゐるところである。

耶蘇教に於ける好題目として古來澤山にゑがれ、そして今日尙好んで描かるゝのは *Madonna and Child* である。其姿勢には種々あるが、試みに其四五を挙げると、左手に抱かれたるものに、Murillo, Cano, Dürer 等あり、右手に抱かれ乳房を含み又は含まんとせる者に Andrea Solario, Vinci, Botticelli, Jean Fouquet 等あり。Dresden 繪畫館所藏の Murillo 筆聖母基督圖、安土府繪畫館所藏 Gerard David 筆の聖母基督と共に埃及に逃るゝの途に休息する圖等は、どうして *Isis and Horus* の翻案とほか考へられぬものである。以上はほんの一例に過ぎぬが、他に、各種類の圖を探したら恐らく無數に出て來るであらう。

安土府の同館に出陳せる *Luce Cranach* 筆 *Charity* と題せる圖は、中央に腰をかけたる女人の

他に三人の小兒を描けるが、長は左下に胡座し、中は背にとりつき、幼は右手に抱かれ膝にあり、母親は左手を持って哺乳せるの状を描けるが、何れも裸體にして、たゞ母親のみ胸部より腰にかけて輕羅を纏へるのみであるから、下と背との二兒を除けば Isis and Horus で、これを入れると



第一大門東翼塔の彫刻

Hariti になるのである。この群像の上には林檎の様な果實が枝から下がつてゐるが、兒の何れもが實をもつては居らぬ。併し聖母の抱ける幼き基督のうちには、片手に林檎又は葡萄等をもつてゐるものもある。これ等は前掲の健駄羅彫刻の持物、及び我國鬼子母神畫像の吉祥果を持てるに比して興味のあることである。

支那の寺や廟には、男兒を抱いた立姿又は椅子によれる女人の像が可なり澤山ある。これ等の像は「生子娘娘」(Hsiung-tzu-niang-niang) で、子なき人が願をかけると子供が生れるさうである。

この像もまたこの仲間である。又子供を抱いた觀音の像は、支那にも日本にもある、これは子育觀音といつてゐる。

此れ等の他、類似の書物や圖等を斟酌して、左の式を作つてみた。この結果は敢て私が發明したのではないが、誰人でもこゝへ落着くのは自然であらう。

Isis and Horus = Madonna and Child

= Hariti

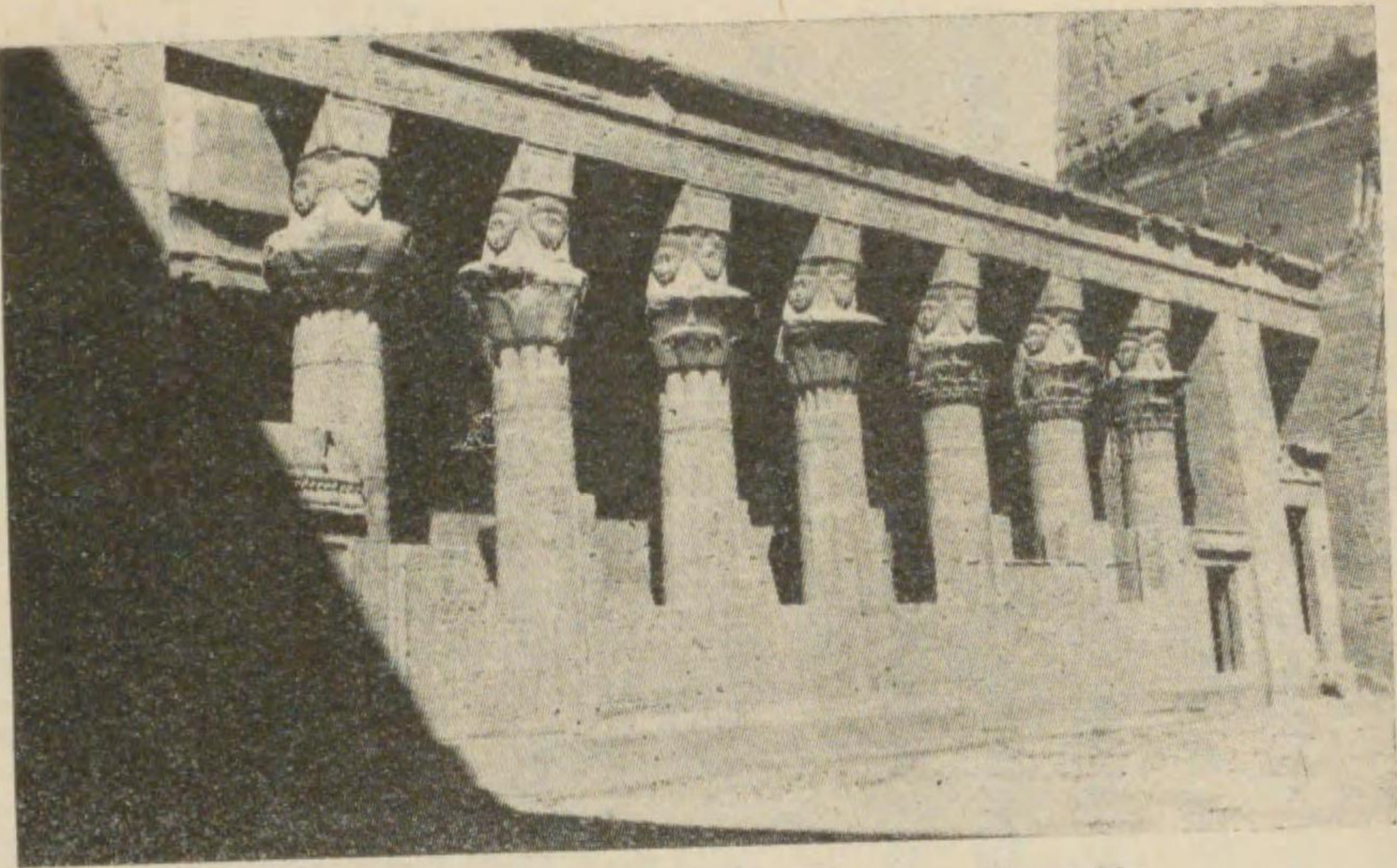
= 割梨帝母(鬼子母神)

= 生子娘娘

= 子育觀音

= まりあ觀音

即ち總本家は埃及、本家は猶太と印度、あとは支店であらう。さうなると Venus and Cupid なんか無論支店に入つて了ふのである。古埃及に死後の靈の一なる人頭鳥身の



第二中庭に面せる Birth House の複合柱

拜禮島 大石堰堤 窟墓 象島

Baが後に希臘に入りて Harpy となり、印度や瓜哇に於いては迦陵頻伽となりて現はれたと考へてもよからう。緊那羅も亦この親類といへやう。其他牛頭人身の Hathor や、Theseus に殺された同型の Minotaur や、印度に於ける同型の Buffalo demon 乃至西遊記に出て来る牛魔王等を参考にすると、以上の想像は強ちいゝ加減とばかりも言へぬ様である、といふ風な自分に都合のいゝ證據ばかりをあげておく。

A. Foucher の名著『佛教美術の起原』(The Beginnings of Buddhist Art) の終りに二十餘頁を費して "The Buddhist Madonna" の題をかゝげ、敦煌發掘の有名な鬼子母神畫像について記載し、引いて印度、瓜哇、支那、日本に於ける類似品を指摘し、其異同について詳論がしてあり。さうして遂に子供に哺乳してゐる埃及の女神にまで論及してゐる。

大正十三年九月中旬、東京神田の古本屋に "Legend of the Madonna" といふ本のある事を知り、直に手紙を出して購入しておいたが、入手したのは一昨年四月五日であつた。其總論の十九頁に

"..... "the Isis nursing Horus of the Egyptians, the Demeter and the Aphrodite of the Greeks, the Scythian Freya, have been considered by some writers as the type of a divine maternity, foreshadowing the Virgin mother of Christ."

とあり、其二十二頁にはホーラスに哺乳せるアイシスの座像が挿圖になつてゐる。してみると、遠く昔しに

こんな事を考へてゐた人達があつたのである。さうして私が右に記したことはまるで人の眞似をした様になつてしまつたのである。けれどもこれ等より、同じ様な事を考へてゐる人がなくもないので、大に心強いのであるといふことを附加しておく。(大正十四年十二月十四日追記)。

扱て元に戻つて昔しから、此島と此女神とは離るべからざる關係があるのである、で此の堂は島の女主人なるアイシスと其子 Harpoerates = Horus the Child の爲めに建てられたのであるが、今の建物は Ptolemy Philadelphus (285—247 B.C. 此れを創め、次の王 Energetes I. (247—222 B.C.) 主として完成したさうである。

此堂には大門が二つある。第一大門は幅一五〇尺高六〇尺、其面には例の如き彫刻が一面に施されてゐるが、圖には其一部なるアイシス立像及び江戸府のホーラスが現れてゐる。前者は例の如く兩角間に圓板を頂ける寶冠を、後者は鷹頭人身にして、頭に上下埃及の複合冠を戴ける模範的の形である。此れ等の上方面にも面白い神話の場面が小さく出してあるが、長くなり過ぎるから總て省略しておく。

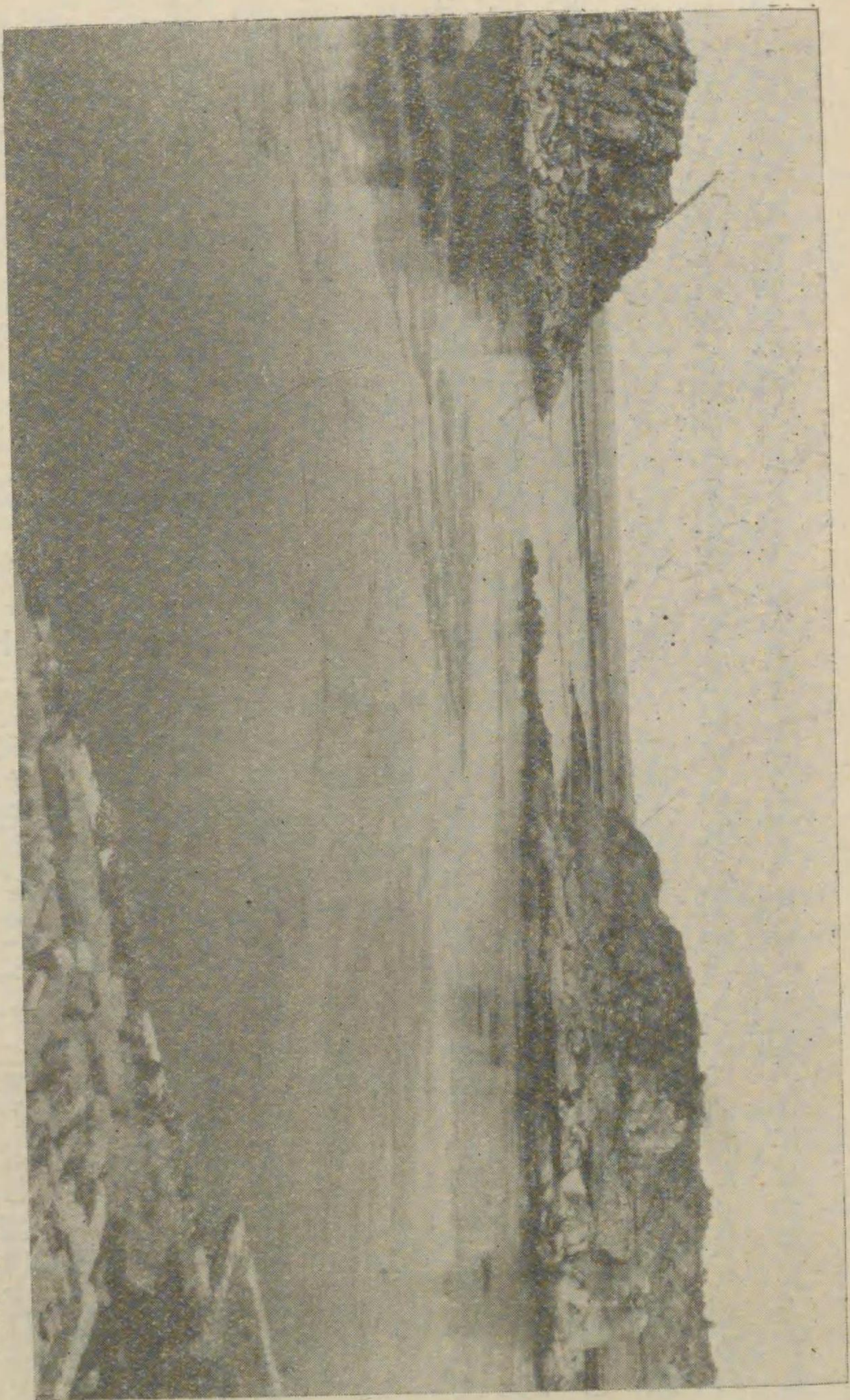
此の大門が一般のと少しく異なつてゐるところは、向て左側の塔基部に小さい入口が開いてゐることで、これを入れれば Birth House に達するのである、この建物は第一及び第二大門との間の中庭に面しても亦出入口を開いてゐるが、其柱は開花及びハソールの複合柱頭をもつてゐる。夫れと

もう一つは大門中央入口の両側に石獅子を据ゑてあることである。我國に於いて神社の鳥居両側に石獅子を置くのと同じ風習で甚だ愉快である。つい寫眞を撮らなかつたら圖示することが出来ぬ。尤も門の兩側に小さく寫眞に出てはゐるが、かう小さくしては獅子のある事すら判らぬのは惜しいことである。

第一大門を入れば中庭に出るが、こゝは前に第二大門あり、左右は列柱で限られた特殊の中庭である。即ち西側には前記 Birth house 側面の列柱がある、此建物は Hathor, Isis 及び其子 Horus の誕生を記念する爲めに捧げられたもので、同様に壁柱の類は何れも彫刻を以て裝飾されてゐる。此の反對即ち東側の建物は主として僧侶が居住したので、我國で言へば僧坊即ち東室である。

第二大門は幅一〇五尺高四〇尺、規模稍や第一大門に劣る、これも亦一面に彫刻を以て覆へるも總て省略しておく。そして此門を入るとこゝから後ろに最主要なる部分、即ちアイシス堂の本體があるのであるが、堂は規模比較的大ならず、小じんまりして甚だ工合がよい、こゝも亦裝飾他の例に同じである。

神殿の屋根へ上つて大觀をしたり、あつちこつちを歩いてみたり、事實猫額大の島であるが、まとまつてゐるからいつ迄ゐても飽きない。遂に島の西側なる Harendotes 堂址に腰を下ろし、ただ芒乎と下流遙に大石堰堤の方を眺めてゐたが、やがて案内人に促されて仕方なしに立上り、再び



アイシス堂の第二大門塔より下流石堰堤を望む。水平線上に横に帯の如く見えるのが堰堤である。

拜禮島 大石堰堤 窟墓 象島

先の小船にのり流を下り堰堤に近く上陸をした。

堰堤の水門は今全部あけてあるが、毎年十一月末から閉づるので水は漸く増し約四十日後に満水をする、そしたら三月の間は其まゝにしておくのださうな、だから翌年二月末迄は拜禮島は全部水面下に入り、建物では漸く所謂『涼亭』と大門兩側の塔の頭丈けが水上に出てゐる位である、水が大分に低くなつても尙自由に近づき其邊を視巡るのは困難である。併し私は幸に少し早かつたゝめに、堰堤築造前と同様の有様に於いて自由自在にみる事が出来たのは、全く來た時がよかつたゝめである。

* * * * *

内流川を横切りて築造せる明日庵の大石堰堤は、明治三十一年着手し同三十五年に落成したもので、世界に於ける最大なる石堰堤ださうである。私が土木工學を専攻してゐたのだと、専門的見地から何か有益な文字を列ねる事が出来たのであらうが、門外漢には情ないが何一つ判らずにしまつた。先月十七日サツカラ見物に行つた時、メレルカ墓の附近に於いて眞つ白になつた人類の頭蓋骨を拾つた時も、若し私が人類學か解剖學かを齧つてゐたら、何か少し位は曲りなりにも判るのだらうに、其方面の智識皆無の爲め手に取りながらどうする事も出来ず残念至極に思つたことがあつたが、今日も亦此の世界第一の大堰堤の上に立ちながら、下を覗いて水門から水が流れ出すところを

見たり、大瀧の有様や附近の景色を眺めたりした位で、薩張仕方がなく手も足も出なかつた。

私が此の堰堤の直ぐ上流で陸へ上ると、船頭及び同船してゐた小さい三人の子供はいきなり私に向ひ手を出して、異口同音に Bakshish! Bakshish! を繰返した、このバクシーシュは歐米人も餘程氣になるものと見え、彼等の著書にも土人や又は子供の集り等を寫眞に撮り、其下に Bakshish 又は Baksesh Boys 等と印刷したのがよく挿畫になつてゐる(勿論此の語の綴り方にはいろいろある)が、今日程うるさく大勢から強請られたのは初めてであつた。

元來バクシーシュなる言葉は『心附』とか『布施』とかいふ意味はないのださうで、字引には „Bakshish is not alms, which it would be humiliating to an Arab to receive. It is a present, a gift between princes.” とある位であるから、立派な言葉であつたのであるが、今はすつかり價值が下落してしまつたのである。此言葉は印度でも用ひてゐるが。埃及程ではないやうである。誰でも埃及見物に行けば坡西土か蘇西に船がつくと、直に一種の風俗をした船蟲の様な土人から、一番先きにこの言葉を聞かねばならぬ。

私は餘りにうるさいので知らん顔をして横を向いてゐたら、今度は案内人の袖を捕へてくれなければ離さぬ様に見えた。どうするか見てゐると、狂言か眞劍か知らぬが、相當に口角泡を飛ばし乍ら二言三言やり合つた末、遂にいくらかの金を與へて分れたが、あとでムスタファは私に向ひ、あ

の船頭は役にも立たぬ子供をのせて来て心附を一人に一志(五ピアスタアの銀貨を便宜シリングと)づゝくれといったから叱つてやつた。今は季節以外だからさう澤山やらぬでもないのだに不都合な男だ。といったから、然らばいくらやつたかと尋ねたが彼は返事をしなかつた。私も夫れ以上敢て追及せずにおいた。

以下少しく此の堰堤について案内記の受賣をしておかう。前記の如く明治三十五年に落成した結果は、下流に於ける約二十万四千町歩の不毛の地が新に一變して立派な耕地になつた、其爲め國富五十億圓を増加したさうである、堰堤は明日庵の古代石切場より採取せる花崗岩を以て築造され、延長約半里。當初は高一三〇尺下幅九八尺上幅二三尺であつたが、明治四十年より四十五年にかけ更に高一六尺五寸、上下幅此れに應ずる丈けを増築したので、結局莫大な水量を貯ふるに適する様になつたさうである。堰堤下部には上列に四〇下列に一四〇の水門を開いてゐる。毎年七月初旬内流河の水量増加を始むるや、全部の水門を開き其まゝ十一月下旬に及ぶ、此の間に殆んど總ての泥土は流下して了ふので、一つ一つ次第に水門を閉ぢる。かくして堰堤の上流に出来る臨時の湖水は漸く水量を増し翌年二月初に満水の状態となる。三月下旬より下流は著しく水量を減するので、先きと反對に一つ一つ水門を開き、次第に多量の水を流下せしむるのである。更に舟楫を通ずる爲めに西岸に沿ひて運河あり、水の落差七十五尺、四ヶ所に扉を設けて水量を調節してゐる。

堰堤の上には二條の軌道があつて、手押車が其上を轉がる様になつてゐる。手押車の上は二人づつ二列に腰をかけられる、そして黒ん坊が後ろから押して走るのである、これはうまい考へで人力車の様に車夫の背中がみえないでいゝ、これこそ眞の Trolley である。堰堤の所々には景色を觀賞する爲め小高いところが出来てゐて、石階數級を登りこゝに出られる様に設備がしてある、つまり此のトローリーで堰堤上を往復するのである。

言ふ迄もなく此の大石堰堤は内流河第一大瀧の所に築造したのである、だから此の上から下流をみると岩に激して水は白い泡を立て、流れてゐる。下流の景色は頗る大きい。堰堤のない時分は河岸から眺める丈けであつたらうに、今は河の中央から充分に景色の觀賞が出来る。

堰堤築造の効果は莫大な國富を増したが、お蔭で拜禮島の建物は水浸しになり壁面の彫刻等に施してあつた色彩はすっかり色が褪せて了つた。のみならず大分に傷んだのは惜しいことである。殖産工業の奨励と史蹟の保存とは常に一致せぬのは困つたものである。

堰堤上をトローリーへのつた儘戻つて來ると、そこへ今朝宿からシェラール村迄のつていつた驢馬が來て待つてゐた、夫れへのつて昔しの石切場だといふ所をみて歸宿した、噓か實か知らぬが大きな赤花崗岩 (Syenite) が露出してゐた。

宿へついたら一時であつた。晝食をして暫く休憩。午後二時半再び宿を出て、直ぐ前から小船にのり象島の北端をかすめて筋向ひ、即ち西側の小山の中腹にある往古の象島王公歴代の窟墓見物に出かけた。此小山は前號の寫真に宿屋の二階から見た寫真を出しておいた通り、頂上に Sheikh 墓の白いのがあつて絶好の目標になつてゐる、日中は勿論月夜でも白く見えてゐる事程左様に著しいのである。

此小山の中腹にある窟墓は明治十八年より十九年にかけて Lord Grenfell の發見にかゝるもので、何れも古帝國の終りより中帝國の初めにかけてのものださうな、だから丁度紅波山のと殆んど同時代である。此の山下に上陸すると、兩側に石段中央に石斜面のある可なり急峻な段がある。これを登り詰めると第三十一號墓の前に出る。石段間の石斜面は石棺を下から引張り上げる爲めのものださうであるが、夫れがそつくり其儘今日に存在してゐるのは珍らしいと言はねばならぬ。

私はこゝにある窟墓のうち第二五・二六・二一及び三六號の四つをみた。最初の二つは第六王朝、(ca. 2625—2475 B.C.) のが、次の二つは何れも第十一王朝 (2000—1783 B.C.) のであるが、就中第三六號は明日庵に於いて今日迄に發見せられたる最良なる墓であるといふ。此の墓は他のより少しく離れてゐる。山の中腹に沿ひ突角を廻つた所にある、入口には壁にて圍まれたる廣き前庭があり、前庭の突き當り即ち窟墓の入口に八本の角柱立ち並び、其外觀既に他の墓と異る、内部壁面

には何れも美なる彫刻あるが記載を見合しておく。此所より直に河岸に下りることが出来る。

此の墓の見學を了り、更にせめて山上シェーク墓のところ迄行つて廣く景色を觀賞し度かつたのであるが、登るには可なり努力を要すべく、且つ登つたところで、夫れ丈けの効果があるかどうか判らぬので見合せ、こゝから象島を俯瞰し内流を距て、明日庵市の全景を遠方にて満足しておいた。そして小舟に戻り象島を一周し、其南端へ一寸上陸し古代の町の廢墟を通り、Nilometre を裏からみ、Assuan Museum 前から再び舟にのつて歸つたら丁度五時であつた。

*

*

*

*

*

*

今日は朝から正味七時間半、随分澤山詰め込んだから際立つて物識になつたが、たゞ象島の民家を視察する時間がなくなつたのが惜しかつた。此の目的を達する爲め明朝五時十五分の一番をやめて、二番の十時五分にすれば朝の内に見られる。だからさう決めた。

今夜も月は昨夜と同じく風は一層涼しい、縮みの半袖の肌着と短い下ばきになり、寢臺を窓のそばへ引張つて行つて其上に寢轉んでゐると、さつき行つた丘も象島も内流河も皆寢ながら觀賞出来る。涼しくて蚊もゐず何ともいゝ氣持であつた。昨年一月錫蘭島を旅行して Anuradhapura へ行き同名の旅館へ泊つた時、偶然大雨到り夜に入つて晴れたので、夕食後椽側に腕椅子を持出し其上に納つて涼んでゐたら、前の森林の周圍を澤山の螢が飛び廻つてゐた。丁度あたりに人なく大變に

氣持がよかつたが、今になつてみると埃及では Assuân の夜、錫蘭では Anuradhapura の夜が最も忘れられぬのである。

(大正十三年九月三日稿了)

象島見物 開路市歸着

十一月二日

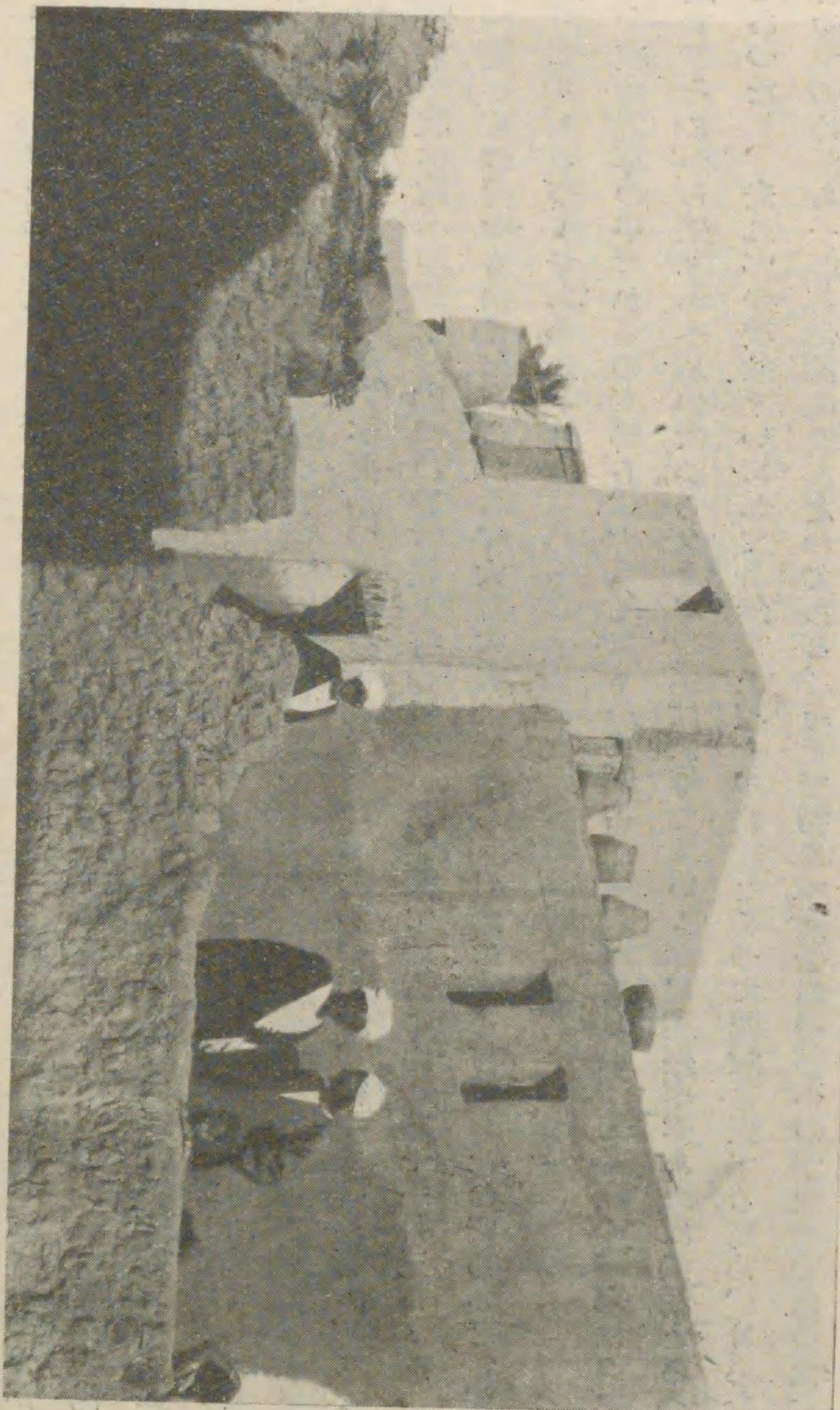
(木曜、好晴)

朝食後私は案内人に今から象島の民家を見に行く積りだと言つたら、彼は「喜んでお供致します」といひ、先に立つて往來へ飛び出し向ひ側へ渡る小舟を雇つた、そして私と一緒に島へ上陸した事はしたが、舟夫も一緒に上陸して而も一番先きに立つて歩いてゐる、何か質問するといつても舟夫に一度きいてから返事をする。彼は此島の部落に就いては何一つ知らぬのである。即ちこゝでも亦案内人に案内人が入用であつたのである。部落は其名を El-Ramla と呼び民家は大概泥土煉瓦を以て築き白堊を塗り、出入口の上等には色彩を以て幼稚な唐草等をかいてある。夫が北米の Pueblo Indian や、南米秘露邊から發掘さるゝ土器の模様と同じく、私には恐ろしく氣に入つたが併し唯夫れ丈けの事で、村としては他に何にもみるべきものは無い様である。記念としては此村の寫眞を二つ許り掲げておく。人の歩いゐてる方はたゞであつたが、子供を二人立たした方は一人前十錢づつやつたのである。案内記によると此島では Begging is common とある位だから仕方がない。

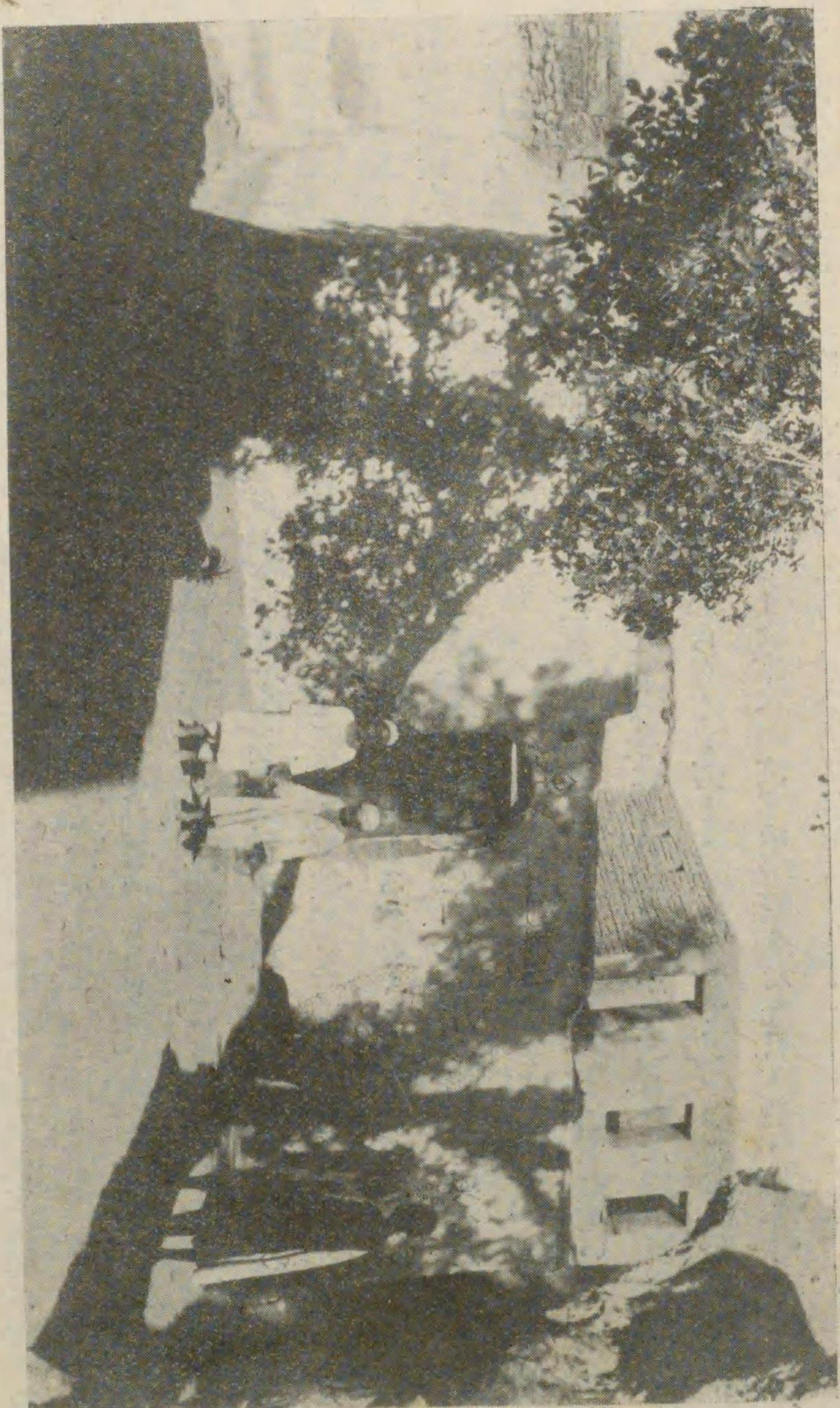
時間の關係上島の南端を漁つてゐるひまはないから、直に舟に戻り少しく河を溯つて、昨日裏からみておいた Nilometer を表からみた。日が一ぱいあつてゐるし寫眞には丁度よかつたが、惜しいことには種板全部をつかひ盡しもう一枚もないので我慢して了つたが、こゝには昨夕象島から寫した裏の寫眞を出しておかう。序ながら此水量計は約千年間すてゝ置いた後、明治三年に修繕したのださうで、時恰も Ismâil Pasha の時代であつたさうな。内流河の各所にある水量計の中で私のみたものでは一番立派であつた。

宿へ戻つてから馬車の都合が悪かつたので荷物は宿の男にかつがせ、徒歩で驛へ行き、こゝから開路市の牧羊館へ明朝七時歸着の旨電報を打つておいた。豫て旅行に出る時十一月三日に歸着の旨いひ残し且つ荷物も預けてあるから、大概大丈夫であらうが念のため打電したのである。電報料一語十ミリムづゝであつた。

今夜は汽車の中でねるのだから、どうしても一小間占領せねばならぬ、尤も此の汽車はラクソル迄で、そこから乗りかへるのだからラクソル迄は二等でもいいが、寢臺車があれば無論とるつもりであつたし、夫れが今夜はないにしても無事上埃及の旅行を了つて祝意を表する爲め、けちな眞似をせず初めから一等を奮發に及んだのである、そこで初めて熱帯の一等へのつたのであつた。客車は何人乗か知らぬが大分廣く二室に分れ、中央に手洗場がついてゐる、ところが其客車には



象島 El-Ramla 村の民家 其一



象島 El-Ramla 村の風景 其二

客は唯二人きり、私が一室にゐて手洗場を隔てた隣室に異人が一人ゐる丈けであつた。何にしる大きな場所に一人は都合がよろしい、薄い青紫色の窓硝子を全部閉ぢ切り扇風機を廻轉させておくと砂も大分に防げるし、色眼鏡もいらぬ。

頭の抑へ手がないのでいゝ氣になり、得意になつて納まつてゐると、發車して間もなく洋服を着た鐵道の従業員らしい男が來て馴々しく話しかける。また金が欲しいのだらうといゝ加減に相手になつてゐると、遂に彼は『先日もお國の方が見えまして、丁度私の勤務時間だったので出来る丈けお世話をしましたら大層喜んで居られました』とそろそろ催促を初め出した。金がほしいならやがこちらでも利用せねばならぬ。遂に彼は確かに車掌である事をムスタファからきいたので、晝食の爲め食堂車へ行つてゐる間私の荷物を氣をつけさせる事にして一片の銀貨を與へたら、器用な手付で隠しへ入れてしまつた。

假令窓を閉ぢてあるにせよ、十一月の二日に扇風機を廻し通してやつと暑氣を凌いだのは、此時が初めてであつたから珍らしく思つたが、これは後に南印度を寒中に旅行した時、夏服と扇風機と氷菓子とでやつと其日其日を送つた以後珍らしくも何ともなくなつて了つた。大正十年五月十三日北米のロス・アンゼルス市よりソートレック市への汽車中、我國だと氣の早い者は白地の單衣をきる様な時分に、終日蒸氣暖房で蒸されたには随分閉口したが、夫れと比べてみて甚だ面白かつた、

但しこんな時には緯度の相異なんて事を考へてはいけないこと勿論である。

食堂車から給仕が晝食をきゝに來たから早速申込んでおいた、そして時間に出かけたら客は唯二人きり、これは内地外國を問はず少ない方の親玉であつた。去る八月十日巴里から倫敦へ歸る時客の多い事を豫期し、發車前食堂車の座席券を給仕頭からとつておいたが、私が食堂車へ出て行つた時既に満員だつたのに、座席券を持つてゐたお蔭で給仕頭が無券の異人を立たせ私に席を作つてくれたので漸く食事でありつけたが、此れが多い方のレコードであつた、私はこの事を思ひ出して季節前の明日庵ラクソル間と巴里カレー間とは随分の差があると思つた、そしてたつた二人客に對し給仕の總數四人で彼等も用がなく如何にも手持無沙汰らしく見えた。

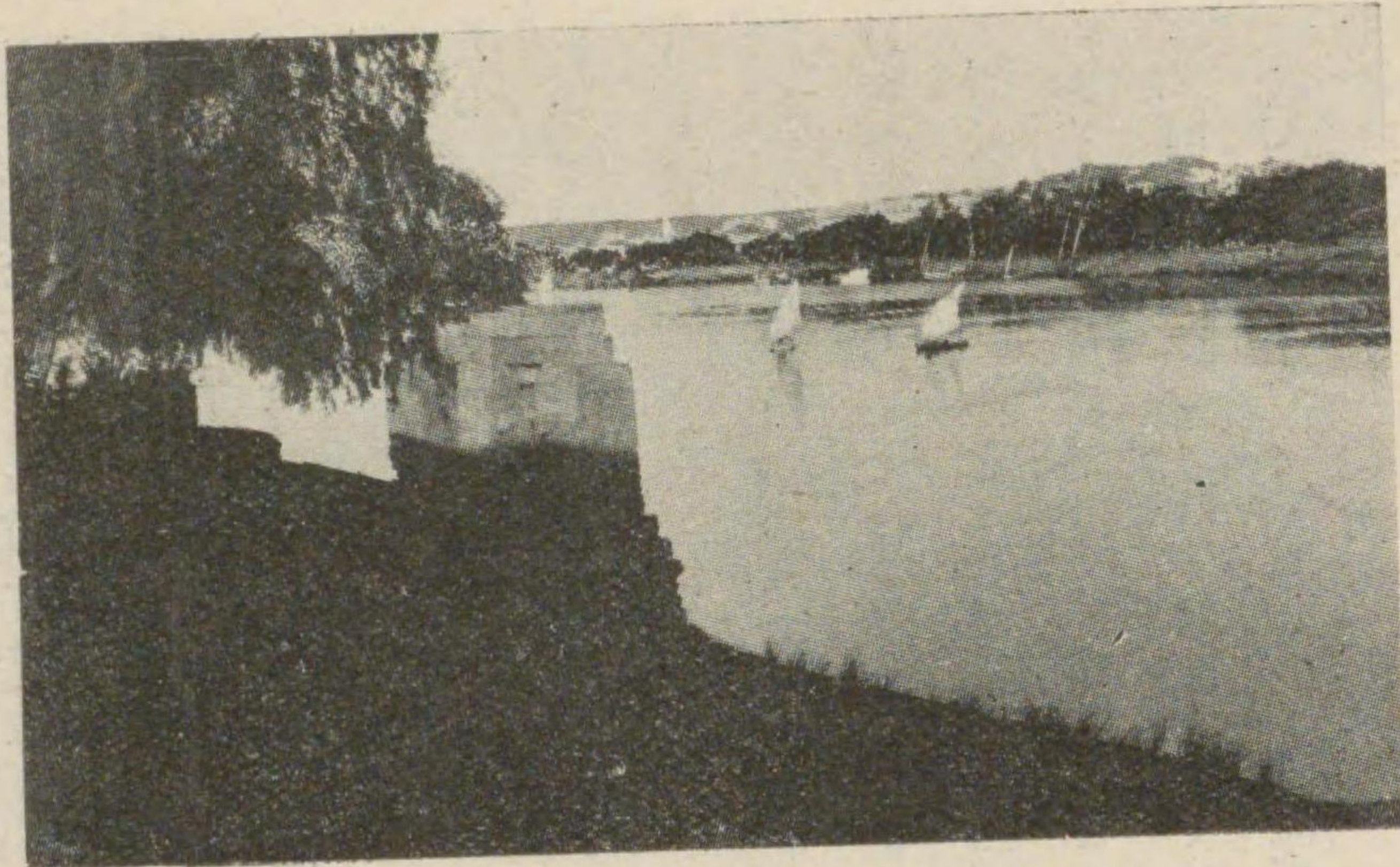
汽車が江戸風驛へついた時、先日贓物らしい銅貨を買への冷しラムネを飲めのとうるさく勧めた例の肥つた男が車内へ入つて來た、先日の銅貨は未だ賣れなかつたと見えて再び買へといふ、いらぬといつたら埃及へ來て一つ位古代の貨幣をもつて歸らぬと耻辱だといつた。うるさいから『おれは羅馬時代の銅貨なんかいらん、もつと古いのを持つてきたら買はぬでもない』といつてやつたら、持合せがないと見え銅貨は思ひ切り、また冷したラムネを抜いてもいゝかといふ、知らん顔をしてゐるうち汽車が出さうになつたので遂に諦めて下りていつて了つた。

午後四時半ラクソル驛着。歩廊にラクソル館の給仕頭がゐて宿へ來て休憩してはどうか、此所か

ら先は食堂車はつかぬから宿で夕食辨當を作らませうといふ。宿迄行くはいゝがまた例の辨當を作つた給仕や玄關にゐて靴の塵を拂ふ役の小僧等が金をねだるだらう、出發の時は用のない者共が集つてきてつき纏ふだらう、と思ふともう行く氣がせぬ。驛にも食堂はあるが折角だから給仕頭に辨當丈けこしらへて来る様に命じ、驛の食堂へ入つて紅茶をのみ、去る二十六日以来雇ひ入れて連れて歩いた Mustapha Kharil は金を拂つて去らしめ、此所から新に仕立た開路行上り列車の一客車のすみの小間を占領した。丁度そこへ辨當と炭酸水とをラクソル館から持参した。此時窓外に折から立つてゐた若い車掌を給仕頭は指し、私に向ひ今晚は誰もあなたの小間へ入つて來ぬ様この男が取計ひますといつたら、其男は私に一寸會釋をした。

金をやりなさい、さうさへすれば一夜樂にねられます。人に金を出さしておいて自分はいゝ顔が出来る、こつちも僅かな鼻藥で一夜安心が出来るので、やらなくても恐らく誰れも入つて來はしまいが、安心を買ふのだと思へば大して腹もたゝぬ。兎に角斯の如くにしてのべつに Extra があるのである。

次に記すのは印度での話であるが、十二月(大正十一年)の二十六日午後九時 Lucknow 發の夜行で Benares へ向つた折、其朝態々驛迄行つて豫約をしてをいた寢臺車へ入つたら、そこへ車掌が來て何か不都合はないかとか席の工合はどうかとかきく、知らぬふりをして何をいつてもたゞ『うん



象島南端に於ける水量計

うん』と返事をしてゐたら、遂に従僕の席をつくりませうかといつたが、夫れでも尙不通の様な顔をして、あの男はいつも自分で席をさがすから捨て、おけばいゝといつたら一時消えたが、暫くしてまた來て愈よ發車ですが御用はありませぬか、とふ。もうこれ丈けからかへば充分だから、別に用はないが出来るなら人口の扉へ鍵を下ろして貰ひ度い、私はベナレス迄行くのだが、今夜不要心だからといつたら、彼は一寸躊躇したが、よろしい閉ぢませう、客があらつたら、私があけに來ます、といつて鍵をかけたから四人の所を完全に一人で占領したのであつた。尤も今夜は殆んど客はなかつたが盜賊の心配がなくもなかつたので要心したのである。そこで其報酬としてルービー(當時約我六十五錢)の紙幣一枚與へたら喜んで去つて了つた。

翌大正十二年一月三十一日マドラスより孟買への寢臺車でこんなことがあつた。私は前日の朝海路古倫母より着、

直に忠竹林を發車今朝マドラス着と同時に寢臺を保留すべく係員に談判したら、残つてゐるのは上段ばかりと確かにいつた様に思つたが、延期も出来かねるので上段でもいゝからと豫約をし、夕刻乗車すると此はまた意外な事に下段で而も亦一人きりだから、大分喜んでゐたところへ土人の係員が一人入つて来て、寢臺は私が要意しました、今夜は誰もこゝへは入つて来ませぬ、といつて金の催促をする。實のところ上段と計り思ひ込んでゐたのに下段で而も一人なので、直に金をやる氣になりルーピーの札を例の如く與へたら、禮をいふと思ひの外『たつた一枚ですか』(Only one?)といつたのには開いた口が閉がらず、餘りに意外だつたので急には文句も出なかつたのであつた。

印度に於いては寢臺は無料である、たゞ晝間六人乗のところは夜は寢臺四つになる、二つが下段二つが上段、だから何れにしても早く席丈け決めておく必要がある。其豫約も無料である。夫れ丈けに係員が袖の下をとる事が公然(?)と行はれてゐるらしい。時には一寸握らせねば得られぬ事さへなくもない。金をほしがるのは無智な下級従業員だから仕方がないとしても、Only oneには呆れざるを得ぬ。埃及でも印度でもこんな點はよく似てゐる。之等は確かに亡國民根性であらう。

六時十分ラクソル驛發。もう暑くはないから砂が少し入る位がまんして窓を明け、暮れ行く景色と續て月夜の景色を觀賞しつつ、汽車が内流の鐵橋を渡り東岸より西岸に移ると同時に窓を閉ぢ就寢した。

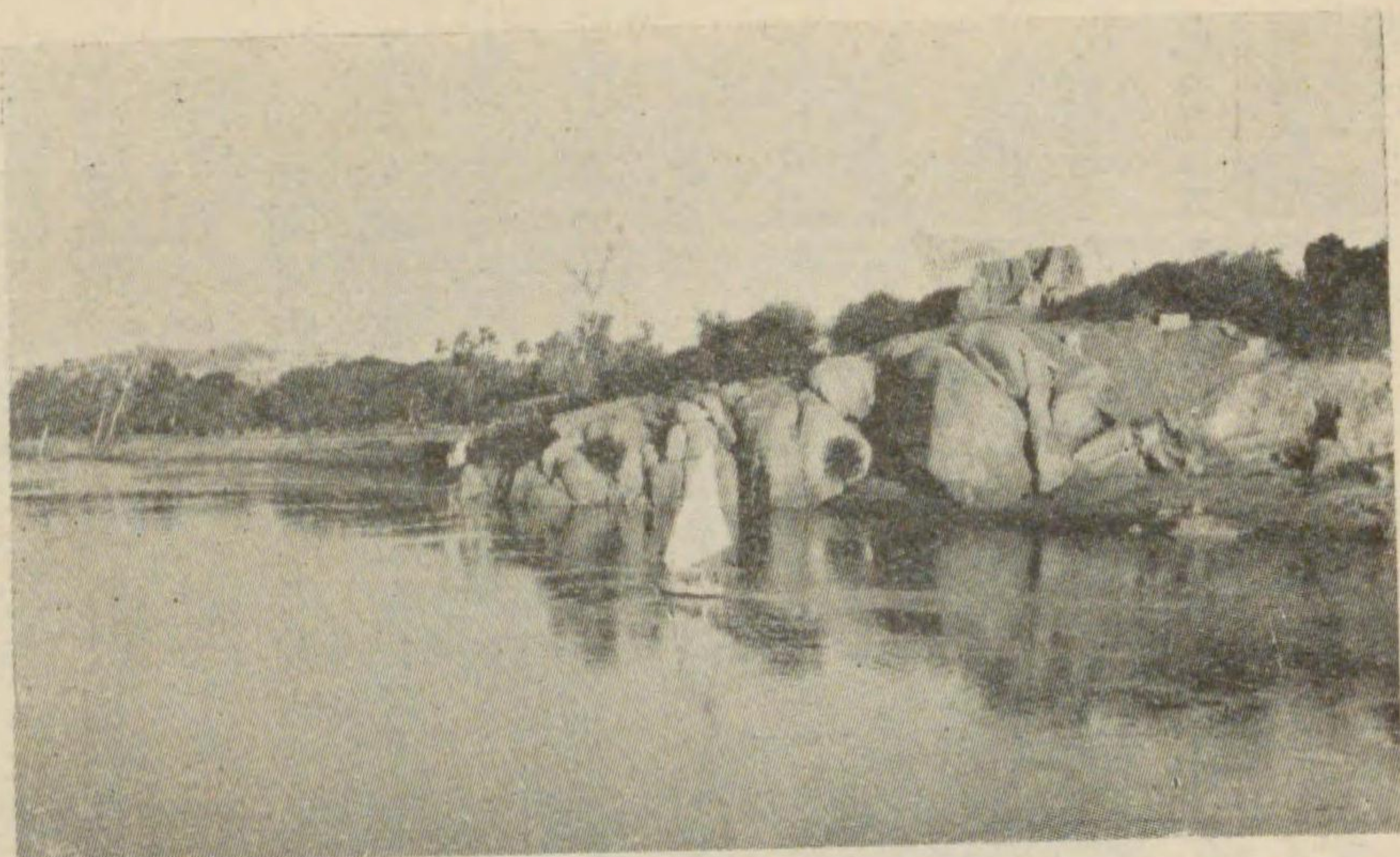
十一月三日

(金曜、霧、好晴)

硝子窓とガラリ戸とを閉ぢ上衣丈ぬいでねたのに、朝四時頃大變に寒くて目がさめた。當國着以來斯る寒氣は初めてであつた。のみならず窓をあげてみて驚いたのは濃霧の爲め線路の附近が薄ぼんやり見える計り、今迄の連日の好時は今朝全く一變したのである。併し私はもうすつかり目的を達したも同じだから曇つても降つても差支ない。七時豫定通り開路驛着、宿の Omnibus で牧羊館に入る。先達中は階下第十七號だつたが、今度は一つ隣りの第十六號。午前九時半約束通り Ahmed - alah が来た。彼と一緒に宿を出て出發前の約束通り、上埃及旅行中に寫した寫真全部を El-Manakh 通りの寫真師 A. Sarkissan 方へ現像せしむる爲め持つて行つた。

次に動物園へ行つた。上埃及旅行中ムスタファは開路の何とかいふ宿の庭に紙草 (Papyrus) があるが、サラが

象島見物 開路市歸着



象島より東岸を望む

よく知つてゐる筈であるといつた。少し變だが或はそんな事もあるかも知れぬと思ひ、サラールにきてみたら、彼曰く夫れは宿屋にはないが、動物園にはパイラスもロータスもあるといつた。そこで夫れでは動物園へ行つてみようと決め、彼を促して電車へのつた。

動物園は内流の西岸に沿ひギザにある。電車は門前で停るから大に便利である。入園して彼の導くまゝ急ぎ池の邊に出ると、水邊には我國の『ぎぼうしゆ』の様でもつと葉の大きな植物があり、水中には蓮と同じ様な葉が浮いてゐた。サラールは此等を指してパイラスだといつた。どつちがさうかときいたら兩方ともさうだといふ。餘り馬鹿氣てゐるので、時間が無駄になるから下らぬ事を言ふたと窘めたら、では別のロータスを見せるといつた。再びついて行くと今度は恰も夾竹桃の様な花盛りの木を指して確にロータスだといふ。かうなると居れば居る程馬鹿にされる様な氣がしてならぬ、知らなければ降参すればいゝのに何とかして胡魔化さうとする、すればする程駄目になる。

出口で動物園の平面圖を買つた、一枚は英語一枚は暴夜語で記入してある。これ丈けが動物園行の土産である。そして開路市へ引返し、も一度モハマッド・アリー寺へ行つた。大した寺でないのは分つてゐるが、先日は日の暮れ方にみたので天井等全然見えす、ただ東羅馬氣分を味はつた丈けであつたが、今日は明るいからゆつくり見よう、そして序に此所の高臺から市を俯瞰しようといふ考へであつた。

時間も大分たつたし且つ疲勞もしてゐるから午後は休養ときめ、前に二度許り晝食をしたことのある St. James 屋で食事をして散髪に行つた。晝食も散髪も宿屋で出来るが、成るべく安價にあげてフィルム代の捻出をせねばならぬからである。散髪料は大概いくら位かとサラールにきいたら、



Mohammed Ali 寺中庭に於ける
沐浴用噴水

自分達は二十錢だが外國人は五十錢とるだらうといつた。散髪屋もサラールのゆく家をきいておいてそこへ行つてみた。私は髪はいつでもバリカンで刈る毬栗頭だから、物價の高い米國で七十仙英國では一志四片にきまつてゐた、だから開路位と高を括つてゐたのに、たつた五分間で

坊主にしておいて八十ミリムとつた。何によらず外國人とみると高いのだからいやになる。

夕食後十四日目で入浴をした。先月二十日に此宿で入つたきり旅行中は一度も入らず、いつも夕食後部屋で水で拭いておいた丈けだ、其邊は暑いところだから至極便利である。昨夜充分ねてゐぬ

せいと、一つは開路迄歸つて来て安心したのも手傳ひ、ねむくて仕方がないから九時半に床へ入つた、おそろしくいゝ氣持であつた。

(大正十三年九月四日稿了)

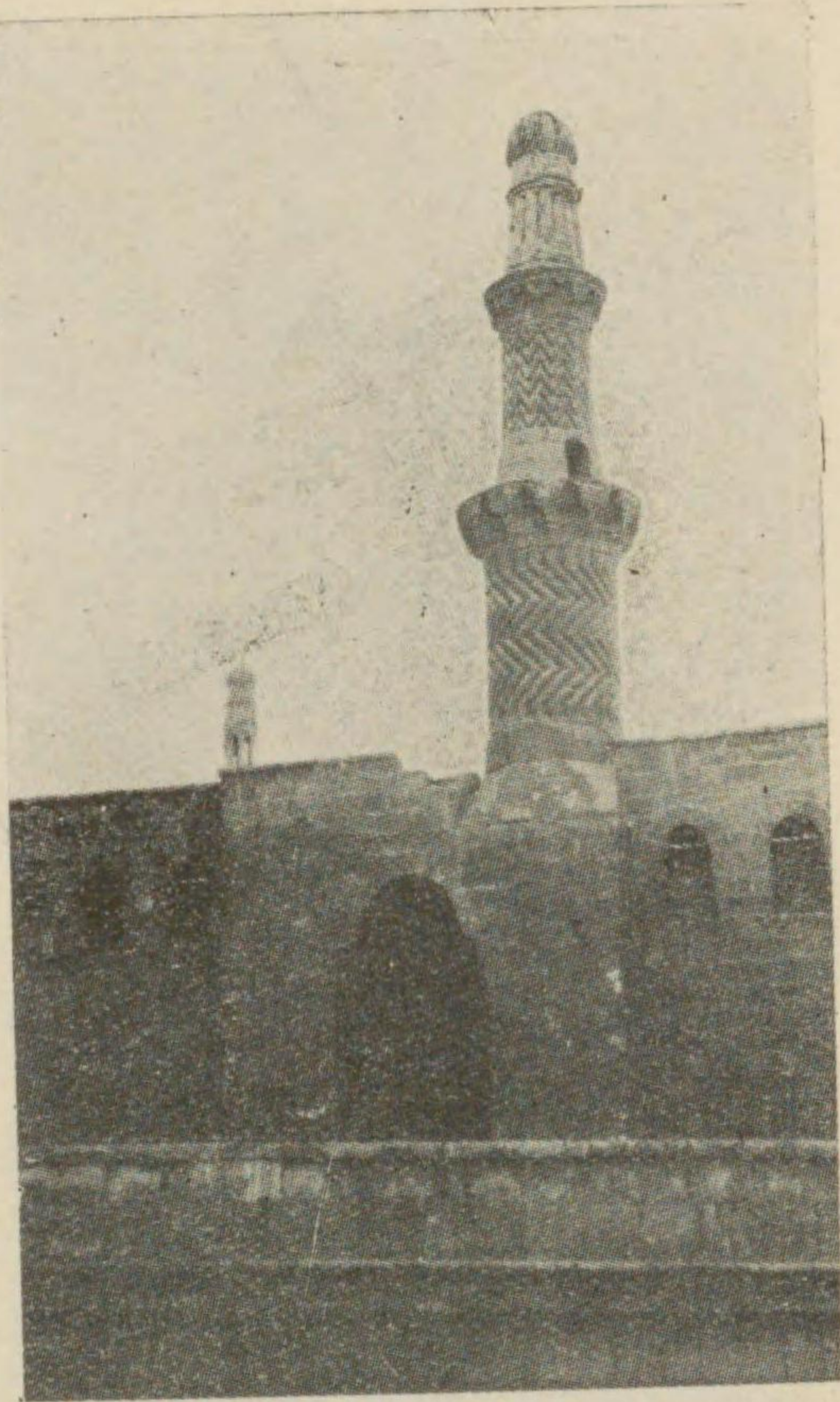
回教寺院と博物館

十一月四日 (土曜、好晴)

今度三度目で En Nasr 寺へ行つてみたが、今日番人が居ぬとて入る事が出来なかつた。寺は本名 En Nasser Ibn Galatin といふ。外部は頗る簡単な平壁で何の裝飾もなく、たゞ上の方に小窓が行列せると、二基の光塔の上部に手の込んだ彫刻がある丈けだが “..... but the interior is beautiful.” とあり、本の挿繪でみると、中庭の上部隅穹の所の持送が例の鐘乳式で、階下の大穹窿と上部との間の横帯に暴夜文字か何かか浮彫になつてゐるのは、何れ回々教經典の中から引ずり出した有難い文句か何かであらう。上部の圓屋根は大永元年に落ちて了つたさうで、今は青天井だから見物には至極都合がいゝが、如何せん入口があかぬので何とも致し方がなかつた。

光塔の頂き即ち大擬寶珠、即ち密柑屋根は、綺麗な波斯式 Faience 焼の瓦で化粧がしてあるから、青空に直立し其一部に日光を反射して光つてゐる所は實に美しい、今でさへあれだから、若し當初の儘であつたら尙一層であつたらう。寺は永い間武器庫及び貯藏庫として使用されたため、内

部は随分荒れはてゝゐるのだらう、だからことによつたら本で讀んで内部の美に憧れてゐた方がいいかも知れぬ。我國に於いても法隆寺の東室や西室の如き、僅に聖靈院と三經院との部分を除き、あと全部物置になつてゐるやうなものと思へば大差あるまい、あれ等も見ぬ方がいゝ位である。聖



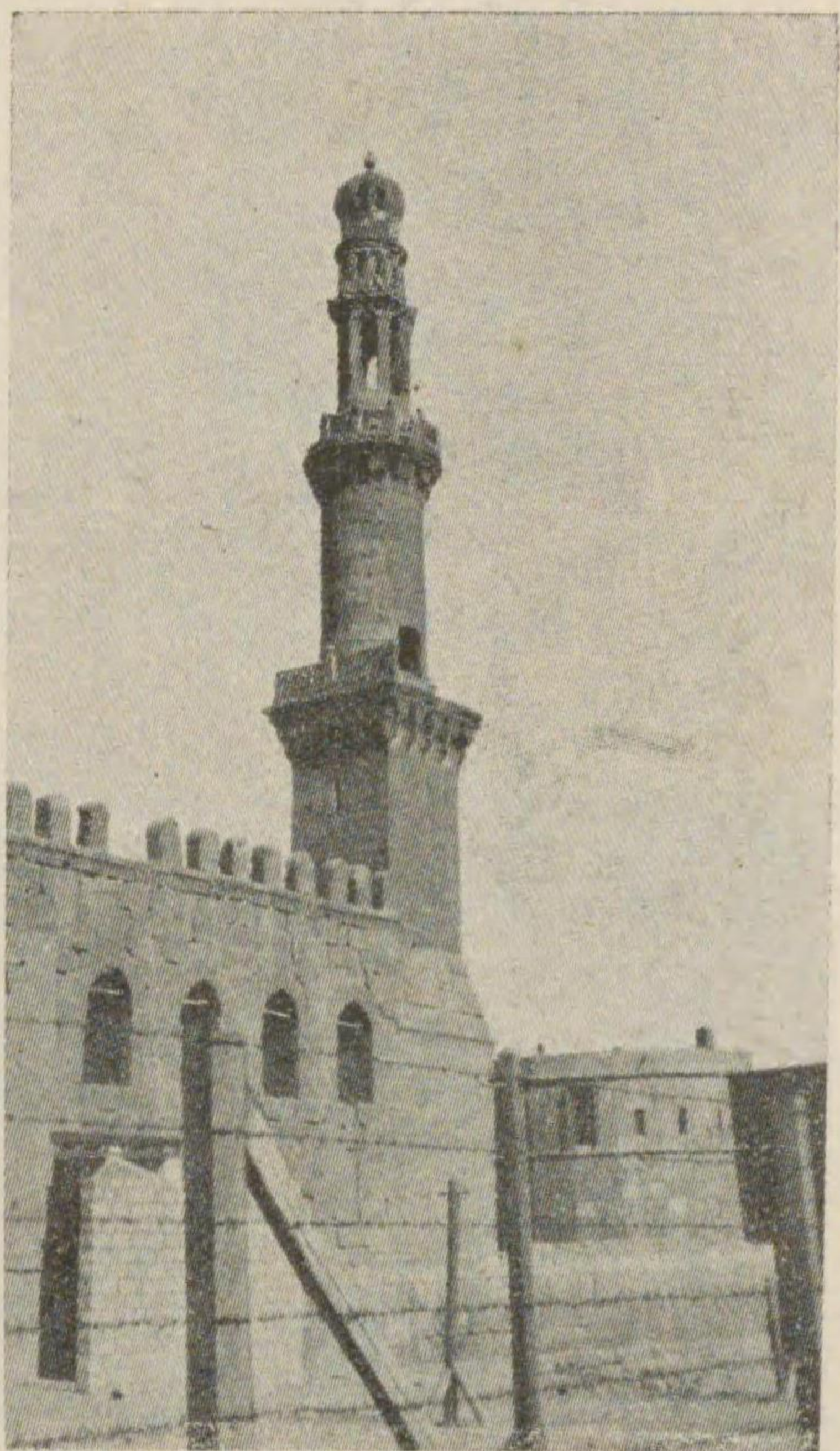
エン・ナスール寺の光塔(其一)

靈院の方はいゝが、三經院ですら夏安居の時を除いては殆んど締切で、遠慮のないところ塵埃堆く大分に慘憺たる光景を呈してゐる。要するに日本でも外國でも、貧乏な世帯を張つてゐる國の古寺は本の挿繪でみておくに限るやうである。そして其上に “It is in a dilapidated condition” とあるから

には、愈以てみぬ方がよささうである。

近畿地方のいろは加留多に『佛の顔も三度』といふのがあるさうだ。三度来て三度フイになるとこつちは勿論凡夫なのだから、何ぼ何でもいやになる。こんな壞れかゝつた古寺一つ位見えなくつ

ても飯を食ふには困らぬ、もう頼んで来て見ても見てもかといふ様な氣も出て来る。私はそこで案内人のサラーに此の寺は思ひ切つても一度ハサン寺へ行つて先日の復習をするといつて、其方へ歩き出したら、彼は序だからジョセフ井戸を見て行き給へ、随分深い井戸で今でも水があるといつた。如何にして昔しこの高い城寨へ給水したかとは豫て考へてゐたが、成程この井戸からであつたのだ、案内記に其事はちゃんと書いてあつたが、つい見ずにゐたのである。



エン・ナスール寺の光塔(其二)

憶してゐる、さうすると所謂ジョセフ井戸に出た。井桁は四角で周圍に階段がついてゐて下りられる様になつてゐる。深サ二九〇尺。地面より一五五尺下に平場があつて、そこにサキエ Sakieh (埃及に於いて牛を使つて水を高所に汲上げる簡単な機械仕掛を云) が仕掛てあつて水を汲上げたのださうな、だが今は水道が出来てゐるから最早かゝる舊式な方法は不必要になつた事は言ふ迄もないのである。昔聖畫の中に出て来るジョセフが此井戸へ投り込まれたといふ傳説から今でもジョセフ井と稱するのださうである。番人は石を投り込んで其如何に深いかを見物人に知らしめ、幾分かの心附に有附くといふ筋書通り實行してみせる。



つ其はも我せび少難で
作、或には呼らし語
で、或は思をた度土
皮歩、きし思をた度土
のりのぶとを男つ。を
羊賣る運何樽こ錢ねこ
山てゐる形胡で十担のふ
男。れて家其沫中、を男
み入しみ。「途り々汲とい
み水を汲ある。と駄水
汲水完をある。と駄水
水へが水でにある。と駄水
の中道での院で寫いあ
路袋せ同ゆ正もめい男
開たく共用がるとない

扱てソルタ
ン・ハサン寺
へ行つたとこ
ろ、此前の時
番人の老爺に
鼻薬をやつて
寫眞を撮つた
のを坊主がみ

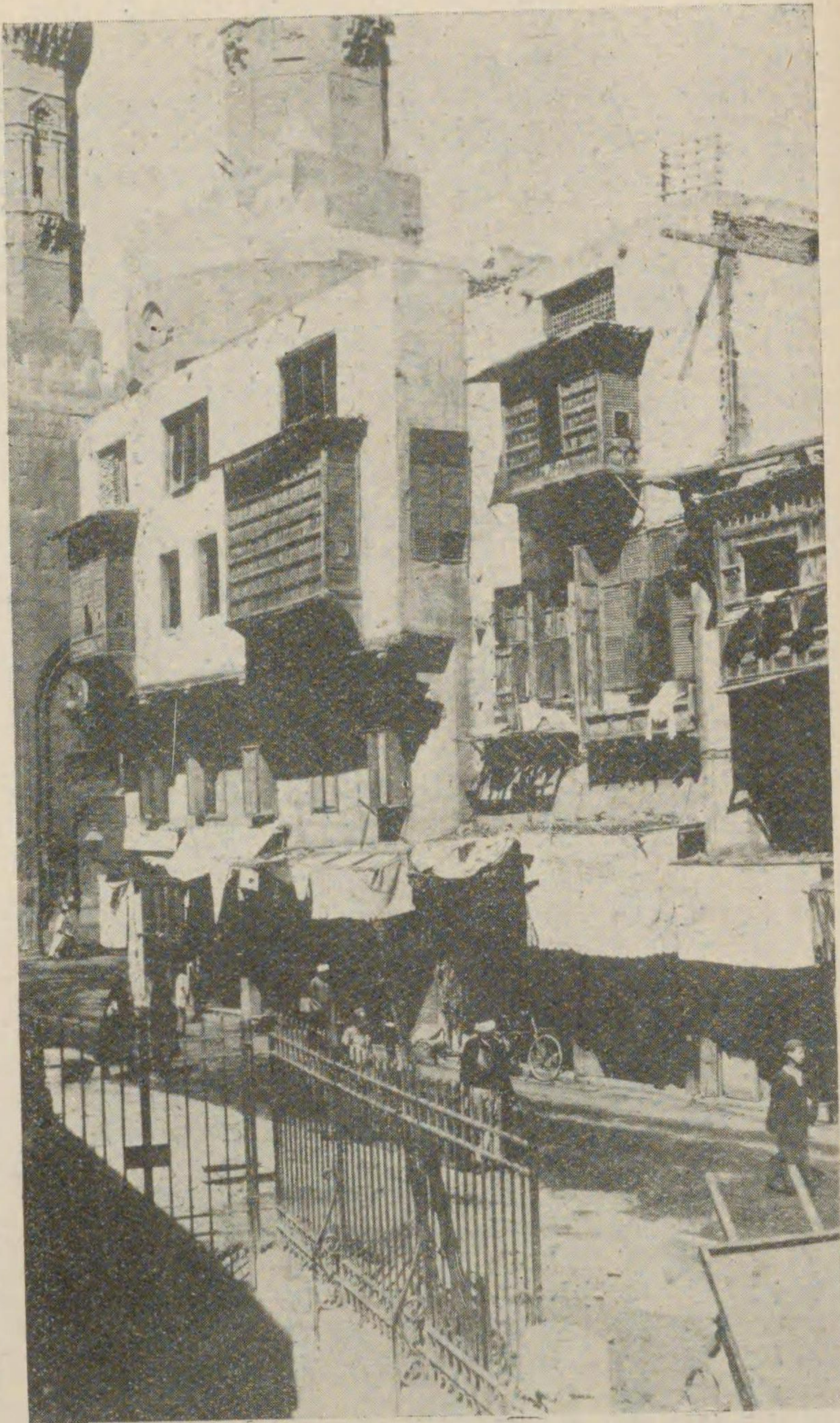
てゐたとかで少し問題を起したらしく、今日は撮影は罷りならぬとあつて寫眞機は入口で老爺に取り上げられて了つた。實のところ先日撮つた寫眞が面白くないので、やり直しのつもりで大枚四十二錢を奮發して入つたのだが、これちや仕方がない、けれども出来る丈け頭の中へ詰め込んで扱て出

去る十月二十二日初めて此の寺へ来た時と同じ様に、サラはイブン・ツルーン寺より男を一人連れ出した、そしてカイト・ベイ寺へ行つたが相不變番人は居らぬ。十分餘りまつたところ漸くにして二人はどこかゝら番人を連れて来た。番人なら一人ではさうなものだのに三人も来た。多分大勢で来て成るべく餘計金がほしいのだらう。けれども此の場合はさう考へないで、番人二人では開扉は出来ぬ、信徒總代二人以上立會の上つてな事になつてゐるのだらうとしておかう。

私は案内人を介して、先日は全く無駄足をしてつたのに今日もこの有様はどうしたものか、何故に番人は常に居らぬのか、と訊いてみたら、嘘か實か其答に「去年以來今迄に誰一人見物人は来なかつたから、誰も見に来る人はないと決めて留守にしてゐたのだ」とあつた。果してさうなら二度も来たのを餘程變に思つたらう、ことによると日本人で近來此寺へ来たものは一人も無いのかも知れぬ。

此の寺の創立は文明七年で近年 Herz-Pasha 此れを修理したのである。平面十字形をなし、隨所よく第二マメリューク王朝(弘和二年より永正十四年迄)時代の様式を現はしてゐるので有名である。加ふるに其光塔は開路市に於ける最も優雅なるものゝ一で、其他説教壇の木彫、床の篋入細工、壁面の裝飾等何れも注目に値するのであるが、ただ圓屋根丈は近世の補修である。

午後は博物館へ行つた、何度觀ても觀切れぬ、金の心配さへなくば牧羊館へ一ヶ月位滞在して毎



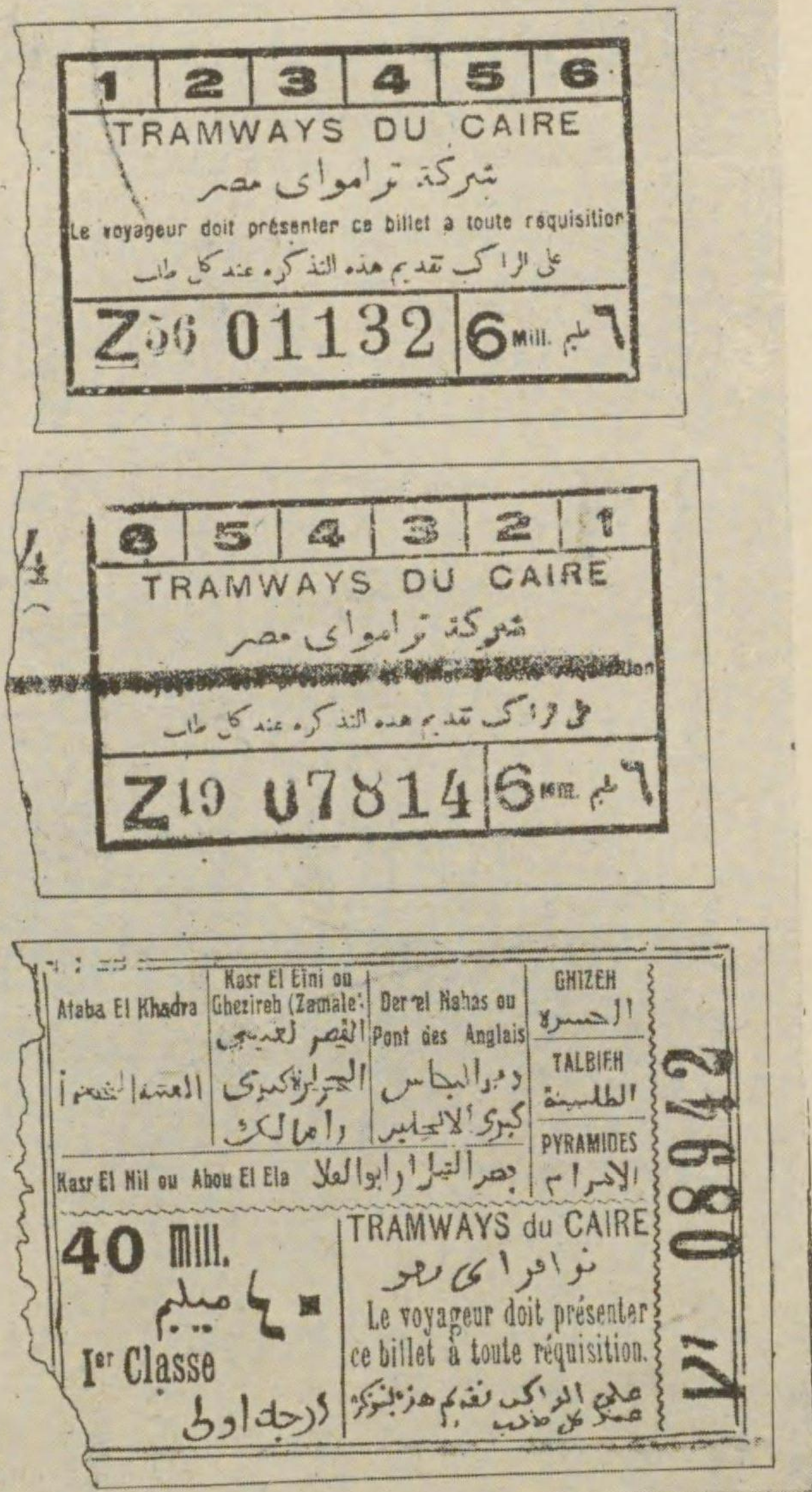
開路市エル・ムアイアッド寺附近の光景。民家の出窓はいづれもかゝる構造で、内から外は見えるが、外から決して窺ふ事は出来ぬ。

日観度い位である。一體英語の Museum を『博物館』とは誰が譯したのか、此頃では字引に『陳列館』ともあるからいゝが、私共が英語の稽古をした時分には博物館と教はつた。博物館丈では不

都合である。奈良の Museum には佛像許り並べてあるので、あれは『博佛館』だと誰かが言つたが、若し陳列館と譯しておけばこんな悪口は出ぬ筈である。開路市の等も『發掘品陳列館』と譯すのが最も適當であらう。兎に角この Museum は美しいもの、随一である。

生活に少しく餘裕のある人は誰れでも彫刻や繪畫を蒐める。一つ得ると二つほしくなる。眞物許りもつてゐる人は少なく眞偽半々位が多い様で、念入のになると殆んど偽物許りといつてもいいがある様である。建築丈けは大分にかさ高いので一寸蒐めかねる。これはうんと金がなければ出来ぬ。上、下、中、の上位の手合は石燈籠か石層塔位で満足せねばならぬ。手を廻して古建築を買収し、自宅の庭園に建て、おく等は上、上、がする仕事である。敢て我國許りではない、古今東西にわたり廣くさうであるのである。

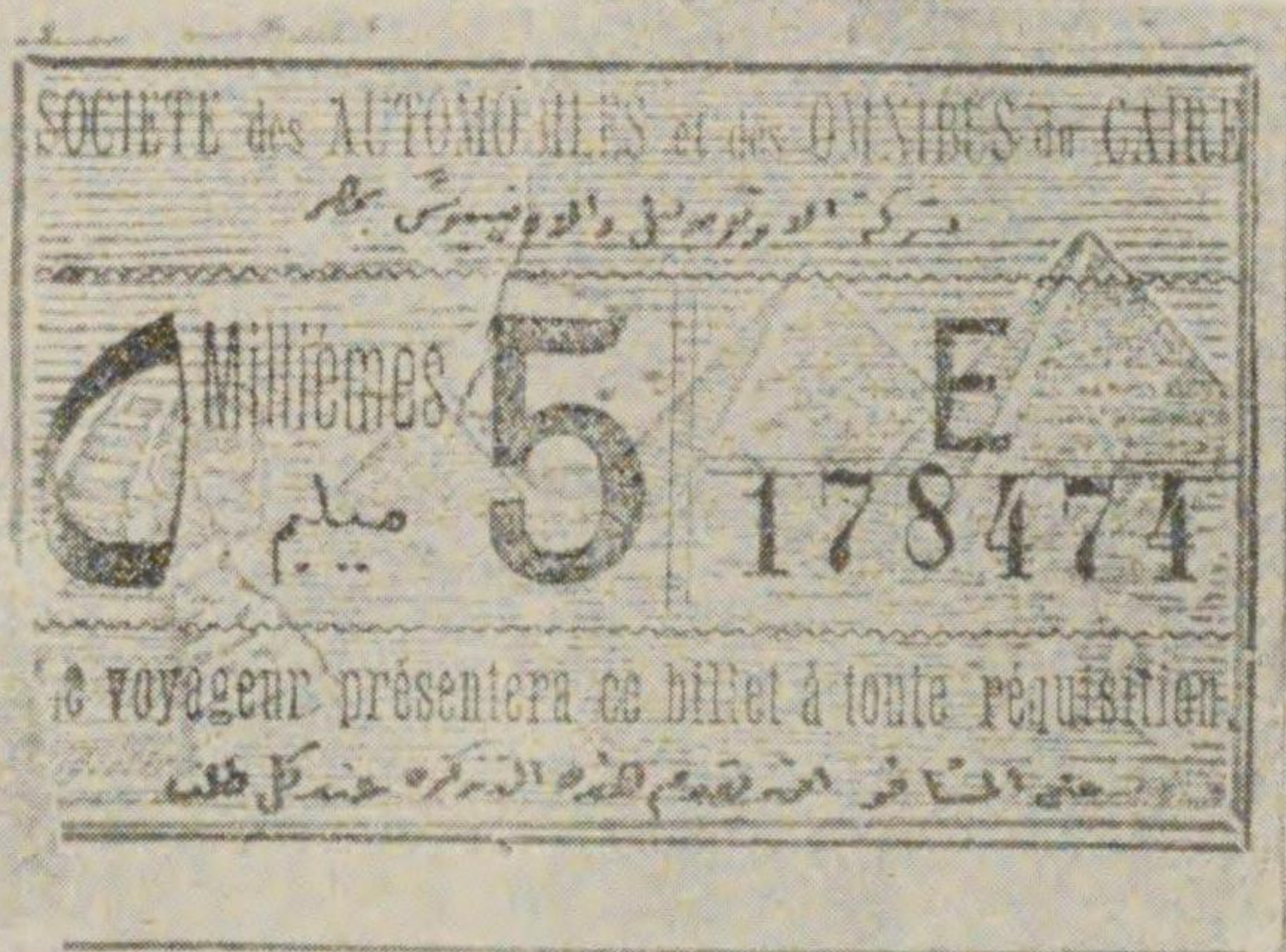
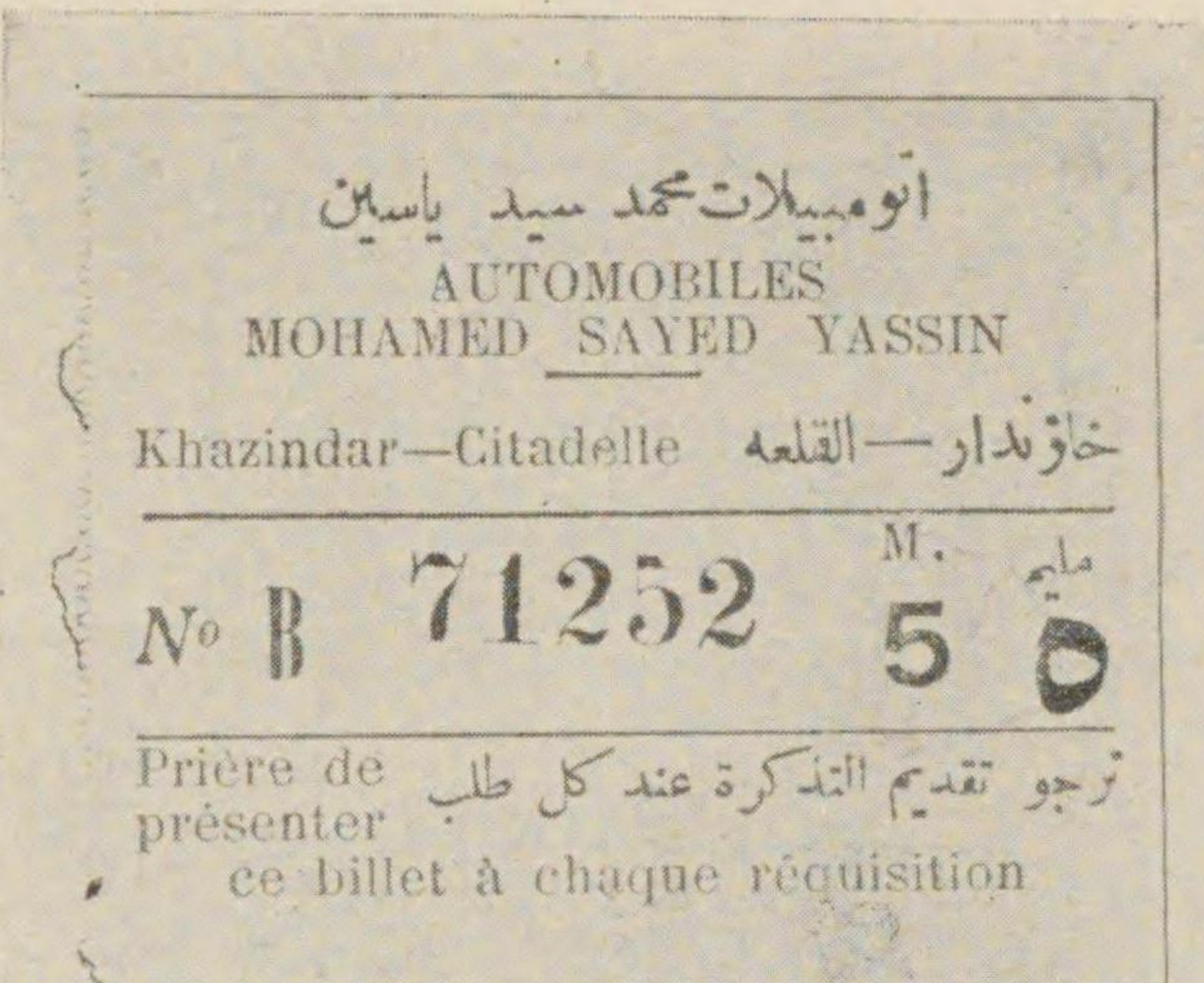
私は斯の點に就ては、とうの昔から大悟徹底(?)して、或は寧ろさせられてゐるので、手頃の佛像にせよ繪畫にせよ別段ほしいとも思はぬが、凡そ世の中の古物蒐集家の中で、小さいのならまだいゝが、大きな曲玉をもつてゐる人の氣程知れぬのはない。今時角髪みづひに結び筒袖に靴を履き、頸ツ王へぶら下げて歩いていたら狂人だといふだらうし、去りとして懷中時計の飾物には大きすぎて間が抜けてゐて、そして一つが百金千金ならまだしも、時としては萬金に値する様なのをたゞ收藏してゐるのは、本人は多少の快感を感じるかも知らぬが、局外者から考へてみると愚の骨張である。夫れに比べると佛像や繪畫は床の間の置物にしたり掛けて樂んだりする事が出来るから、餘裕のある人が道樂半分にやるのは敢て大して不都合でもない。



開路市電車切符三種。上中は市内、下はギザ行、何れも一等切符。市内のは六ミリ均一、ギザは四十ミリ均一、即ち四ピアスタア。

私は大悟徹底させられた結果、世界中の陳列館の列品は皆自分のものだが、自分の家が狭いため置き所がないからと、一つは廣く研究者の便宜を圖り、世界各国へ夫れ夫れ預けておき、其報酬を同教寺院と博物館

賞ふ代りに其全部を以て保護して貰つてゐるのだと思つてゐる。此意味に於いて法隆寺でも招提寺でも埃及の Monument でも British Museum でも皆自分のものだと思つてゐる。誇大妄想狂に



開路市乗合自動車切符二種

大きく寫した女神 Hathor の顔が堂の廻廊の柱とダブつてゐた。先日サツカラに於けるメレルカ墓内同人の立像をダブらしたのと此れとが當國に於ける失敗の双絶であつた。

擧つたのではない、頭は確かである。洵にうまい考へだと思つてゐるが、同感の士はないか知らん。歸りに寫眞屋へよつて上埃及旅行中の寫眞の現像の出來たのを見たら、殆んど全部上出來だつたが、たゞ北僧庵堂で

今夜は泊り客が多く、十月十四日に私が此宿へ泊つた以來——上埃及旅行中は知らぬ——の千客萬來で、大きな食堂は殆んど一ぱいの人で埋つてゐた。夕食は八時からとあるから唯さへ晚い。其理由は何れも遊覽客が午後自動車でそこいらを駈け巡り、五時頃に歸つて來て『おやつ』を食べて茶をのむ。だから八時位が丁度頃合ひである。けれどもこつちは日が暮れる迄そとにゐて、歩いて歸るか、又は電車の中に壽司詰めになつて歸つて來るのだから、八時迄の辛棒は大分にゑらい、去りとして茶をのむと夕食に差支へるし、どうも工合が悪い。だから夕食合圖の銅羅の鳴るのを待かねてイの一番に出かけて行くが、多くの客の中には私が退去する時分即ち九時頃から漸く出て來るのがある。男の服装は判で押した様に定つてゐるが、女のは思ひ／＼に黄・紅・緑或は純白の絹布を纏ひ、羅綾の袂を翻し度くとも袖無し筒ツボだからこれ計りは出來ぬが、原始時代の服装か何かでこれみよがしに宿六を隨へて出て來る。宿六のないのはたつた一人淋しさうに出て來る。牧羊館の廣告に 'Weekly dances and daily concerts' とあるから、其日には屹度あのなりで跳るのだから。まことに早や立派な服装で、我國の裏店の夫人連の夏服たる湯もじ一つに手拭を肩にかけたあの形を積分するとあれになる。あの連中の歡喜天踊は、丁度我が田舎紳士夫人又は令息令嬢の盆踊に匹敵するので、彼等の服装といひ踊といひ、頗る原始的で、いふ迄もなく性的である。盆踊を野蠻だとか士君子の見るべきものでないとかいひながら、一方歡天喜踊を稽古したり眞似をしたりす

るのは理窟に合はぬ、宜しくあんな剝出しの露骨式原始的性的の踊りを禁止して盆踊を奨励すべきである。盆踊の方が夢中になつて飛びはねるから、身體の運動になる丈けいゝ位なものだ。

やがて隣室で合奏が始る。先日も書いたが自慢ぢやないが私には音楽は全然分らぬ、のみならずうるさくて随分困る時がある。何か考へながら食事をしてゐる時に、遠慮會釋もなく廣目屋の廣告樂隊の様な音をたてられては甚だ以て迷惑をする。夫れでも『君が代』か『螢の光』乃至『思ひ出れば』位ならいゝが、何だか難かしいエタ、イの知れぬ節では薩張興味は湧いて來ぬが、兎に角歡樂境を現出する事丈けは確かである。其間を歐人の給仕頭指揮の下に、白い暴夜服を着て土耳其帽を冠つた素足の黒ん坊が頗る不作法に給仕をして歩く。此れ等の黒ん坊は服装至極よろしくよく似合つてゐるが、どうも其素足が氣になる、何か草履の様なものでもはいたらば餘程 improve するに違ひない。

今日の夕食の献立はこゝに挿入した通りであるが、毎晩殆んどこんな工合で、私にとつては大層な御馳走である。腹が減つてゐるからどれもこれも皆うまい。けれどもたゞ最後の珈琲丈けは、いづつとも書いた様に濃くて甘くてどうも飲む氣になれぬが、年中あついで所に住んでゐると自然こんな濃い毒々しいのがすきになるのかも知れぬ。土人は紅茶等より此の方がすきだし、町にある珈琲店は年中大繁昌である。極く小さい茶碗に一杯出すが其半分は滓だから、のむところはほんの僅かであつたに添へて硝子のコップに水を一杯出す、即ち極く少量の珈琲を酒のみの様に少しづゝ飲んだあとで、此のコップの水をのむのである。

.MENU.

D I N E R

Ox-tail Soup

Filets de Sole Victoria

Baron d' Agneau aux Primeurs

Asperges de Californie
Scs. Mousseuse

Chaufroid de Cailles
Salade Washington

Bombe Nélusko

Fruits

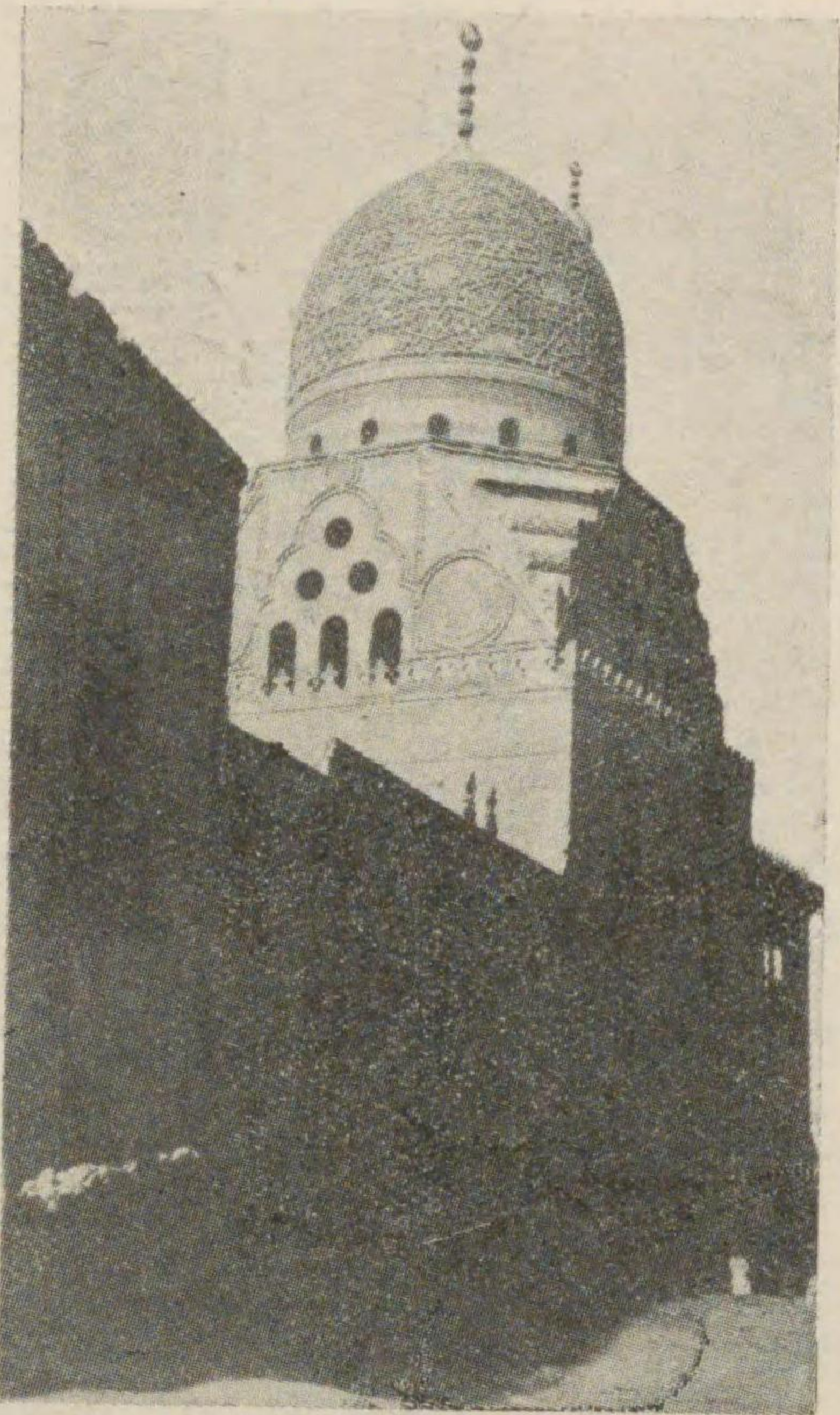
Café à l'Orientale

4 Novembre 1922

SHEPHERD'S HOTEL
CAIRO.

大正十一年十一月四日、開路市牧羊館夕食献立表

夫れは兎に角毎日こんな御馳走をたべながら、いゝ氣になつて一ヶ月も滞在したら、文部省からくださる大層な學資の何ヶ月分かは飛んで了ふことだらう。これに引かへ彼女等はどうぞ遊覽兼衣裳自慢兼亭主に金遣はせの爲めに來てゐるのだから暇は充分にある、だから九時頃から出て乙にす



カける於に墓カリフ外市開路
イト・ベイ廟の塔

まして食事をしたり、無理に威厳を保つたり、無暗に愛嬌を振蒔いたり、餘計な苦心をして十時過に引込み、夜ふかしの朝寢坊をするのが日課であるから天下は頗る泰平である。

澤山の客が綺羅星の如く並び食事をしてゐる中に、私は日本を出る時大枚七十圓を奮發して新調し、常に愛用してゐた一張羅のあひ服に「ソフトカラー」で平氣で食堂へ行く、そして食べて了ふと早速退却をするが、誰れも故障を申込むものもなし、また假に申込んだとて相手にもせず、氣にし出したら切りがないが、やり方一つでどうにでもなるものである。

要するに開路市は金をつかひに行く所で、貧民の行くべき限りではない。一説に Y.M.C.A. へ泊るれば至極安値にいくさうだ。だがこつちは O.M.B.A. なるものがない以上資格がない。加ふるに全然そんな所の人に知合がない。其上耶蘇の坊さんに紹介して貰ふ事も出来なかつたので、きいてはわたが初めから思ひ切つて了つたのである。もうあとたつた一日だから一生の思ひ出に牧羊館の御馳走をたべておかう。だが考へてみれば無駄な事だ。以後埃及見物に行かるゝ春秋に富める諸君子は、前以て方法を講じ Y.M.C.A. へ泊る事にして無駄な費用を省かるゝのが最も賢い方法である。

十一月五日 (日曜、好晴)

午前また博物館へ行つた。九時開館とあるのに五分過ぎても切符賣が來ぬ。苟くも博物館ともあらうものが時間を勵行せぬとは不都合極る。此の通り時間は過ぎたのだ。金はあとで拂ふから切符なしで入場させると談判したら、先方ではもうぢきに切符賣が來るから暫く我慢してくれといったが、責任はそちらにある、ぼんやり待つてゐては時間が無駄になると押問答よろしくあつて、遂に九時十分無切符で入場した。あとで私の時計が五分早過ぎた事を知つたが、夫れにしても不都合である。博物館から時間を勵行しないで平氣である國だから他は押して知るべしである。たゞ汽車の出る時丈け時間通りに行くのが不思議な位である。先日明日庵市へ行つた時も汽車は平氣で一時間

延着した。嘗て西班牙旅行の時愚樂灘市へ午後七時四十五分に着くべき汽車が正味四時間後れて十一時四十五分となり、お蔭で夕食をたべる事が出来なくなり、ひどい目に遇つたが、つまり變挺な國では時間なんかどうでもいゝのである。氣の持ち方一つで勵行出来るのにそれをせぬのである。だから一層けしからぬのである。同じ西班牙國で愚樂灘から馬德里へ歸るとき、凝土馬コンクリートで乗り換へた汽車には、同國皇太后陛下がのつて居られたが、此の汽車は一分の遅刻もせず、正に時間通りに馬德里に着いたのであつた。だからやらうと思へば出来るのに、夫れをせぬのは甚だ以て宜しくな

す。我國でも宴會等は大概二時間位掛値がある様である。此頃の智識階級の會合にも三十分位後れて開會するのは當然として誰も怪まぬ様である。就中其會に列席する最高級の人が遅刻すると、其人の來る迄決して開會せぬ、だから親玉はいゝ氣になつて平氣で遅刻するである。夫れが汽車へのる時だと決して遅刻せぬから勝手である。上は大臣大將より局長知事の輩以下下つ端に至るまで、乃至學校の側では教師學生に至るまで、時間の觀念がありながら、汽車へのる時のほか時間を守る人の方が少ないのは慨嘆の至りである。

私の知つてゐる範圍で、時間勵行の實例は學校等は別としてただ一つである。今でもやつてるかも知れぬが、大正十二年六月から毎月一回十日の夜京都八阪神社に於いて、八阪講演會なるものも開く事になつたさうで、其會に前座を勤むべく交渉を受けたとき、規定には六時開會とあるが、果して時間通りにいかどうか疑問だつたので、念を押したところ、聴衆が一人も來ないでも正六時に始めるとの事であつた。で私は開會時間前十分に行つてゐたところ、時計が六つ鳴り終ると同時に當時の宮司江見清風氏の羽機袴の姿が壇上に現はれたのであつた。私は此時位愉快でたまらなかつた事はなかつたのである。どうかいつもいつも斯様にあり度いと思つた。私は此機會に江見宮司に敬意を表するのである。同氏は昨年明治神宮へ榮轉されたが、今でも健在で定めて時間を勵行してゐらるゝことであらう。

述べ來つた通り埃及では博物館から卒先して時間を守らぬ範を示してゐた。我國では時間勵行者は極く極く少ないのである。そこへ行くといつても歐米はえらい、否歐米がえらいのではなく當然なので、亞細亞と亞弗利加とが駄目なのである。大洋洲は未だ行かぬから知らぬ。

愈最後の博物館見物をすませて午後二時半に歸宿し、夫れから寫眞の整理をした。先日から困つてゐた角膜潰瘍も殆んど全治したし、内地旅行も例へ小口丈けでも無事に終了したのは有難い事である。明日は坡西土に向ひ開路市を退去せねばならぬ、牧羊館のうまい夕食も今夕限りになつて了つた。十一時就眠。

(大正十三年十一月三十日稿了)

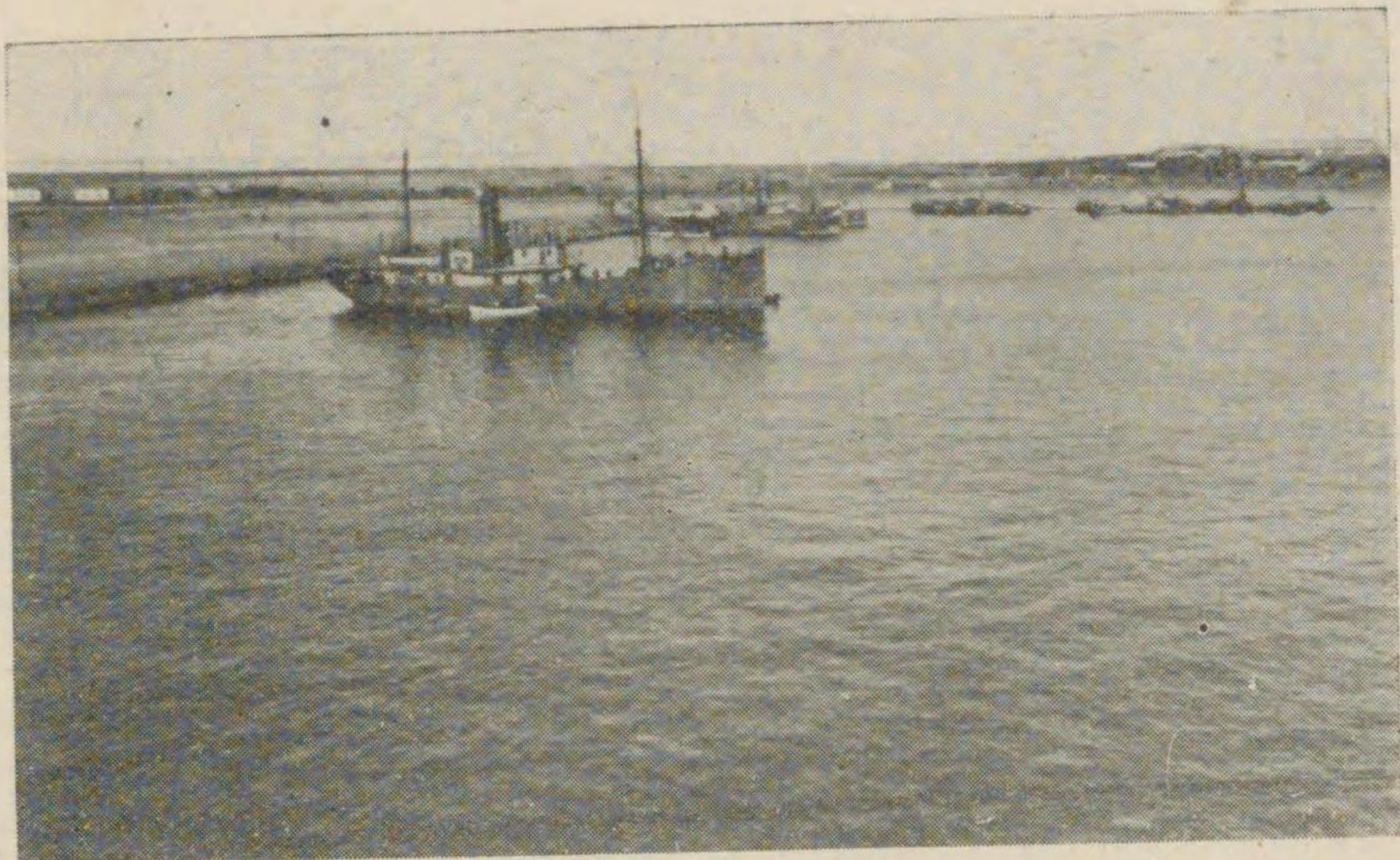
開路市 坡西土 暴夜墓地 解覽

十一月六日

(月曜、好晴)

朝食をしたのはいつもの様に一番であつた。給仕人も亦いつものやうに人の懐へ手を突込まんばかりにしたが、こつちは憚りながらも上埃及迄歩いて来て、しかも最優等(?)の成績を以て卒業してゐるから、最早黒ん坊なんか何とも思はず、泰然自若、悠然と手を振りて拒絶の意を明らかにし、昨夜やつておいたではないか、あれで充分な筈じゃアーンといったやうな顔をしてみせてやつた。

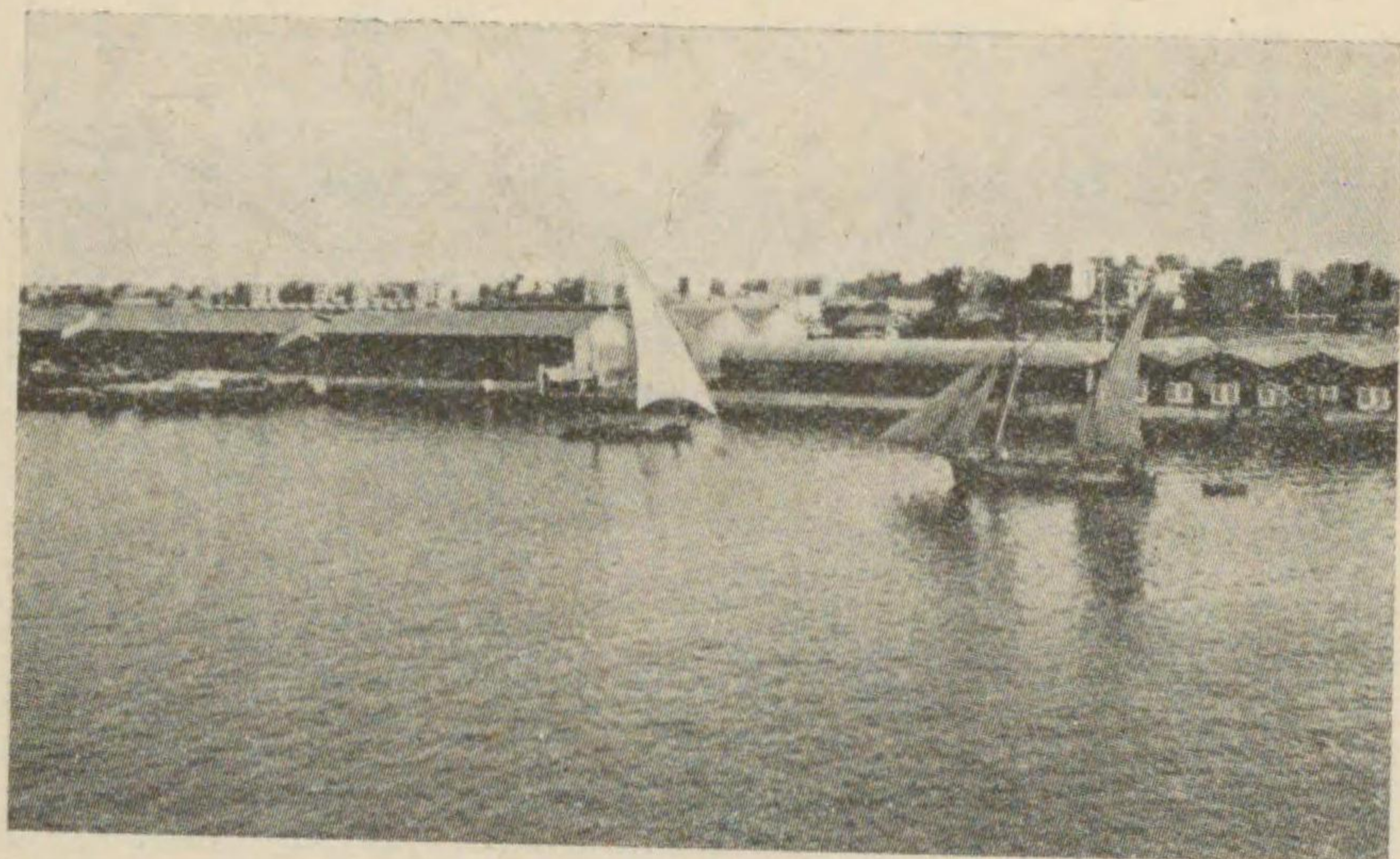
室へ戻り手早く仕度——といつても唯帽子を冠つた丈け——をして今朝九時といふ約束を間違へぬ様に寫眞屋へ現像及で焼附をとりに行くべく外出したら、通りの角でサラーに出遇つた。埃及入國以來私は全然銅貨をみた事がないので、其理由を尋ねたら、サラーの答に銅貨は今廃止になつたがなくてもないから探しておくといつた、私は見本にほしいからあつたら持つて来てくれと頼んでおいたら、彼は承諾したが昨日分れる迄何も言はなかつたから、こつちも知らん顔をしてゐたのにいゝ加減なチャラツポでもなかつたと見え、彼は夫れを持つた來たのであつた。私が今朝寫眞屋へ行くのを知つてゐて途中に待伏せをしてゐたのであつた。



坡西土港風景 其一

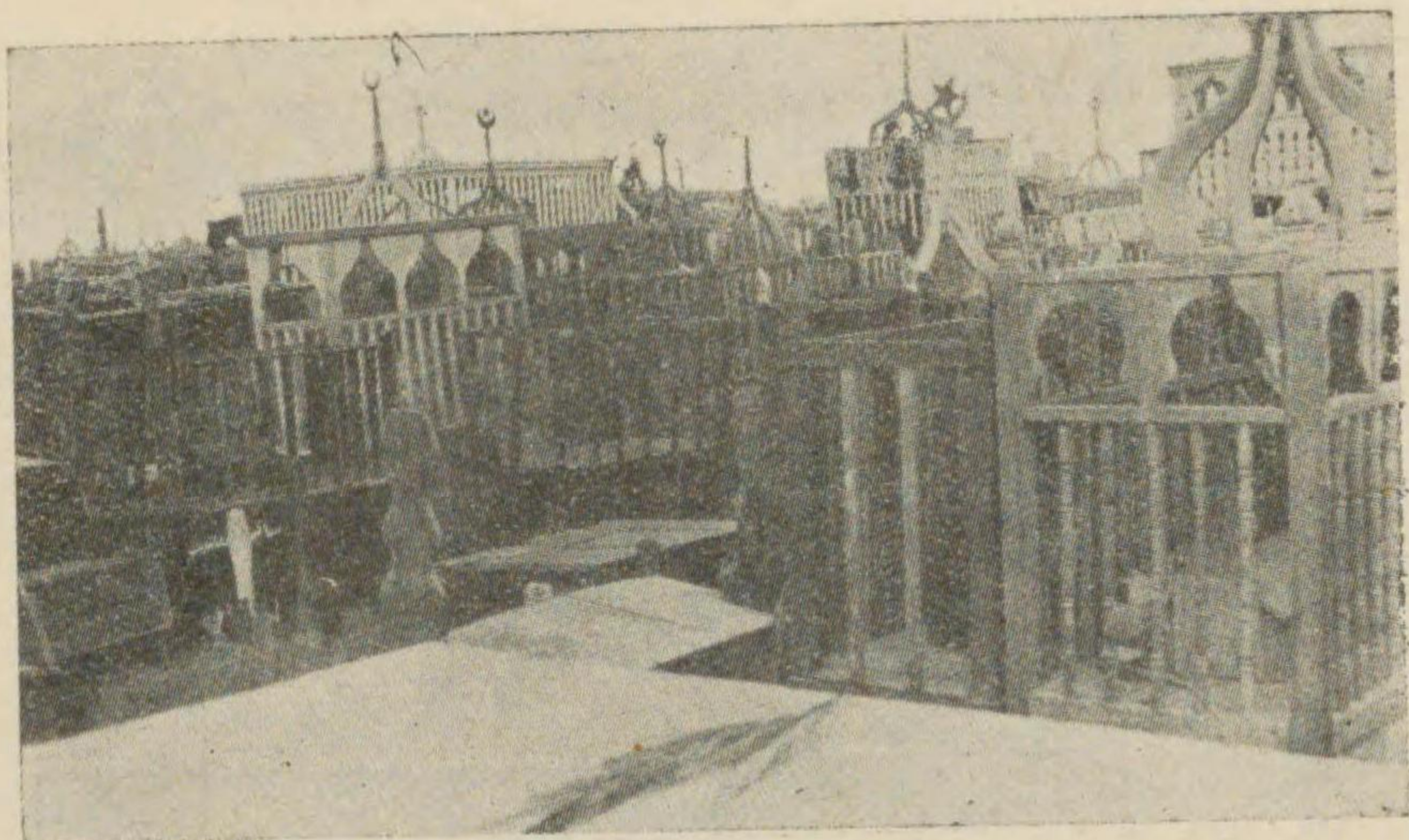
私は旅行をした國々の紙幣・銀・銅・白銅の小錢・郵便はがき・切手・電車乗合自動車の切符類・入場券等を面白いから手當り次第蒐集してきた。古いのぢやない、何れも現行のものである。子供らしい物好きと笑ひ給ふ勿れ、ほんとの事を白状すれば此等の他驛賣辨當の袋・チョコレートのパッケージ・マッチのレーベル・宿屋の請取何でも彼でも集めて來たのだ。でこんな紙屑はたまればたまる程やめられなくなる。錢だつて岐度さうに違ひないが、昔から縁が薄くて一向たまらぬ。だからほんとの事はわからぬ。だからせめて外國旅行の記念に紙屑をためたのである。銀貨・銅貨・紙幣亦然り、例へ今廢止されたにせよ此の間迄立派に通用してゐた銅貨の一枚位もつて歸らざれば、江戸風町の太つちやうのラムネ屋ぢやないが、夫れこそ *Shame* であると考えたのである、何と立派な考へではないか。

彼は二三の銅貨の他希臘・土耳其等の現行白銅貨を取交



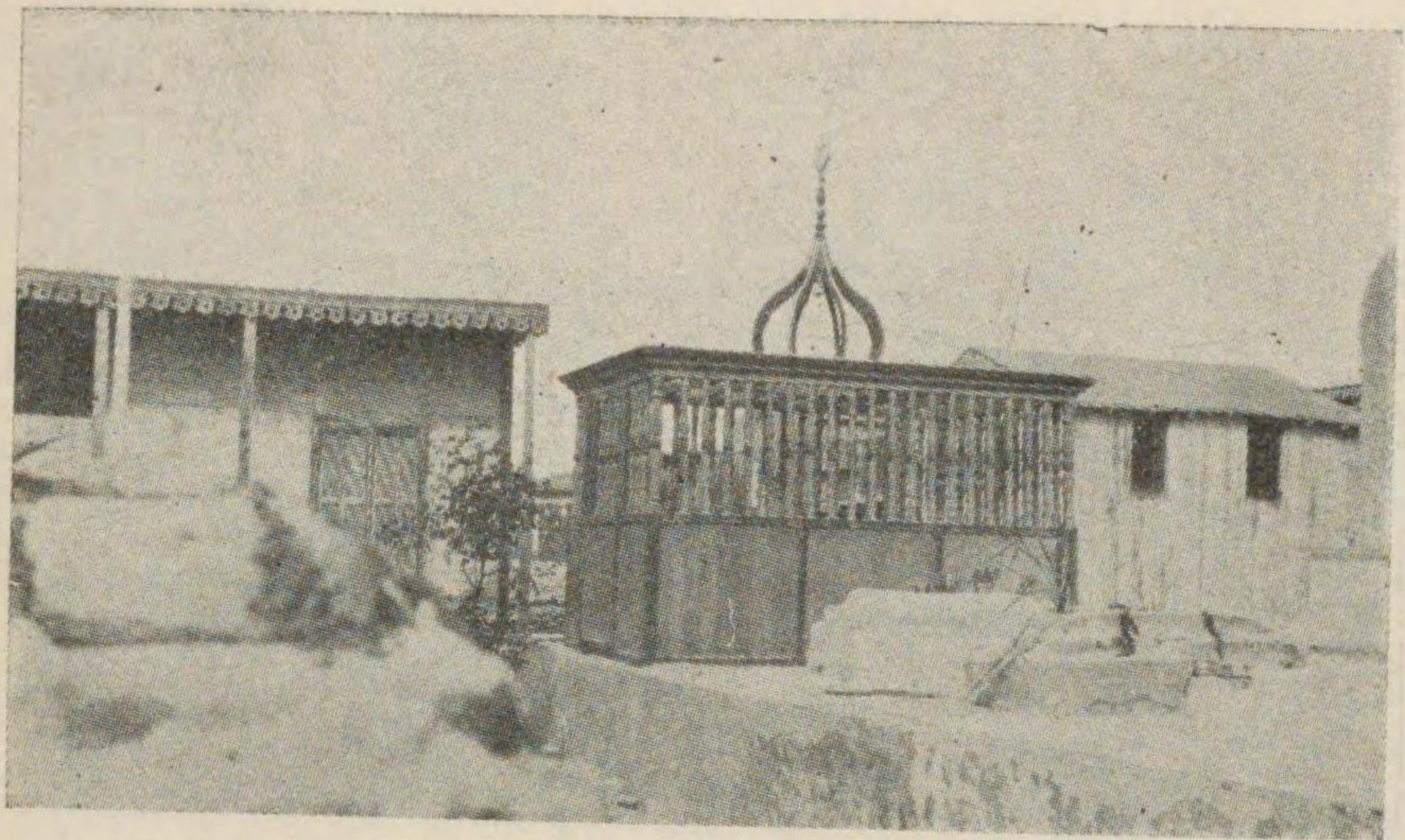
坡西土港風景 其二

せて私にけると言つた、併し彼は職業的案内人である以上、そして而も彼と連絡のある店で何一つ買はなかつた以上、も一つお負に彼がヌビアの土人である以上、たゞてくれる筈がない。いくらやると言つたからとて、たゞで貰ふ程頭は悪くない。そこで後に悪口を言はれぬ程度に心附をやつた、そして寫眞屋迄一所に行つた、これは私が頼んだのではない、彼の申出を承諾したのである。九時二分前に寫眞屋へ行つたのに店は未だ閉つてゐた。仕方なしに店の前で待つてゐると女番頭が來た、愛想よく『お待ちさま主人はヘリオポリスに住んでゐて毎朝電車を通ひますから萬一故障があると自然遅刻します、今朝も屹度さうでせう私も入れません』といつて同じく待つ、暫くしたら主人が來た、遠くから見つけたと見え、帽子を振りニコニコ笑ひながら、私はヘリオポリスから毎朝通ふので、とやり出したから、電車の故障かときくと、停電したので氣が氣でな



暴夜慕 其一

かつたといつた。彼は約束の時間より十五分遅刻したのであつた。寫眞は上埃及の分は焼附が出來たし、昨日市中で撮つたのは唯一枚失敗した丈で、あとは全部よかつた。夫れから歸宿して荷物を持つて驛へ行つた、汽車は正十一時發である、例の如く番頭大に斡旋をした。宿屋を出るとき例の如く用もないのに大勢玄關に並び手を出した事は態々記すにも及ふまい。發車迄の十五分間を車内にて待つてゐると、窓口へ驛賣が來る、一人斷ると次のが來る。殊にうるさいのは雜誌賣で窓から雜誌を突き込んで人の鼻の先に出す、知らん顔をして横を向いてゐると膝の上へ投げ、直にとつて首から下げてゐる箱の中へ投げ込む、買はぬとみて悪口をいふ、到底始末におへぬ奴等である。汽車はすいてゐて大に好都合であつた。去る二日上埃及の食堂車ではたつた二人であつたのに、今日は夫れでも七人ゐた、汽車は正三時無事坡西土着、最早再び此國の汽車



其二 暴夜墓

へのる事はあるまい。汽車といへば此國の汽車にはトンネルが一つもない。夫れは其筈で年百年中内流河に沿ふてのみ走つてゐるのだから、トンネルの出来る事はない。ワヂ、ハルファとカーチーム間だつて恐らくあるまい。世界中トンネル一つもない國はめつたにあるまい。

汽車が坡西土の終點へ着いたので下車すると、そこへ大黒帽を冠つた男が来て、船の切符を買ふのだから旅券を貸せといつた。そして自分は怪しき者に非ずといふ證として先日南部氏の書いた私の姓名及船の等級等を記した紙片を出して見せた。どうも間違はないらしいから其紙片へ署名させて私が受取り、代りに旅券を渡した。そして南部氏の店へ行つたら主人がゐた。先づ先日來の禮を述べたら、方から、驛へ旅券を借りにやつたが渡してくれたかといつたので、最早疑ふ餘地なく大に安心をしたのであつた。今夜泊るのにどこへか宿をとらねばならぬ。どこがいゝか

尋ねてみたら、海岸通の海濱館 (Marina Palace Hotel) へ案内をしてくれた。二階の第十五號室で通りに面してはゐるが室の前に廣縁があるので工合がいゝ、そして甚だゆつたりした氣分になつた。何にしる一番厄介に思つてゐた旅行を終了して最早船を待つ許りであるから、今日位落着いた事はない。夕食をすましてから椅子を椽側へ持出して港の月をみた。大分に圓いから十三日位であらう、海に寫つて甚だ綺麗である。涼しい風さへ吹いて来て非常ないゝ氣持である。

先月一日白耳義國安土府を解纜して坡西土へ向ふとき、豫て覺悟をしてゐたのに、西洋船幽靈の本場たる備助灣は平穩で風波なく、いゝ月でまるで瀬戸内を航行してゐる様であつた、お蔭で船幽靈は影を潜め一疋も出なかつた。續て西葡沖の月、モロッコ・チュニス・トリポリの山の端の月をみて、次は開路市の新月・内流遊覽船の月・明日庵の月の上に坡西土港の月迄みたのだから、殆んど月は卒業して了つた、其上に蚊も居らぬから、割合に粗末な宿だがすつかり納まつてしまつた。湯は明朝でなくてはなないとので、仕方なしに我慢しておいた。此の間十四日間入らなかつた事を思へば何でもない。

十一月七日

(火曜、好晴)

六時半起床七時入浴、朝食を了つて室へ歸つた頃驟雨一過した。たつた一日の事で阿弗利加の雨に遇つたのである。豫てサラがめつたに雨は降らぬ、降つても十五分かせいぜい二十分ですむと

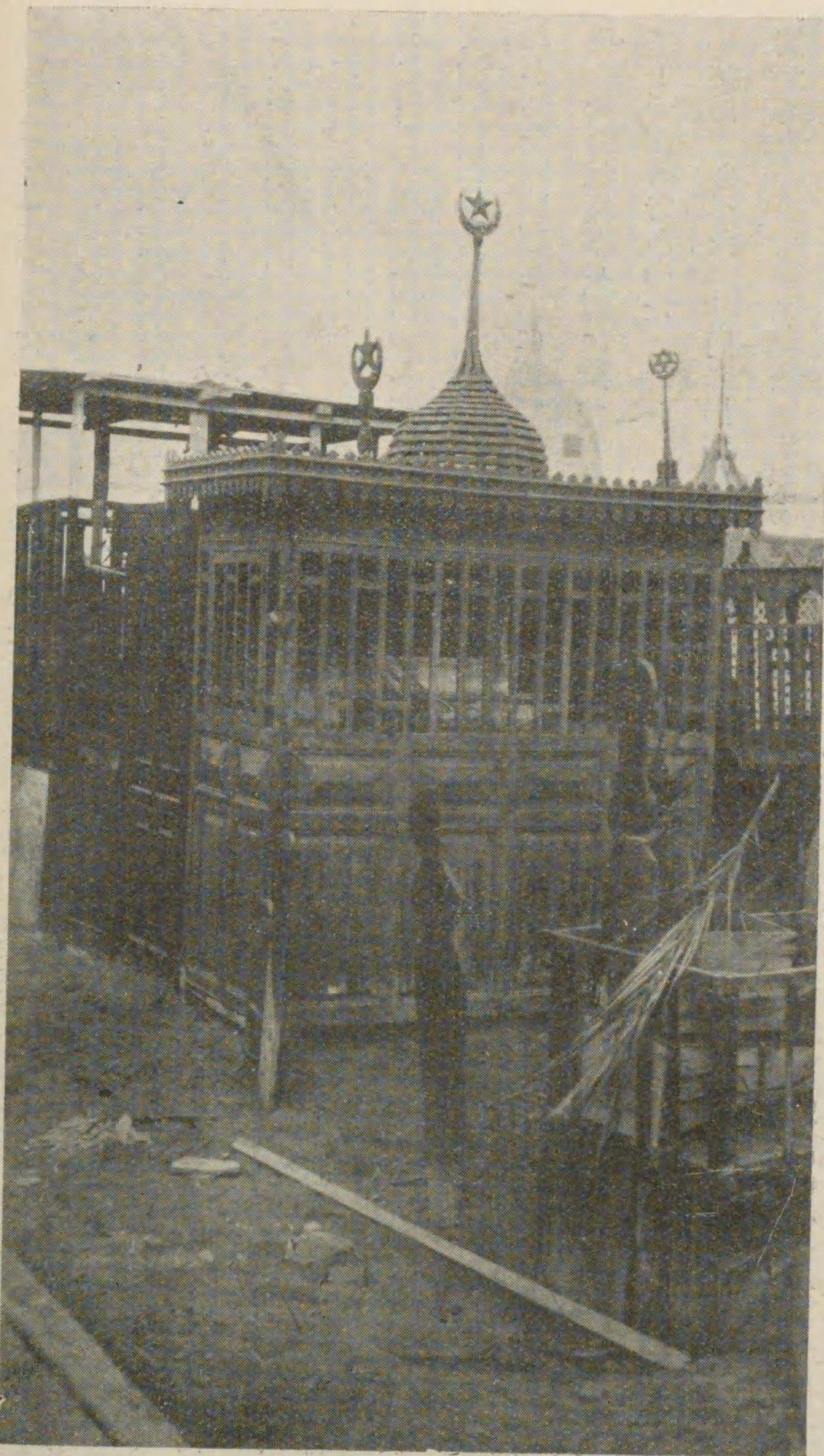
開路市 坡西土 暴夜墓地 解纜

いつたが如何にも其通り、二十分間ですつかり晴れて了つた。夫れから南部氏を訪問して船の切符と旅券とを受取つたが、此時船はいつつくか判らぬ、どうせ夜であらう、夜だとは出るのは明朝になるときいた。扱てはもう一夜泊る事か。夫れもよからう、悪いといつたところで仕方がない。併し何れにしても乗船するに就ては荷物を如何に運搬するが最も便利かときいてみたら、夫れなら宿の番頭にさういつてラガブといふ男を呼んで命ずるのが一番よろしい、あの男なら決して不都合はせぬと南部氏が保證をしたので、歸宿すると直に其通り番頭にラガブを呼んでくれといつておいたら間もなく来た。ところが面會してみても驚いた、先方でも知らん顔をし、私も勿論初対面のやうな風にしてゐたが、知らんどころか、先月十四日驛の歩廊で汽車へのるとき、一寸口角泡を飛ばさんとした男であつた。

夫れはかうである。其日私は開路市へ向ふべく午後零時半發の汽車へ乗らうとして、赤帽に荷物を持たせて歩廊を歩いてゐると、太つた男が私を呼びとめ、開路の宿はきめたかときくから、唯一言『うん』といつて車中に入り席をとつて荷物を案配し、發車迄には未だ時間が少しあるので、よせばよかつたが新聞紙でも買つてみようかと、再び歩廊に下りたら其男は未だゐて、いきなり私に宿屋はどこへ行くときくから、別段言つても差支はないと思ひ牧羊館だと答へたら、懐中から汚れた手帳を出して名をかいとくれといつたから、一も二もなく拒絶をしたが、先方はしつこく頼む。

そこで次の様な問答が彼との間に初まつた。『君は何者か』『牧羊館へ行くお客さんは皆此手帳へ名をかいと頂いてゐます』『牧羊館とはどんな關係があるのか』『ポータアです』『證據があるか』『彼は隠しから牧羊館と陽刻した二本の脚のある小型金屬製の帽子の徽章の様なものを出してみせた、『なぜ夫れをしまつておくのか』『しまつておいても帽子へつけておいても同じ事です』。私は何故に彼が此徽章をつけぬかを疑つたのである、そしてすつかり悪く解釋をして彼は屹度此徽章を拾得したのであらう、そして自分は牧羊館のポータアであるかの如く装ひ、掠鳥を引かけて牧羊館へ電報を打ち、自分が周旋した如く見せかけて金にするのだらうと思つたから、『名なんか書くのはいやだ』『かいてくれないでせう』『何の爲めか』『電報を打て萬事不都合のない様にさせます』『夫れから先刻南部さんに打つて貰つたからもう再び打つに及ばぬ、名はかゝぬ』ときつぱり斷つた、そしたら彼も多少癪に觸つたと見え少しく顔色を變へたが、私は彼を尻目にかけて汽車の中へ入つて了つたのであつた。

其男であつた。其同じ男が同じ洋服を一着に及び同じ大黒帽を冠り海濱館に現れたのだから一寸驚かされたのである。まさかラガブとは此男とは思はなかつた。併しまあ仕方がない、南部氏が推薦したからには間違ひもなからう。こつちもむかうもお互に少しく工合が悪かつたが、そんな事は暖氣にも出さず、南部さんの推薦で君を呼んだが明日孟買行の船へのるのだから荷物を宜しく頼む



といつたら委細承知をして歸つて行つたが、間もなく南部氏は更に土人一名を連れて来て、荷物の始末は成るべく此男に命じてくれといふから、私はたつた今ラガブに命じた許りだといつたら、いやどつちでも同じ事だといつて直に歸つて行つたが、男の顔には確かに失望の色が浮んでゐた。

午後になつて急に思ひついて、こゝには別に観るものはないとの事だから、せめて墓地へでも行つてみようと思へた、併し夫れには案内人が欲しいから、南部氏の店の男を一人貸して貰はう、と自分丈け勝手にきめて其談判に行つたら留守であつた、そこで一時から三時迄待つてゐたが戻らぬので面倒になり歸宿、夕食前も一度行つてみたら今度は歸つてゐて例の如く温顔を以て迎へ、船は明朝入港するさうだから、出るのは何れ正午になるだらう、尚ほ明日は日本から箱根丸がつく、此船には佛國に趣かるゝ北白川宮妃殿下が便乗して居られ、當港観光の爲め上陸せらるゝから歓迎の爲め早朝から多忙で従て不在であるとの事であつた。斯様な有様では到底再び面會する折もあるまいと思ひ、上陸以來種々世話になつた禮を述べ、且つ最後の頼みとして明朝八時半に男を一人墓地行の案内に貸して貰ひ度いと言つたら、心よく承諾して直に其男を呼んで萬事言ひ含め、私には其男に對する心附の額迄注意してくれた。これで明日午前中の仕事も出来、暴夜墓も見物が出来る、甚だ以て好都合な事になつた。

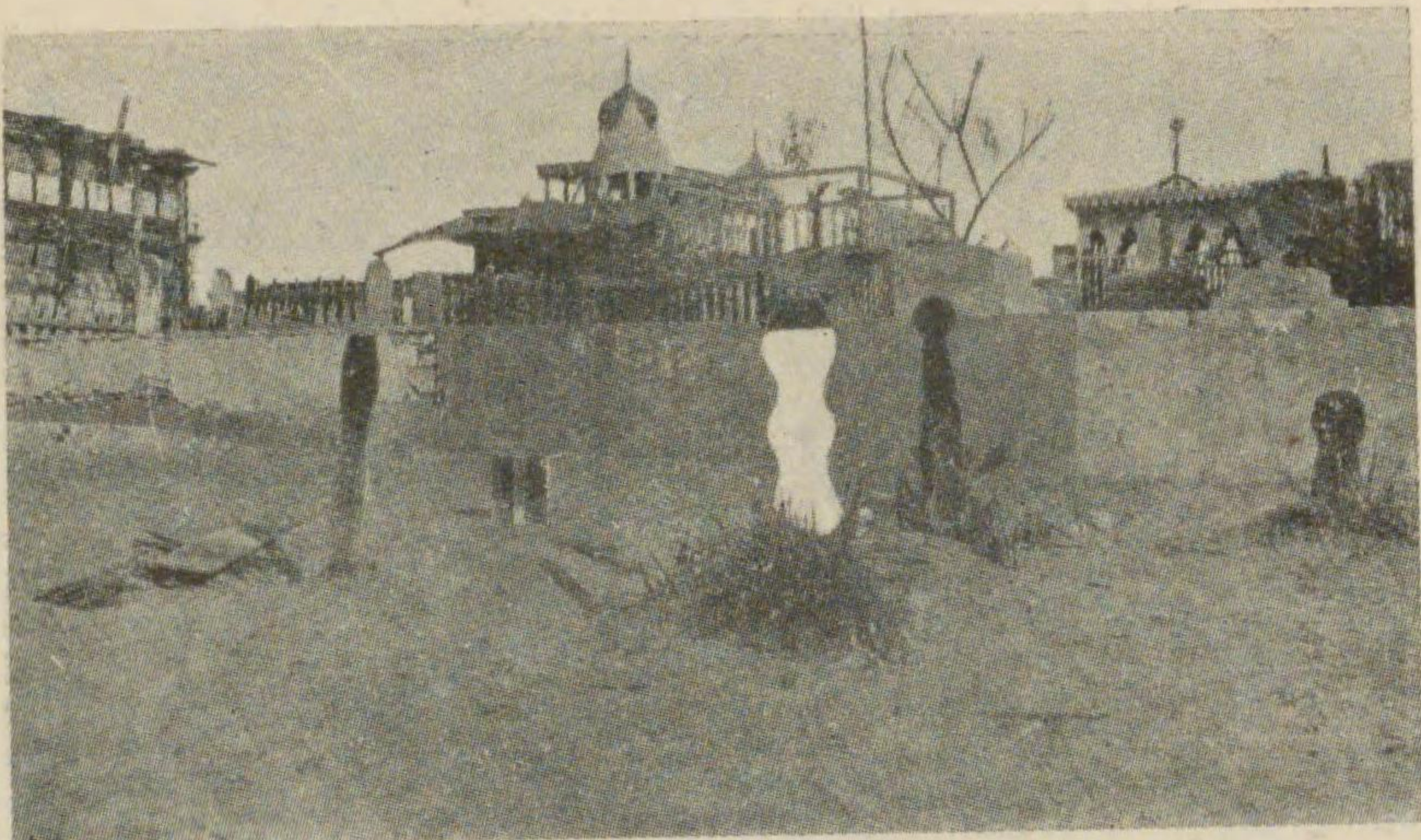
十一月八日 (水曜、好晴)

開路市 坡西土 暴夜墓地 解鏡

八時半の約束であつたが少し早く八時に行つてみたら昨日の男は既にゐた、併し船の出る確かな時間が判らぬ、私は第一に船の出る時間を確めねばならぬ。此の店にアントニオと呼ぶ、伊太利生の番頭がゐてよく英語を喋る、此番頭に頼むのが上分別と思つたから、店のものにどこに居るかをきいたら市場へ行つたといふ、そこで此の男を促して市場に行つてみたら果してゐた、私はアントニオに向ひ氣の毒だが船の出る時間を會社へ問合してくれぬかと頼んだら直にきいてくれて正午に出ると判つた。夫れから市場を出て、ある町から馬車鐵道に乗り終點迄行き、こゝから墓地迄四五町の間徒歩した。今日は極く上等の「魔除け」がついてゐるから、甚だ安全に墓地へ着する事が出来た。

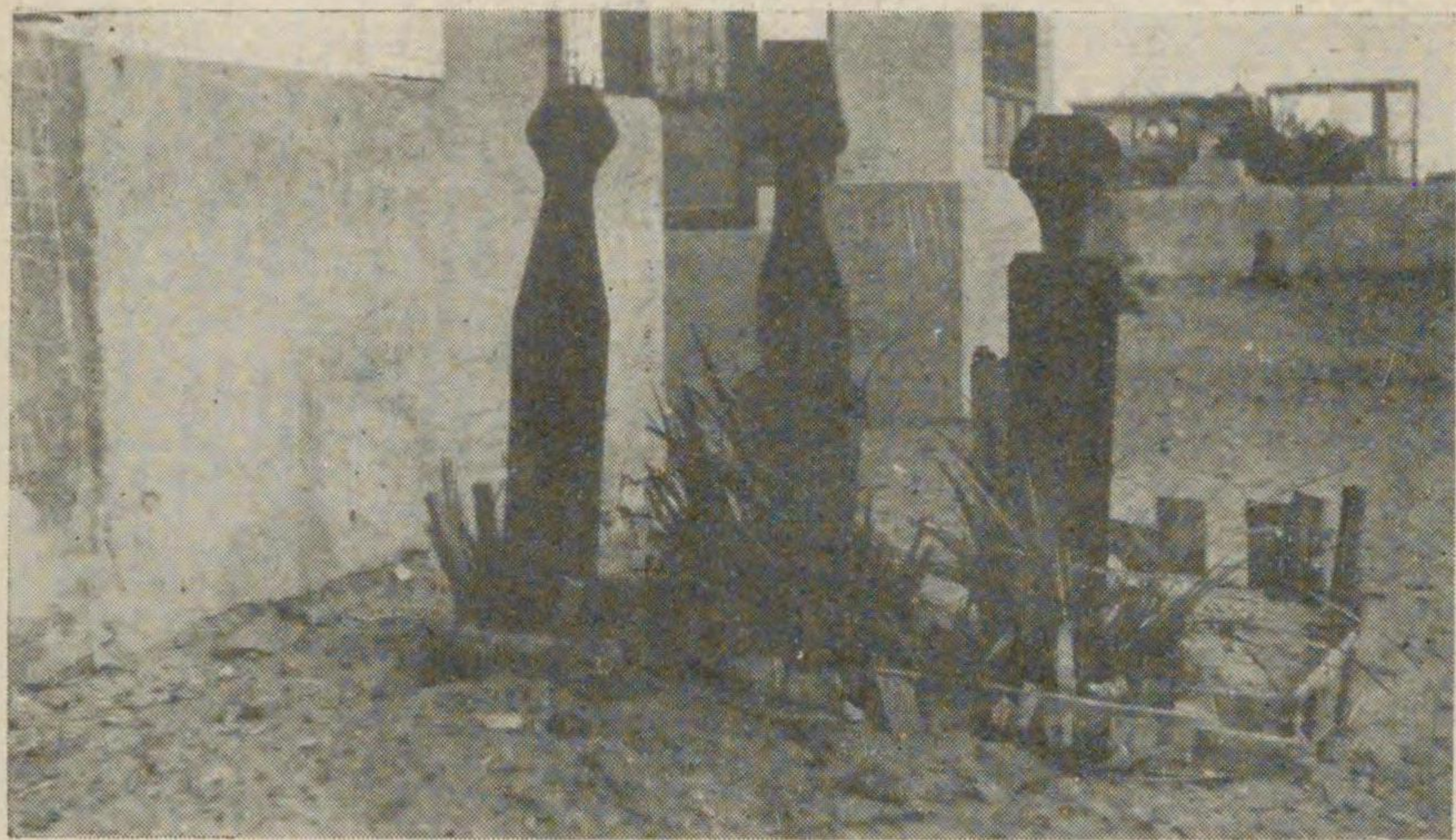
此の暴夜墓地は一見の價値が充分にある、といふのは何れの墓も多くは鳥籠の様である、そして上は圓屋根の骨組丈けのものがついてゐる、そして其鳥籠の内に墓石がある。また平たい板をたてたのもある、我國でいふと墓石を立てる迄木の塔婆を立て、おくのと同じ意味であらう、此の塔婆の形また頗る面白い、其數種を寫眞に出しておいた。私はこの鳥籠がおそろしく氣に入つた、こんな面白い墓なんか何處を探したつて埃及にはこゝ計りだらう。ヘヂヤツ・シリア・暴夜・メソポタミア邊の探險でもしなければ、一寸こんな鳥籠はあるまい。寫眞が小さいから蟲籠とも考へられる、何にしても愉快なものだ。

歸りはバスへのつた、随分汚く車掌はまるで乞食の様だがめつたに人の事は言へぬ、正に東京市



暴夜墓 其四

の圓太郎自動車と伯仲の間にある——車體も客も何もかも——と思へばよろしい。但し車掌丈けは東京は近頃若い娘になつたといふから、これ丈けは我國の方が綺麗かも知れぬが、夫にしてもよく平氣である圓太郎を東京市中に運轉させたものだと思つたが、波西土のお仲間だと思へば辛棒が出来ぬ事もない。バス序でに圓太郎より少し上等な奴の横つ腹には英語で TOKYOSMOTOR BUS COMPANY (大阪のにも OSAKA 云々とかいてあるやうだ) とかいたのは何んの禁厭か。電車の停留場に安全地帯は分つたが其の下の SAFETY ZONE や、四つ辻の止れ進めの下の STOP, GO 等ですら癪の種だ。大阪軌道の踏切には米利堅の STOP, LOOK AND LISTEN を直譯(?)「ストップとまりききみてとほれ」と平氣でやつてゐる。英語を國語としてゐる英米の眞似をしたり、自ら進んで屬國氣取りでゐたりするなんて、なんてだらしが無いのだらう。西班牙やチ



暴夜墓其五

エコスロワキア等に於いてすら揭示は總て自國語の他は用ひぬ。夫れに我國はこの有様ぢやいやになる。埃及では暴英二國語を用ひてゐるのは、あゝいふ状態だから止むを得まい。印度へ行くと驛の立札等は三國語でやつてゐる、英の屬國だから仕方がない。我國の驛の立札は漢字・平假名・羅馬字其の上に揭示には漢字交り文と純然たる英文とを用ひてゐる。客車の横つ腹の FIRST, SECOND, THIRD は此の頃やつとやめたやうだが、それでもまだ寢臺車には SLEEPING CAR 食堂車には DINING CAR とかいてゐるのはだらしがない。當局の説明には外國人の便宜を圖るのだといふ。然るに外國ではちつとも日本人の便宜を圖らぬ。我國ばかりこんな事をするには當らぬ。だから外國人はいゝ氣になつてつけ上るのである。我國人が外國へ行く時、先づ以て其の國の言葉を研究するなら、外國人が我國に来る時、第一に日用の會話を研究するがいゝ、かく

てこそ對等といふべきで、かくてこそ一等國の位置を保ち得るのである。今の様では英國か米國の屬國の様で氣がきかない。其上東京驛を下りて出たところのあのさまは何だ、まるで米國の植民地みたやうぢやないか、こんな事でどうして一等國の面目が保てやうぞ。もつともつと大に奮勵努力せねばならぬのである。

宿へ歸つて待てども待てどもラガブは來ない、其うちだんだん時間はたつ、最早我慢が出來ぬので勝手に出かけやうと思つた折、ある男が荷車をひいてやつて來て、ラガブは税關で待つてゐるか、自分丈け荷物をとりに來たといふ。そこで荷物を其まゝ車へ積ませ、其男について税關へ行つたら、其構内にラガブはゐて、自分は多忙だから船へは代理の男をやる、夫れで荷物積込の手數料其他萬端すつかりすます迄の料金として英貨十志を要求した、と同時に船迄行くといふ男が出て來た、みると一昨日驛であつた男なので、幾分氣も落ついて來た。そこで荷物は其の男に任せ旅券檢閲所へ行つたら黒ん坊の役人がゐて覺束ない手附で P. C. O. (註 Passport Controll Office), P. Said (註 Port Said), Seen on departure. 8. XI. 22 (署名) と金釘流でやつてのけた、此の字たるや特別念入の惡筆で私の旅券の上に永久にこの字がこびりついてゐるのだから恐縮する。お蔭であけてみる度にあの時の有様を思ひ出す。

此處を通り越したら其男が來て今度は檢疫所へ行くのだといふ、入國の時はそんな事はなかつた



暴夜墓 其六

のに、出發に際して檢疫とは少しく變だと思ひながら行つてみたら、役人がゐて金を出せといふ。即ち檢疫なんかどうでもいゝので金をとるのが目的らしい。役人は私に二十ピアスタア出せといつた、ざつと金貳圓である。丁度埃貨の持合せがなかつたので英貨で拂つたら四志六片だつた。少し高過る様だつたが此際文句を言ふ丈け野暮だから、命ぜらるゝまゝ至極從順に拂つてやつた、そしたら Thank you といつた。英吉利氣取でゐるのだらう。我國の役人は到底この眞似は出來ぬ、其代りこんな下つ端になるとお辭儀の代りにフン反り返つて見せる。早い話が郵便局へ税金を納めに行つて見給へ、役人が窓口控へてゐながら中々こつちを向かぬ、大方直に向いては威嚴がないとでも心得てゐるのだらう。やつとこつちを向くとしつかりと片手に握つてゐる膏血の一部をひつたり、にらみつけて受取を突出すのは我々の何度も何度も經驗してゐるところであ

る。

親船迄我々は發動汽船で、荷物は別の船で行つた、二等は満員で一等はいくらか餘裕がある、そこで私は一等船室へ寢て食事だけは二等へ食ひに行くのだとの事。何だか變だが仕方がない。八十圓儉約したさにこんな目に遇ふのだ。思へば安土府から坡西土迄十四日間で二百五十圓だつたのに、坡西土から孟買迄同じく十四日間の而も二等で五百六十圓は筧棒だが、まだこの Lloyd Triestino 汽船會社の船の方が安いので、P. O. 會社のだつたらもつと高いのださうな。いちの悪い事には此の間には日本船はないので、いやでも外國船によらねばならず、だから其内の最安價にしたのである。

船の名は Aquileja といふ、アクイレイアとは今はトリエスト市附近の小さい町の名であるが、昔羅馬時代に大都市であつたのは人の知るところである。去年は大西洋を横斷するのにアクイタニア丸へのり、今度暴夜海を渡るにアクイレイア丸へのり、妙に同じ様の名の船で、兩方共大に歴史的意義の深い地名だから大分氣に入つた。一等と二等とたつた八十圓の差で、一日にするとざつと五圓五十錢の差だから知れたもの、而も私の様にねるのは一等だとすると金八十圓也まるもうけになる。三等となるとずつと下落して Deck Passenger であり、これは大分に安いが、まさかいくら安くてもこの眞似丈けは願ひ下げだ。だから二等にしたのだが、あとから考へるとこれは大出來

だつた。君府の住人だといふ間拔面をしたノツボだの、スミルナの住人だといふ大學の先生然たる物識だの、若い尼さんの一隊と Grey Friars と、鬚鬚を生やした印度人だの、いろいろな人間がのつてゐて面白かつたが、初めの時は一寸心細い様な気がしなかつた。

室の番號は一三三號とあるので、そこへ入つてみたら荷物は五つ無事そこに置かれてあつた、但し寢臺——BerthではなくBedであつた——は三つ置いてあり、窓際のと突き當りのは既に先客に占領されてゐる、入口に最も近いところの最もまづい位置の丈けがあいてゐた、だから最後に入つた私は夫れに決めるより他に方法はなかつたのである。實のところ私はこんな眞のBerthよりかBerthの方が餘程いゝ、なぜなら一方は壁にくつついてゐて幕さへ引けば世間と没交渉になるからであるが、異人は幕なんかなくともBedの方がいゝと見える。この點は少なからずいやだが仕方がないから辛棒する事にした。其昔し何處の馬の骨だか判らない芋つ掘の上等兵にいちめられたのさへ辛棒したのだ、夫れに比べれば此の位何でもない。

室を見極めてから甲板に戻つたら、そこに先刻の男と荷運夫の一人がゐた、そこで親方に心附をやり、人夫二人に夫れ夫れやる必要があるので紙包を二つ作り、特に一つづゝ渡してくれと言つて親方へ渡して室へ戻つたら、室には私の荷物を運び込んだ男がゐて、荷物は無事五個共運び込んだから幾分の心附をくれと言つた。そこで私は心附なら今甲板で親方へ渡しておいたからあれを貰へ

といつたら、少しでもいゝから是非くれと言ひ張り中々執拗い、私はよく分る様に親方には二人分別に紙包にして渡してあるから其一つを貰へといつても彼は却々きかず、益々大聲を出して始末に悪い。遂に疝癪を起し『五つ来るのは當然だ、其上二重に心附を請求するとは怪しからぬ』と、少しく反り身になり睨みつけながら怒鳴つたのだから頗る痛快で、正に勇氣凜々邊を拂つて了つたのである。そこへ來合せた給仕が一寸心附の二ピアスタア位やつてはどうですといつたから、心附なら親方へ渡してあると先刻から言つてゐるのだ、此男は二重取りを計畫でゐるらしいといつたので此幕は閉ぢたが、併し後で考へてみたら、も一人の荷運夫が猫婆をきめ込んだのかも知れぬ。又私としても別々に渡せばよかつたとも思つたが、眞のことはどうなのかよく分らぬ。何れにして我利我利亡者の寄り集りだから、何が何だか判つたものぢやない。

夫れから甲板へ出てみたら土人の物賣が澤山にゐる、眞偽不明とはいふものゝ先づ殆んど偽物許りもつて來て盛に賣らんと試みてゐる。愈よ出帆の刻限が來たので一人去り二人去り、遂にバクシンシュ連は全部引揚げ、正十二時を合圖に碇を巻き汽笛を鳴らして動き出した、坡西土も先づ先づこれが見納めだらう。

やがて蘇西運河株式會社の建物の前を通つた、全體白色の回教寺院をみる様な建築であつたが、此會社が莫大の通行税を取立てゝ利益を壟斷してゐるのかと思ふと、癩にも觸るし美しくもある。

此建物に近く我が箱根丸が碇泊してゐた。此船には先にも記した通り北白川宮妃が便乗して居られ今は上陸して在留民の歓迎を受けて居らるゝのである。後日巴里近郊で奇禍に遇はるゝとは誰人が豫想し得たらう。ある異人が其船を指して *Nice Boat* だと評してゐた。無論さうではあるが、併し大きな蒸氣船をボートとはちと理窟に合はぬ。我國で英語を習へば先生はボートを短艇と譯す。尤もこれは昔し私が稽古した時分の事で、今ならボートは矢張りボートだらう。併し英米にはこんな言葉があるのだから仕方がない。大西洋通ひの五萬五千噸の途方途徹もない大船 "*Berençaria*" といふ *Nice Boat* で片附けて了ふのだから、一萬噸の箱根丸位何でもないのである。さうするとボートとは二人乃至六人八人乗位より五萬五千噸の大蒸氣船迄を含むものと心得べきである。英語なんてものはこんな不都合な言葉である。生れつきすきで専門にするならとにかく、さうでないものは不都合な言葉の稽古をいつ迄もやらされるのは、洵に迷惑の上もないことであるから、その邊は手加減でいゝ位にしておいてはどうか。中學では一年からやらされ、高等學校でも三年間やらされ、さうして大學への入學選抜試験にまでやられては立つ瀬があるまい。夫れから少し行くと壽福丸といふ荷物船がゐた、これは箱根丸より大分小さい様であつたが、今日は日本船を二つも見たのでいゝ心持であつた。字といつたら横かぎの蟹の様なものばかり、言葉といつたらペラペラの珍紛漢の間にあつて、箱根丸と壽福丸とはまことに懐しい感がした。

出ると間もなく晝食になつたので二等の食堂へ行く、私は一番端の机で私の前にはゑらい物識りがゐた。どう安く積つても *Ph. D.* とか *Th. D.* とかいふ肩書をもつてゐさうな顔をしてゐる、ところが此男頗る愛想よく私に話かける、だん／＼懇意になり遂に此男が希臘人でスミルナの住人で商人で孟買に二十五年住んでゐて、つい先頃の大火でスミルナに於ける親譲りの動産不動産全部をファイにして了つたと話した。此男は何でも知つてゐる。彼は世界の學術的の言葉は何れも源を希臘語に發してゐるといつた。成程さうかなと感心してみせる。献立表の船名をかいいたところに *Pfo. Aquileja* とあるのを指して *Pfo.* とは何の事か知つてゐるかときく。船の掲示のどこかに *Piroscato* とあつたのを思ひ出したからピロスカフオの略字だと答へたら、其通りだが何の事かといふ。蒸氣船の事さ。左様、併しなぜ蒸氣船といふ意味か。とどこ迄も追求してくる。いつか朝食の時蝦の天麩羅が献立表にのつてゐた。彼は好物と見え註文しておいて私に向ひ、食指を曲げたり伸したりしてみせて君は魚はすきかときく。魚たどんな魚だ。こんなのだ。と言つて相不變指を曲げたり伸したりしてゐる。彼は蝦といふ字を忘れたのか又は私が知らぬとみくびつたのか何れどつちかだらう。蝦かい。うん其蝦さ。蝦は魚ぢやない君は博學で語源等よく知つてゐるが動物學は知らんと見える。ふん、夫れぢや蝦は何だい。甲殻類中の長尾類だよ、甲冑に身を固めてゐるぢやないか。これでピロスカフオの仇討をしたのである。

こんな他愛のない事を食事毎に繰返すので面白く食事をする。Grey Friars の一人は私が邦文の雑誌を讀んでゐるのを覗き込んでどうしてそんな字は讀めるのかときく。お互様だ。横にかいた變挺な字がどうして讀めるのかときいてやらうと思はなくもなかつたが、こつちは坊さん達程頭は悪くない積りだから左様な愚問はしなかつた。

印度人の紳士數人のつてゐた、彼等は船中で英語を使つてゐた。憐むべきは亡國の民で、日常彼等同志の間にすら異國語を用ひて得意然としてゐるのである。併しこれはどうかすると永く英米にゐた日本人にもある癖である。彼等は永い間異國に在つて其の言葉を習つた結果、その方が使ひいといふ點もあらうし、また自分は永く異國にゐたといふ事を知らしめて自己を眞價以上に評價せしめやうといふ下心からもあらう、兎に角齒の浮く様な連中がゐなくもないから、餘り人の悪口は言へぬ。

扱て愈よ運河に入つた、右は埃及で、左も埃及領だが暴夜沙漠の一部だと思ふと一寸妙な氣がする、幅の狭い掘り割をそろりそろりと行く、どつち側をみても砂つ原で面白くも可笑しくもない、甲板上の長椅子に腰を掛けてゐたら、前を通つた若い人がいきなり日本語で話しかけた。此の人は先刻から氣がついてはゐたが、日本人だと思つて話しかけたらさうでなくて失敗した事が數回あつたから、要心して知らん顔をしてゐたのだ、然るに先方から日本語で話しかけたのだから今度は大

丈夫である。だんだん話してゐるうちに此の人の仲間が未だ二人ゐる、紹介するから來ないかといふ。行つてみたら太つた相當の年配の人と背の高い若い人とゐた、で此等三人の人と一所に上甲板に出て話をしてゐる内に漸く夕景となりそこいらが薄暗くなつて來た、そして遂に太つた人と私と二人きりになり、とうとう挨拶もせずに分れて了つたが、後に此の人は東洋紡績株式會社副社長阿部房次郎氏で、背の高い若い人は同氏の女婿法學士阿部藤造氏、最初にあつた若い人は東洋綿花株式會社の歐洲出張員法學士小越軌氏と知れた、そして唯一人の知人もなく全くお先眞つ暗の孟買へ上陸するにつき、阿部氏と小越法學士の厚意により多大の便宜を得た事は今でも感謝してゐる次第である。

尙阿部氏は伊太利旅行の際、私の友人で學校の先生で、濃厚篤實の士なる和成蘇事氏が奇禍に遇ひ、進退谷つて困却してゐたのに多大の同情を表し、親兄弟も及ばぬ程の心からの助力をせられた美談がある。

夕食をすましてから一人甲板を散歩してゐると、月が暴夜沙漠から顔を出した、空は晴渡つてゐる、これで運河の月もみた、あとになつてヘジャヅ國や暴夜國から出た月、天に沖してからは紅海の月をみた、もう月丈けはすつかり卒業をして了つた。

* * * * *

一度埃及の地を踏んでみると、いつ迄も記憶に存してゐるから、例へば Bakshish でせめられても、左様な事は忘れて了ひ、いつ迄も懐しい様な氣がするものである。だから其後埃及の事が新聞に出てゐると、私は多大の注意を以て讀んでゐるのである。有名なザクルル・パシヤが放免され歸國して直に内閣を組織したのもつい此頃であつた。元來我國に於いては大臣には誰がなつても一切私とは没交渉で、國會議員と同じ事で全然この方面に興味はないのである、況や外國の大臣に於ておや。然るに妙に此人の時丈は私の頭に響いて來た。名許りの獨立國を眞の有名有實の獨立國に昇格し、開路市に於ける英國の駐屯軍を追拂ふのも遠くはあるまい、と大にどうでもいゝ事ながら期待をしたのであつたが、夫れもいつしか忘れて了つてゐた。

然るに突然、大正十二年十一月廿日の新聞紙上に一號活字で大きく『スーダン總督狙撃されて重傷』といふ見出しがあつた、此時私の頭に浮んで來たのは、先年ハルビンに於ける故伊藤公の狙撃事件で、馬鹿な事をする奴は世界中に廣がつてゐるものだ、折角獨立しかけた埃及は又復ひどい目に遇ふのぢやないか、と心中大に同情したが、引續き次の半月の間は此事件の發展で殆んど應接に追ない程であつた。英國は果して赤ん坊の手を捻り頭を撲つたのである。曰く『ス總督死す』『犯人逮捕さる』『五十萬磅の賠償金を要求』『廿四時間内の回答を求む』『アレキサンドリア税關占領命』

令』『英國艦隊出動』『埃及内閣辭職』『埃及側折れる、スダン軍撤退』『カーツーム駐在埃及兵の叛亂』『英國の要求を容れて埃及政府屈服す』、でどこのつまり埃及が閉口して大團圓となつたのであつたが、實地を知らずに遠方から見ると、如何にも腑甲斐なく見える。其後大分時がたつてもう大概忘れた時分、名は記憶せぬがある雑誌をみてゐたら次の様な記事があつた。曰く

アレンビー總督は英政府の命に依つて十一月二十二日附を以て概要次の如き通告を埃及政府に發し七ヶ條より成る要求をなした。

- 一、本犯罪に對し十分なる謝罪をなすこと
 - 二、全力を盡し且つ偏頗なく犯罪の原因を調査し犯罪者の何人たるを問はず其年齢の如何を問はず相當處罰すること
 - 三、今後凡ゆる政治的示威運動を嚴重に禁止すること
 - 四、直に英國に五十萬磅の賠償金を支拂ふこと
 - 五、二十四時間内にスーダンより埃及軍隊に屬する埃及人士官兵卒の全部撤退を命ずること。
 - 六、スーダン政府は必要に應じゲジラに於ける棉花栽培地を目下の三十萬フェダンより無制限に増大すべきことを關係官廳に通告すべし
 - 七、埃及に於ける外國人の利益保護に關する英政府の希望に反對する總ての障害を除去すること
- 前記要求事項にして速に容るゝところとならざれば英政府は埃及並にスーダンに於ける利益擁護のため直に必要なる行動に出づべし

一九二四年十一月二十二日

埃及首相宛

開路市 坡西土 暴夜墓 解纜

成程これは随分手きびしい、人を一人殺して夫れが何の役にもたゝなかつたのみならず、ゑらい目にあつてしまつたのは氣の毒なことである。

私はたゞ内流沿岸の古建築を見物に行つた丈けであるが、夫れでもあれぢや到底英國に對し手も足も出まいと思はれた位である。バクシーシユぢやいやになつたが、回教民族全體としては氣の毒でならなかつた。お前の方は知らん顔をしてゐるから、おれの方の仕事の邪魔をしてくれるなは餘りに虫がよすぎる。が併し相手が強くては手の出し様がない、洵に蠅螂の籠車に向ふ例の如くで如何とも致し方がない、どうも止むを得ぬから一生懸命になつて徐ろに時機の來るを待つより仕方があるまい。

(大正十四年一月二十六日稿了)



現行 50 Piastres 紙幣表面・原寸。(著者所藏)

成程これは随分手きびしい、人を一人殺して夫れが何の役にもたゝなかつたのみならず、ゑらい目にあつてしまつたのは氣の毒なことである。

私はたゞ内流沿岸の古建築を見物に行つた丈けであるが、夫れでもあれぢや到底英國に對し手も足も出まいと思はれた位である。バクシーシユぢやいやになつたが、回教民族全體としては氣の毒でならなかつた。お前の方は知らん顔をしてゐるから、おれの方の仕事の邪魔をしてくれるなは餘りに虫がよすぎる。が併し相手が強くては手の出し様がない、洵に蠶螂の龍車に向ふ例の如くで如何とも致し方がない、どうも止むを得ぬから一生懸命になつて徐ろに時機の來るを待つより仕方があるまい。

(大正十四年一月二十六日稿了)



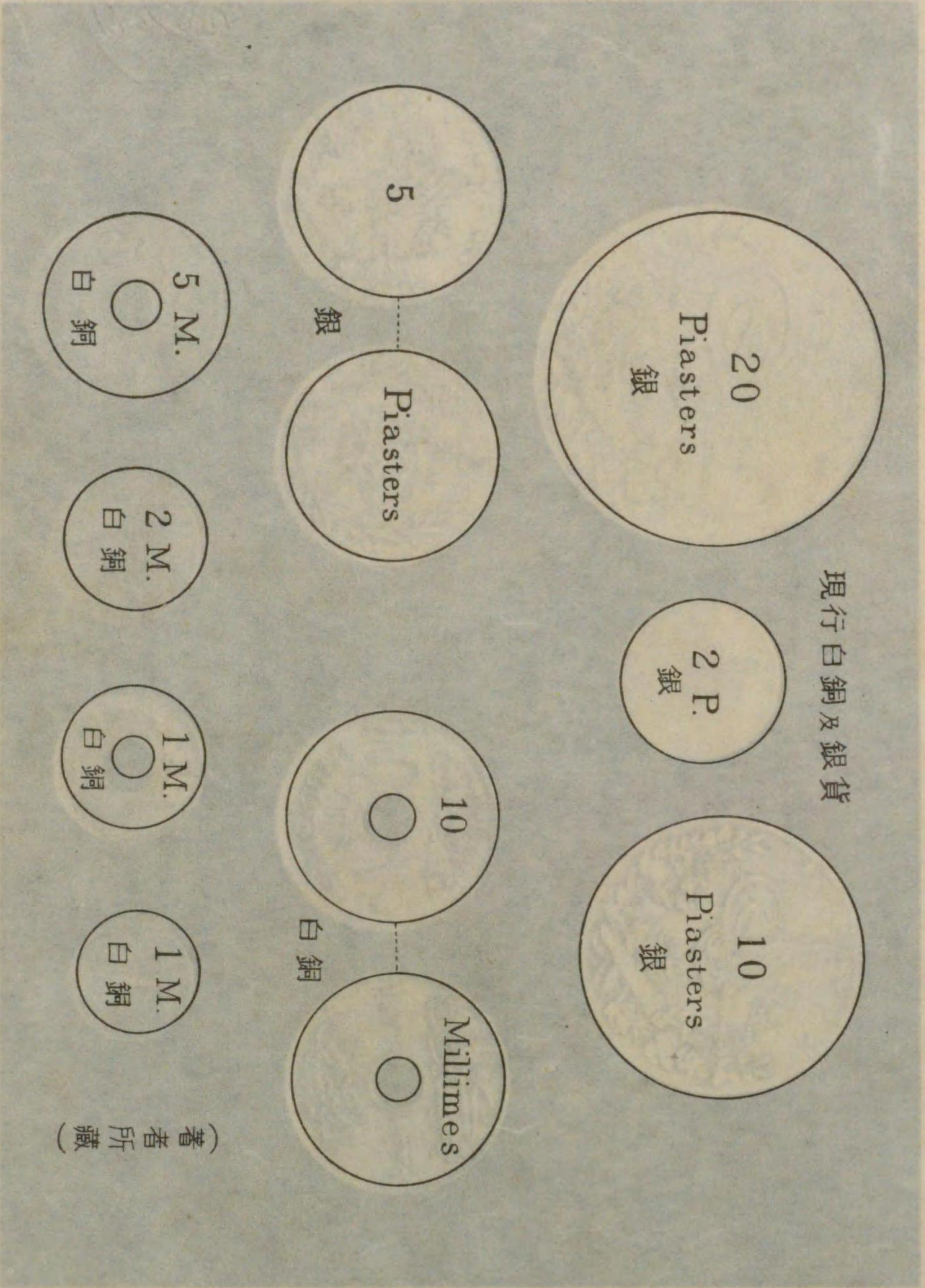
現行 50 Piastres 紙幣表面・原寸。(著者所藏)

5.
28

現行 50 Piastres 紙幣裏面・原寸・(著者所藏)



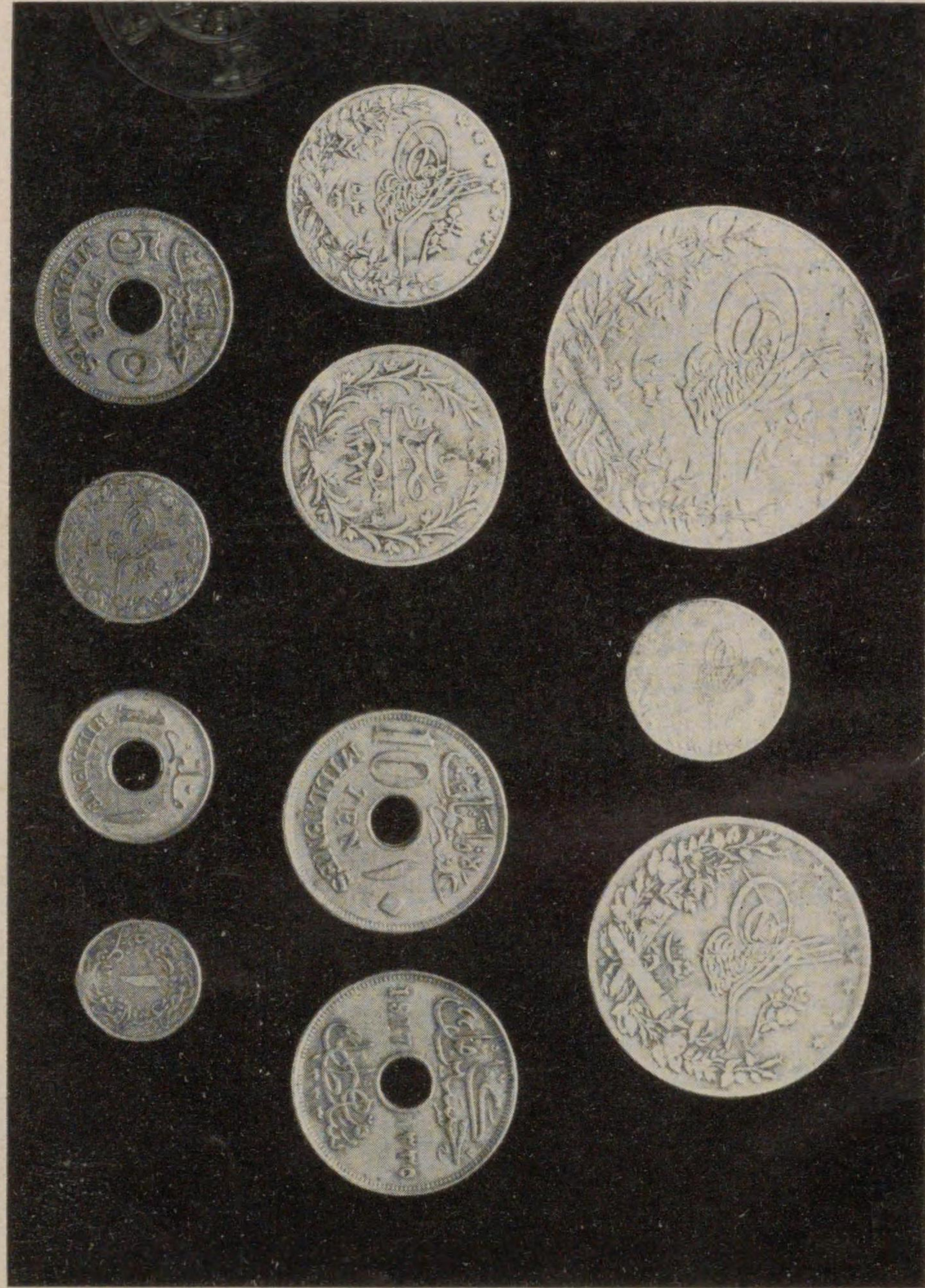
55
28



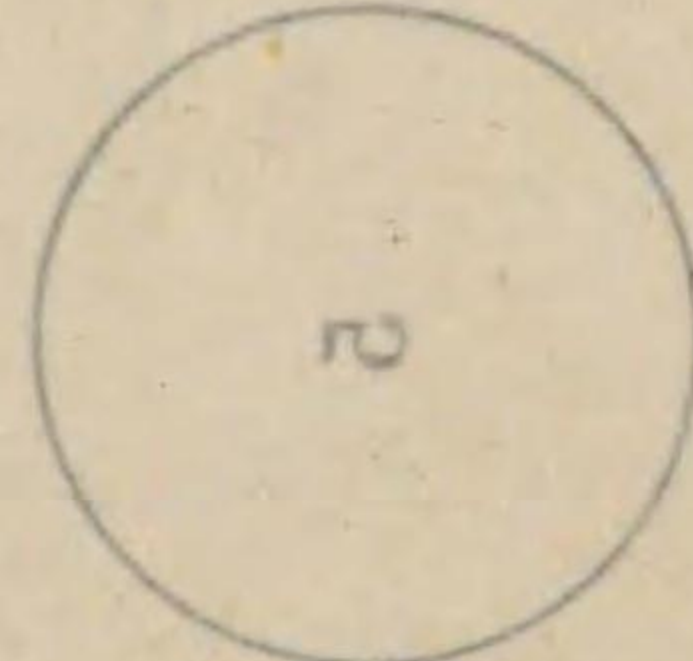
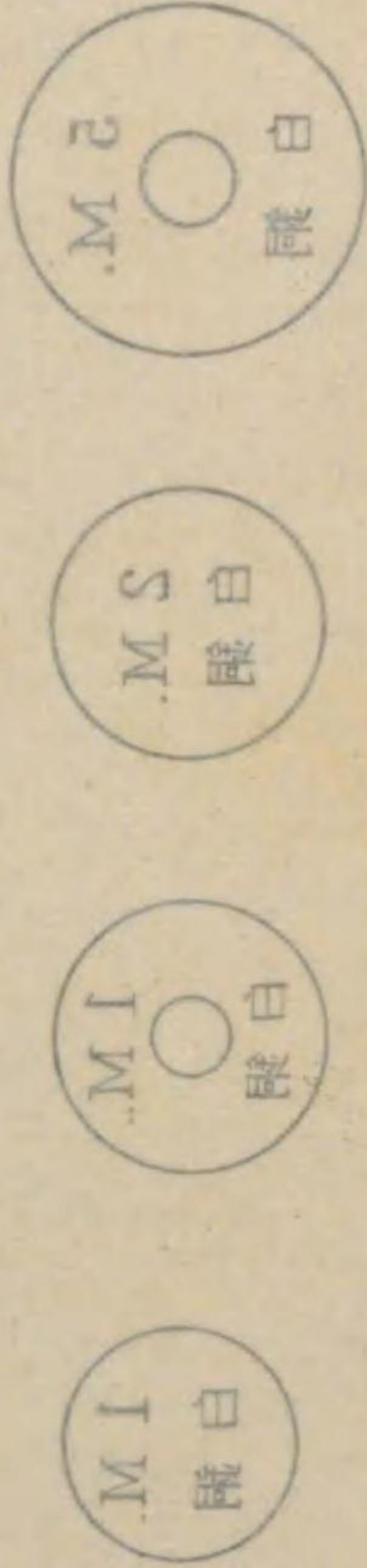
附 凡 上 等 大

55
28

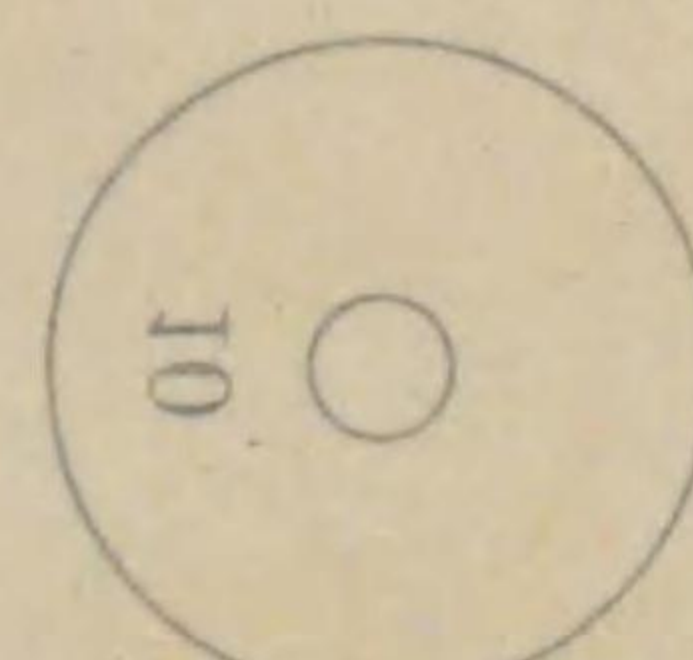
何れも大



(香港幣圖)



銀



白銀

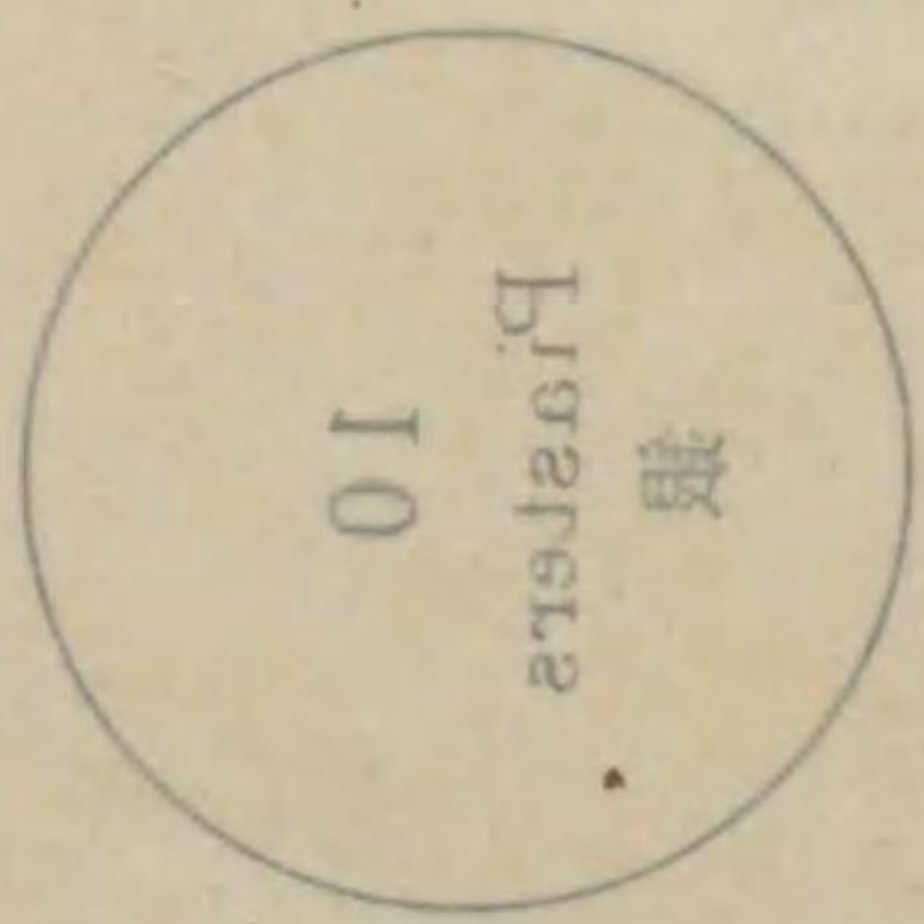


銀



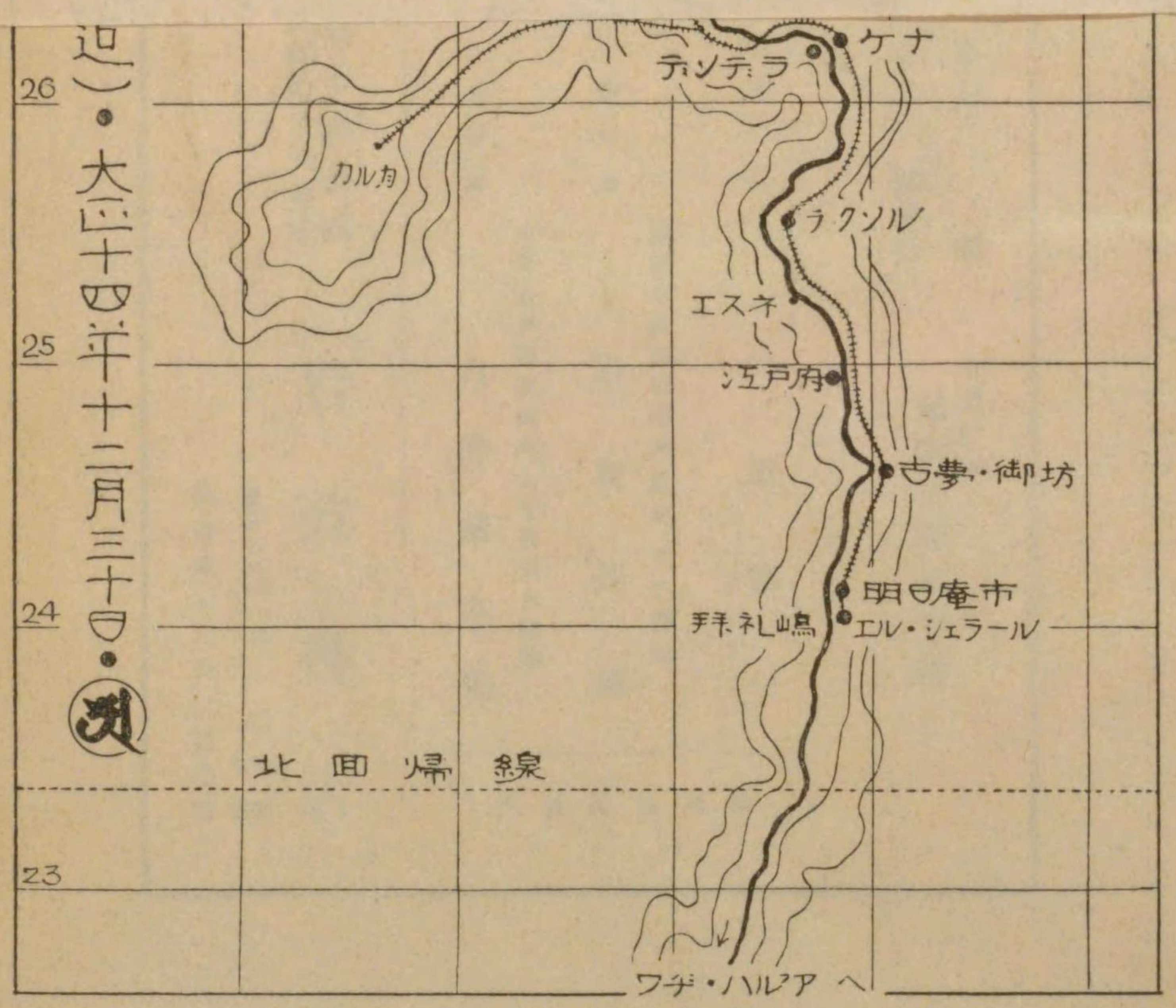
銀

真貨及白銀貨

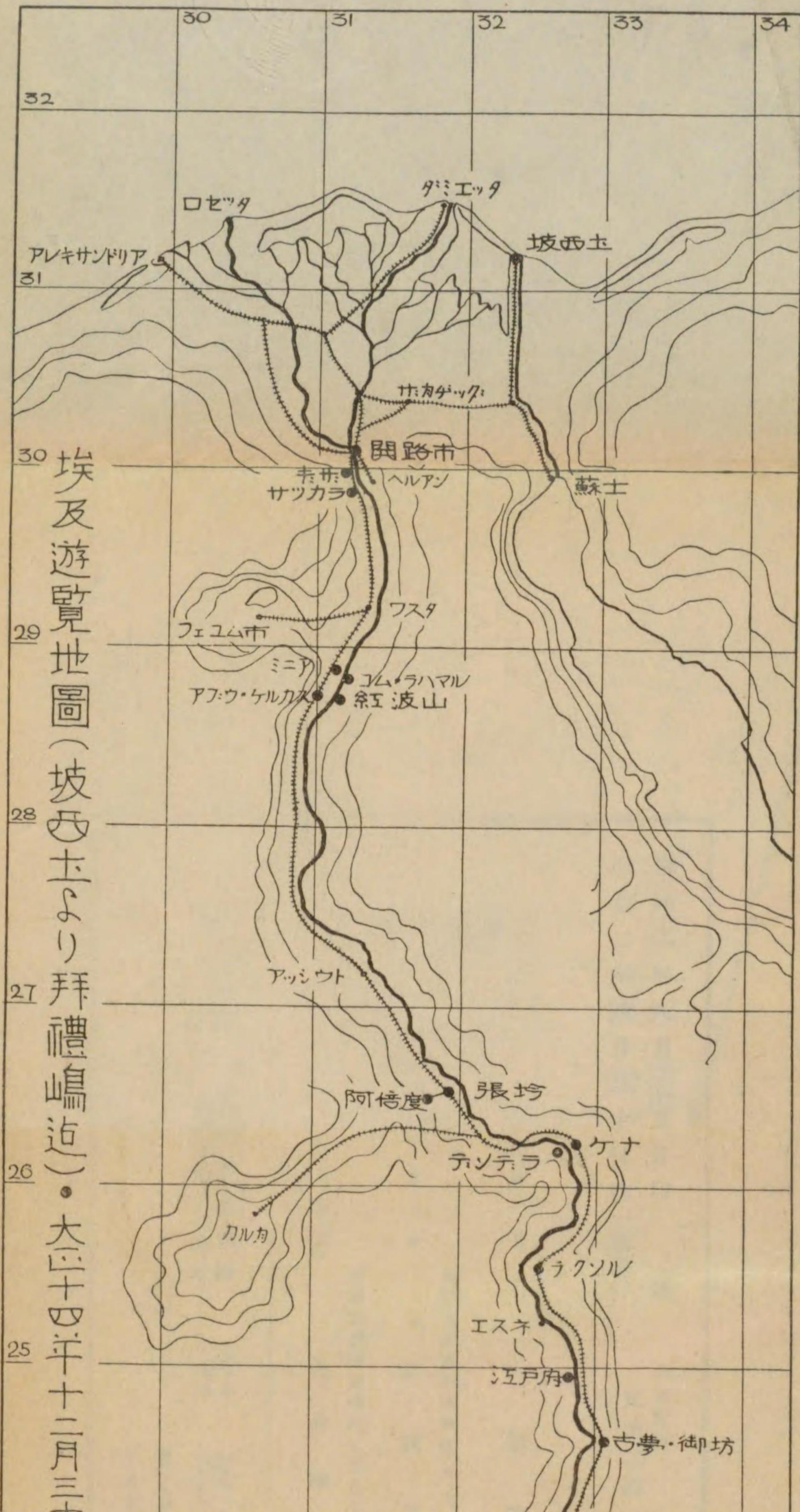


銀

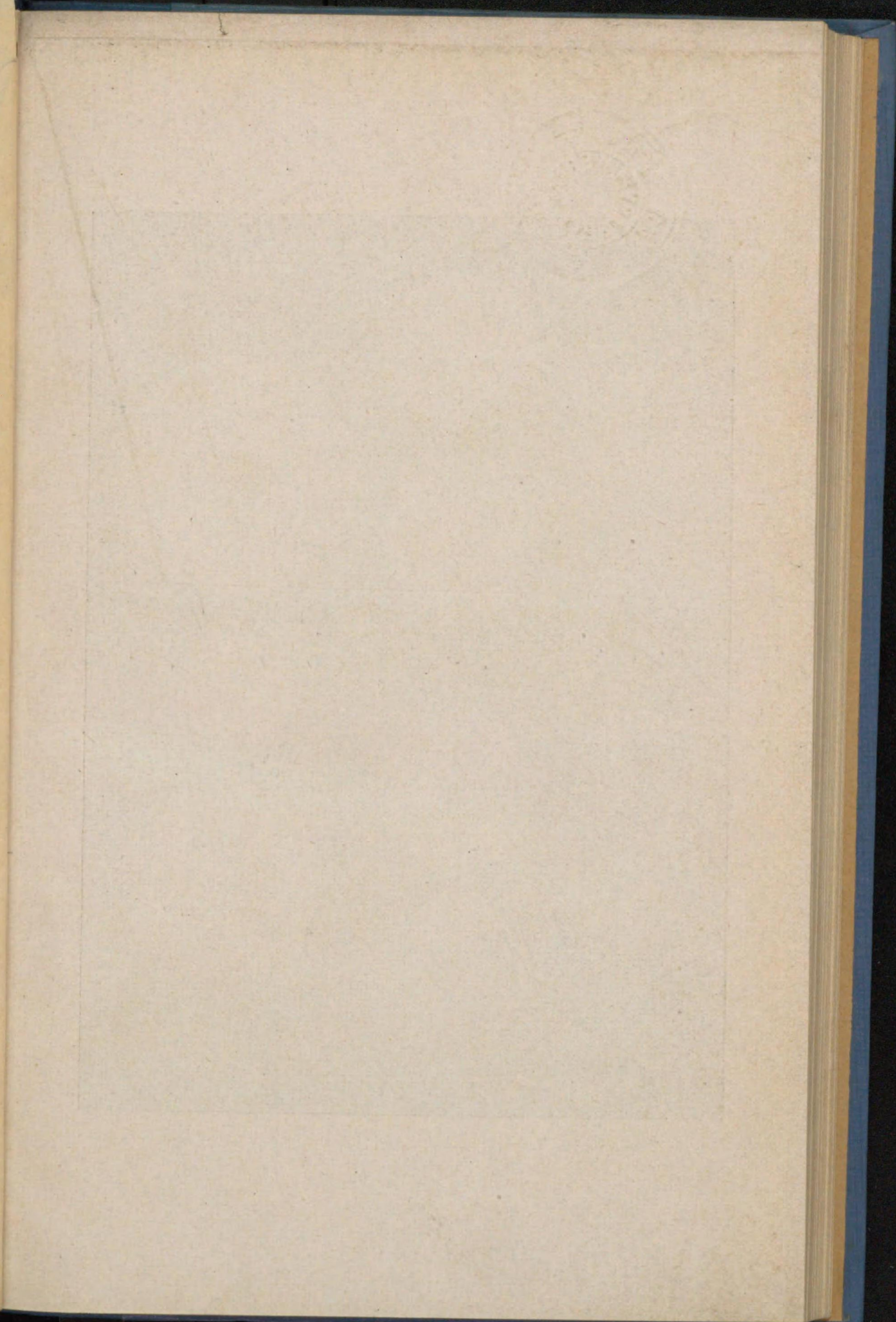
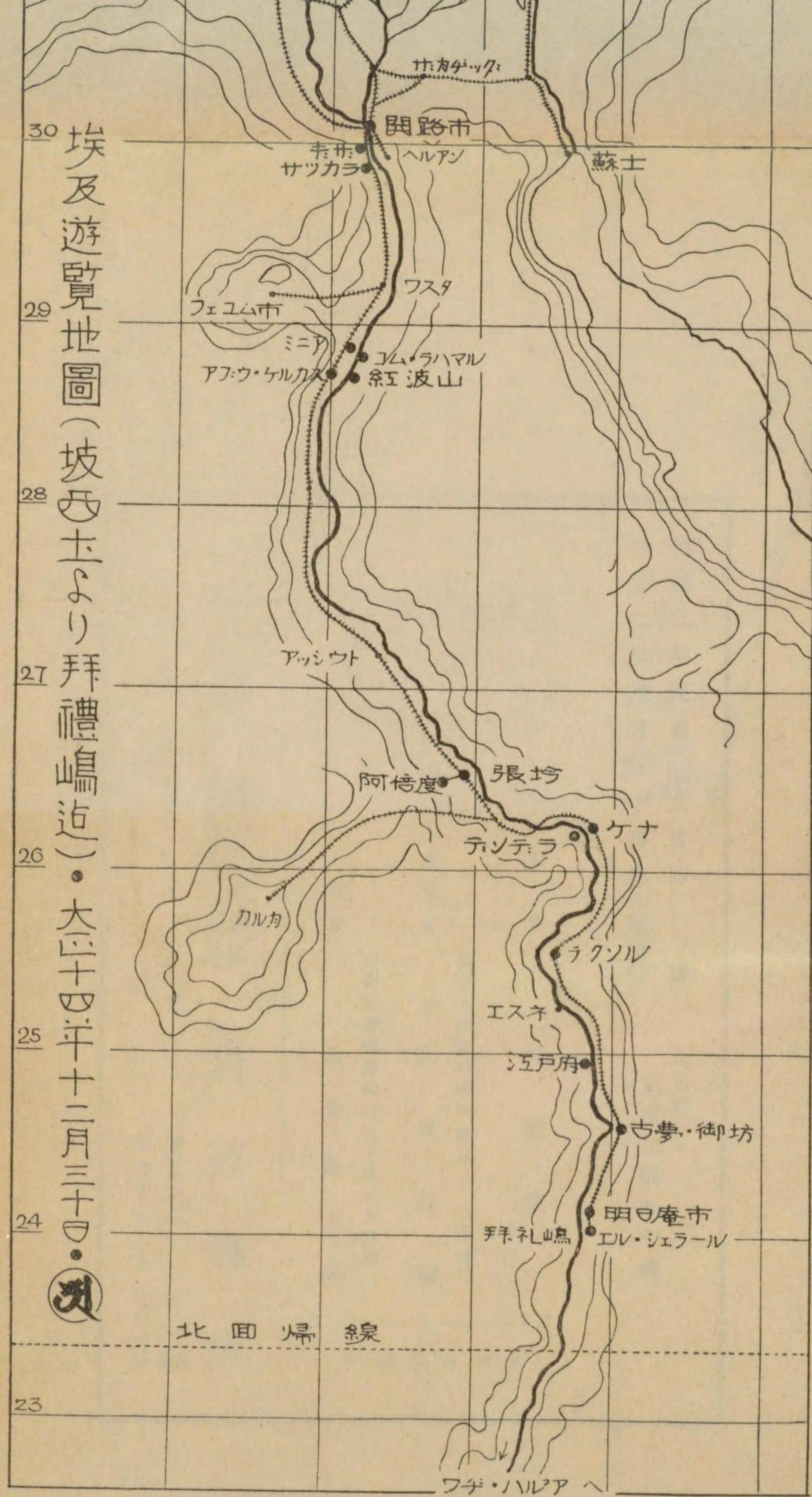
55
28



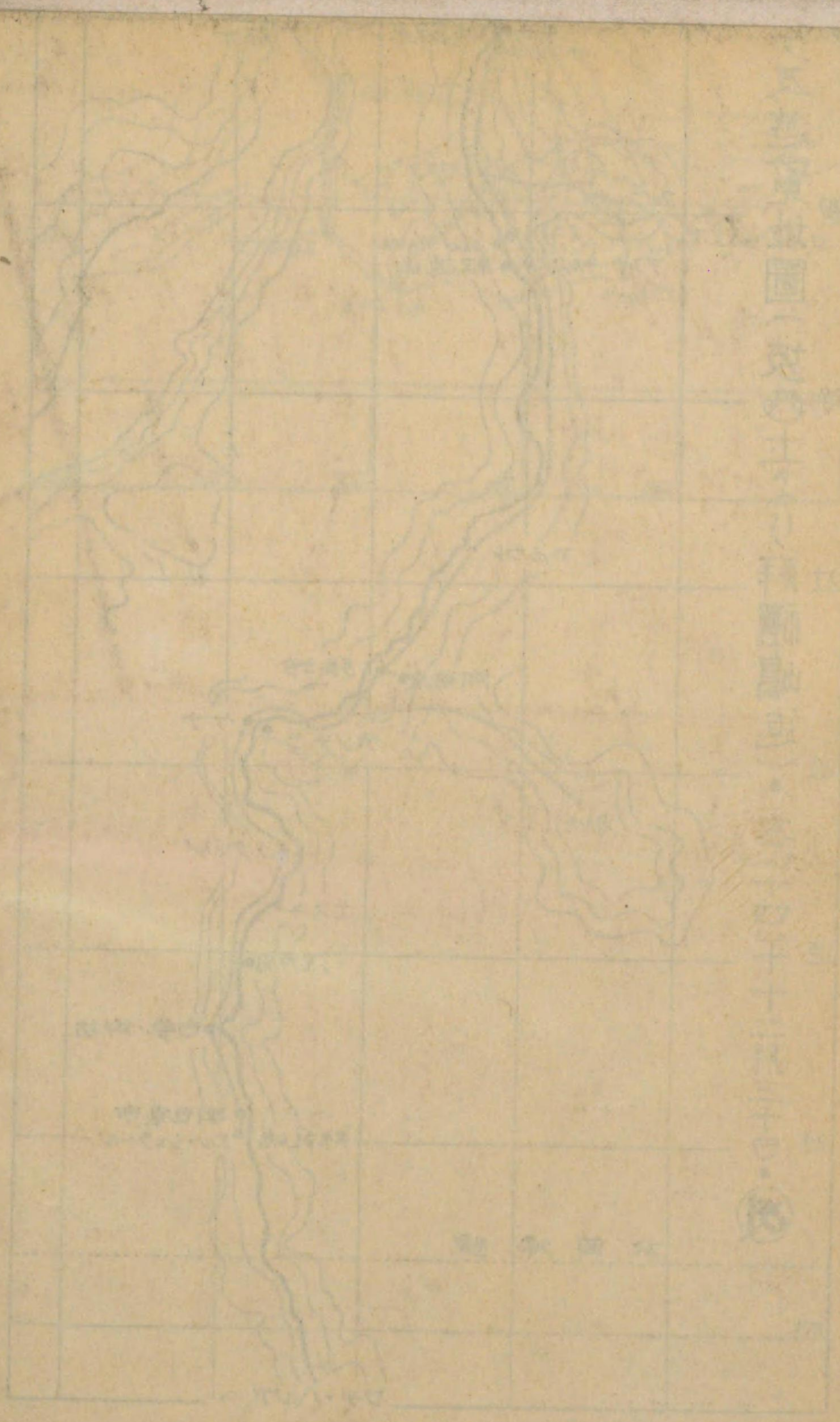
55
28



55
28



55
28



昭和二年八月二十五日印
昭和二年八月三十日第一刷發行

埃及紀行

定價二圓五十錢

有所權版

著者 天沼俊一

發行者 岩波茂雄

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區南神保町十六番地

東京市神田區錦町三丁目十八番地

精興社印刷所

發行所

東京市神田區
南神保町十六番地

岩波書店

電話九段(33)二二〇〇九八番
振替東京二六二四〇番

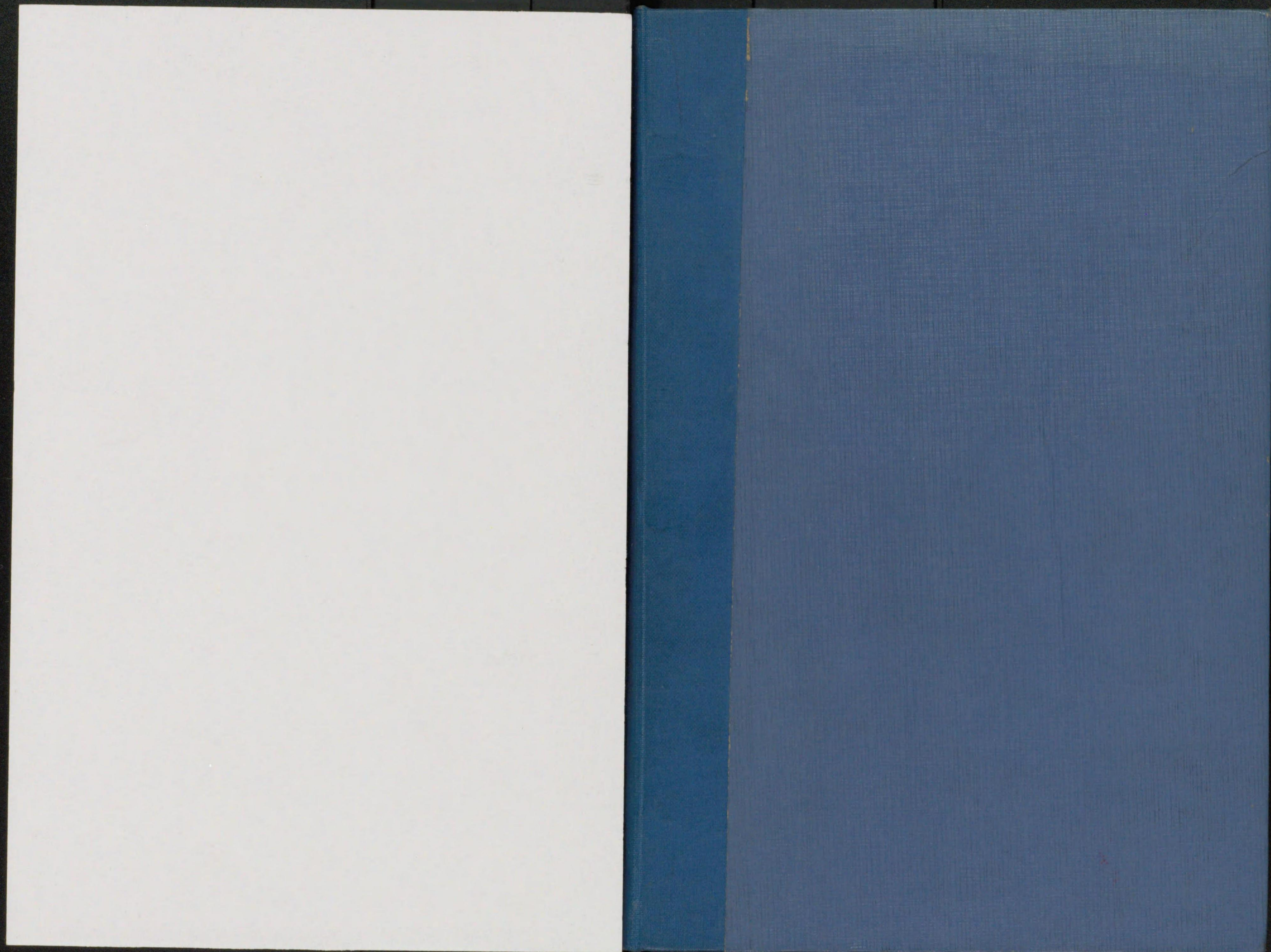
55
28

目書小化文店書波岩

◇ 批 評 集	◇ 日 本 精 神 史 研 究	◇ 古 寺 巡 禮	◇ 日 本 古 代 文 化	◇ 偶 像 再 興	◇ 山 中 雜 記	◇ 人 格 主 義	◇ 合 本 三 太 郎 の 日 記	◇ 和 文 ケ ー ベル 博 士 續 々 小 品 集	◇ 和 文 ケ ー ベル 博 士 續 小 品 集	◇ 和 文 ケ ー ベル 博 士 小 品 集
小宮豊隆著	和辻哲郎著	和辻哲郎著	和辻哲郎著	和辻哲郎著	安倍能成著	阿部次郎著	阿部次郎著	久保勉譯	久保勉譯	久保勉譯
定價貳圓貳拾錢 送料書留拾八錢	定價參圓貳拾錢 送料書留廿七錢	定價貳圓五拾錢 送料書留拾八錢	定價貳圓五拾錢 送料書留拾八錢	定價貳圓 送料書留拾八錢	定價貳圓參拾錢 送料書留拾八錢	定價貳圓八拾錢 送料書留廿七錢	定價貳圓五拾錢 送料書留拾八錢	定價貳圓五拾錢 送料書留拾八錢	定價貳圓五拾錢 送料書留拾八錢	定價貳圓五拾錢 送料書留拾八錢

556

282

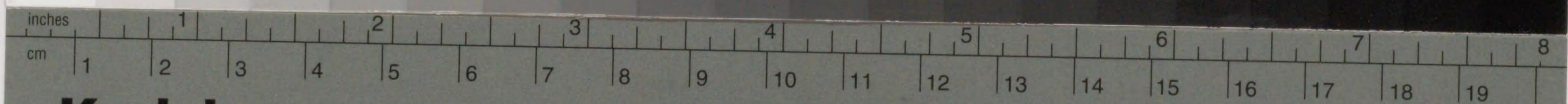


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black